

鳥博日記

| [次頁](#)▶

March19日Tuesday: 2024年3月の鳥のサイエンストークを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



△知床半島で調査のために許可を得て捕獲されたオオムシクイ。

3月16日に、2024年3月の鳥のサイエンストークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の齋藤武馬さんに「独立種となったオオムシクイは北海道のどこで繁殖するのか?」と題してお話しいただきました。

オオムシクイは、スズメ目ムシクイ科に属する小鳥で、最近までメボソムシクイと同種であると考えられていました。齋藤さんたちが2010年に出版した研究により、ユーラシア大陸から日本にかけて分布しているメボソムシクイ上種は、ユーラシア大陸に広く分布するコムシクイ、ロシアのカムチャッカ半島から千島列島およびサハリンに分布するオオムシクイ、本州から九州に分布するメボソムシクイの3種に分けられました。

この3種は形態にわずかな違いがみられるものの、その外見から見分けるのは非常に困難です。しかし、鳴き声は大きく異なっており、コムシクイは「ジジジ...」と単調な声で、オオムシクイは「ジジロジジロ...」と聞こえるリズムカルな声で、メボソムシクイは「ジジジュリ、ジジジュリ...」と「銭取り、銭取り」と聞きなされる声でさえずります。

オオムシクイは、カムチャッカ半島、千島列島、サハリンが主な分布域であると考えられてきましたが、北海道でも繁殖期に見つかっています。本種は春の渡りの時期が他の多くの小鳥よりも遅く、5月下旬から6月中旬ごろまで中継地である平地の林で見られます。そのため、繁殖地かどうかの判別が他の鳥より難しいと考えられています。加えて、森林限界の山地で繁殖するために調査が難しいことから、正確な繁殖分布は長らく明らかになっていませんでした。

齋藤さんは、環境省レッドリストの見直しに伴う調査のため、北海道において過去の文献に繁殖期の記録のある地域を絞り込み、現地調査を行いました。まず、これまでも繁殖期に多く記録されてきた知床半島では、2019年と2020年に、知床連山、斜里岳、藻琴山、海別岳、知床沼の5つの地域で計20羽を観察し、3羽の成鳥を捕獲しました。さらに、餌運び中の成鳥を確認できたとのことで、これらの地域では繁殖していると考えられました。確認地点のは900~1500m付近の森林限界より少し高い標高で、ダケカンバやハイマツなどが生育する高山帯の植生だったとのことでした。密度は全体的に低く、正確な個体数は不明であるものの、分布域全体でも1,000羽に満たないと思われるとのことでした。

もう1地域、繁殖期の目撃情報のあった日高山系のベテガリ岳、芽室岳、パンケヌーシ岳の3か所では、2023年に行った現地調査では確認できなかったとのことでした。今後は、知床半島内で十分に調査できていない地域での生息確認調査を行うことや、別の年に繁殖期の目撃情報のある日高山系の芽室岳での再調査を行うことなどが課題だそうです。

講演のあとに、知床半島での低い生息密度や、知床半島だけに分布している原因、オオムシクイの繁殖地間での鳴き声や形態の違いなどについてご質問をいただき、齋藤さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に72人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、3月30日(土)まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=CRr8nGZsqqc>

次回、4月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の千田さんに、標識調査に用いられる足環と、その解読にまつわるエピソードなどをお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

メボソムシクイの分類に関する齋藤さんの論文

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjo/61/1/61_1_46/_article/-char/ja/

February19日Monday: 2024年2月の鳥のサイエンストークを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

< 2024-03 >

日 月 火 水 木 金 土
1 2
3 4 5 6 7 8 9
10 11 12 13 14 15 16
17 18 19 20 21 22 23
24 25 26 27 28 29 30
31

検索

ナビゲーション

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共有する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくろうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

[google.co.jp](#)





△サギの仲間のダイサギ。

2月17日に、2024年2月の鳥のサイエンストークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の岩見恭子さんに「鳥の学術標本作り・中級編2」と題してお話しいただき、学術標本の製作の実演もしていただきました。このようなライブ配信は、2021年7月、2022年12月に行った試みに続いて3回目となりました。

まず、鳥の標本を集める目的や保管方法などについてお話しいただきました。標本は、ある時代の実物の資料を保存することで、タイムカプセルの機能を果たします。そのため、時代ごとにできるだけ多くの標本を作って保存していくことが望まれます。標本を博物館で保存することで、より多くの人が利用できるようになります。また、利用の可能性を高めるため、採集場所や日時などの標本に関連した情報も併せて保存することが重要です。

このお話のあと、さっそく実際の製作を見せていただきました。今回は、首の長い水鳥であるダイサギを材料に、皮むきから縫い合わせるまでの一連の流れを見せていただきました。手元を写したカメラを使って、作業上のポイントを見せていただきながら解説していただいたので、どのように標本が作られているのかがよくわかりました。

基本的な手順はこれまでに配信したアカショウビンやウミネコと大きく変わりませんが、首の長い鳥では皮を剥く手順や芯の作り方に工夫が必要です。頭部を内側から返せない鳥では後頭部を切開して頭部の処理を行う必要があります（今回のダイサギではそのままひっくり返せました）。

通常の鳥では、首をまっすぐに伸ばし、芯になる1本の棒を頭骨から脚まで貫通させて形を整えます。しかし、サギのような首の長い鳥の場合、首を伸ばして標本の形を作ってしまうと収納スペースがかさんだり、破損しやすくなってしまいます。そのため、首を緩やかに体に反って曲げた形に作られます。このためには首の芯に針金を入れるか、ひもを頭骨から胴体の芯まで通し、固めに綿を巻き付けて柔らかく曲げる方法をとります。今回は、後者の方法での実演を見せていただきました。

講演のあとに、視聴者のみなさんとチャット機能を用いて質疑応答が交わされました。最後に標本に巻く紙の印刷面の向き、防腐剤の種類や塗り方、鳥の皮膚が乾燥してしまった場合の対処方法などについて、岩見さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に122人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信の見逃し配信は行いませんので、ご了承ください。

次回、2024年3月のテーマトークは、3月16日（土）に、山階鳥類研究所の齋藤武馬さんに、近年メボソムシクイから別種に分割されたオオムシクイの国内の繁殖地についてお話しいたします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

January24日Wednesday: 2024年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



▲伊豆諸島の鳥島から小笠原諸島の鴯島に移送されたアホウドリのヒナ

1月20日に、2024年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の平岡 考さんに、「北西太平洋の美しい海鳥アホウドリの歴史と未来」と題してお話しいただきました。

アホウドリは、ミズナギドリ目アホウドリ科に属する北太平洋で最大の海鳥で、翼を広げた大きさは2m以上に達します。かつては北西太平洋に数多く生息していましたが、人間による乱獲によって減少してしまいました。現在では国指定の特別天然記念物や、種の保存法などの指定を受けて保護されています。今回は、アホウドリと人間の関わりの歴史を振り返り、今後必要な取り組みについてお話しいただきました。

現在のアホウドリの繁殖地は、伊豆諸島の鳥島、沖縄県の尖閣諸島、再導入が行われている小笠原諸島の鴯島の3か所のみですが、かつては小笠原諸島や大東諸島、台湾周辺の島々などにより広く分布しており、その個体数は数百万羽に及んでいたと考えられています。

全国各地の縄文時代から近代の遺跡からもアホウドリ類の骨が出土しており、礼文島の遺跡からはアホウドリ類の上腕の骨を加工して作られた針入れも出土し

ています。江戸時代には、漂流した漁師が鳥島にたどり着き、島を埋め尽くすように生息していたアホウドリについての記録も残っています。また、1840年頃に編纂された「梅園禽譜」には、江戸の市中に迷行したアホウドリの巣立ち直後の幼鳥の記録も残されています。

時代は進み、明治時代になると、資源を求めて海洋島の開発が進みました。簡単に捕獲でき、大きな体から大量の羽毛が手に入るアホウドリは、羽毛布団の原料として乱獲され、1903年までに5,000,000羽ほどが殺されたと推定されています。山階鳥類研究所の創設者である山階芳廬博士は、1929年に鳥島を訪れ、約2000羽が生息していたことを映像とともに記録に残しています。山階博士の調査結果を受けて1933年に鳥島は禁猟区に指定されましたが、その直前に駆け込み的な大量の捕殺があったとされています。

第二次世界大戦に入ると詳細な生息状況は不明になってしまいましたが、戦後になって1949年3月から4月にGHQのオリバー・オースチン氏が海上から調査を行いました。この時、繁殖期であるにも関わらずアホウドリの姿が見られないことから、「絶滅した可能性が高い」という主旨の報告を行いました。しかし、その2年後の1951年、鳥島に駐在していた気象庁の職員によって、約10羽が鳥島南端の燕崎にいるのが発見されました。この再発見を受けて、山階鳥類研究所の研究者が気象庁の船に便乗して鳥島に渡航し、標識調査が開始され、測候所が廃止になる1965年まで継続されました。

1970年代後半からは、長谷川氏による調査活動が始まり、繁殖成功率などのデータを取られるようになりました。その結果、燕崎の急斜面で崩れた土に卵やヒナが埋まってしまうために巣立ち率が低いことが明らかになり、ハチジョウスキの移植などの環境整備が行われました。しかし、この取り組みはあまりうまくいかず、島内の別の場所に繁殖地を移す試みの重要性が高まってきました。

長谷川氏は、デコイと音声を用いて海鳥の繁殖地を移動させた先行研究がアホウドリにも応用できると考えて日本に紹介しました。日本のバードカービングの草分けである内山春雄氏は、長谷川博士のアイデアを聞いて、アホウドリのデコイの木型を作成し、山階鳥類研究所と協力して1991年から鳥島への設置が始まりました。この取り組みもなかなか成功しませんが、2000年代後半になってようやく新繁殖地での繁殖が軌道に乗るようになって、鳥全体の巣立ち率の向上につながりました。

これまでの取り組みによって鳥島の中で2つの繁殖地ができ、個体数も安定してきました。しかし、鳥島は火山島であり、近年でもたびたび大規模な噴火が起こっており、噴火の時期によっては繁殖個体の全滅などのリスクもあります。また、尖閣諸島は政治的に不安定であり、モニタリングなどの調査を行うことができません。このような理由から、安定した第3の生息地への再導入の必要性が高まっています。

そこで、かつての生息地であり、上記のような問題のない、小笠原諸島の鴛島が移転先として選ばれました。2008年から2012年までの5年間に鳥島からヒナを移送し、巣立ち場所を覚えたヒナが同じ場所に戻る習性を利用して、この場所に繁殖地を形成しようという取り組みです。その結果、2016年に最初のヒナが巣立ち、それ以降も2023年までに11羽のヒナが巣立ちました。鴛島への繁殖地の形成はまだ道半ばで、今後時間をかけて取り組みを継続していくとのことです。

鳥島では2022-23年の繁殖期には1088羽のひなが確認され、総個体数は7900羽以上まで回復しました。しかし、この増加を受けて、公的な調査の予算は削減される傾向にあるそうです。個体数は回復傾向にあるものの、近年の研究によりアホウドリは2種が含まれることが判明したことによる様々な新たな課題の解決に向けた調査や、人間活動による悪影響の調査を行うため、鳥島でのアホウドリを毎年調査する必要性は失われていません。

そこで、山階鳥類研究所では、アホウドリの保全活動とモニタリングを継続するためのマンスリーサポーター（500円/月）の募集を始められました。詳しくは、以下のウェブサイトからご確認ください。

<https://www.yamashina.or.jp/albatross/kifu.html>

講演のあとに、小笠原に導入された集団に2つの系統が含まれることの問題についてご質問をいただき、平岡さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に62人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、2月3日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=JP_gCzFX0zl

次回、2月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の岩見さんに、標本製作の実演をしながらお話いただく予定です。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

December19日Tuesday: 2023年12月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



▲夜の道路に現れたアマミヤマシギ。

12月16日に、2023年12月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の水田 拓さんに、「アマミヤマシギはどれくらい生きるか、どれく

らい移動するか」と題してお話しいただきました。

鳥に足環などの目印を付けて寿命や渡りを調べる「鳥類標識調査」は、19世紀の終わりにデンマークで始まり、日本でも1924年に東京都でゴイサギに足環を付けられたことで開始されました。現在では、山階鳥類研究所が環境省から委託を受けて実施しています。1961年から2020年までに500種以上、620万羽以上の鳥に足環が付けて放されました。

鳥類標識調査では、生きていた期間や動いた距離だけではなく、鳥類のモニタリングに重要な個体数の推定や、絶滅危惧種の保全のために重要な生態の解明、鳥インフルエンザなどの動物由来の感染症の対策に必要な伝播経路の調査など、さまざまな情報を得ることができます。これらの情報は、生物多様性の損失を食い止める目標である「ネイチャー・ポジティブ」や、人間・家畜・野生動物の健康を一体として目指す「ワンヘルス・アプローチ」にも寄与するものです。

水田さんが活動されていた奄美大島では、アマミヤマシギを含むさまざまな固有種が生息しており、その保全に向けた様々な取り組みが行われています。アマミヤマシギは森林に生息するシギの仲間で、世界で奄美群島でのみ繁殖します。過去の森林伐採、マンガースなどの外来の哺乳類による捕食、交通事故などが脅威であると考えられており、国内希少野生動物植物種に指定されています。その保全のために、標識調査を含む個体群のモニタリング調査が2002年から行われています。

この調査は、夜間に林道上でアマミヤマシギを捕獲し、金属リングと色足環を使って標識した後、その個体を再び確認するという方法で行われました。調査は2003年から2018年まで主に5か所の調査地で行われ、5年程度で調査地を移動して行われました。704羽のアマミヤマシギに対して標識が行われ、そのうち258羽（37%）の個体が1回以上再確認されました。2回以上確認された個体は9%程度でした。

標識から再確認までの期間については、再確認された258羽のうち、69%にあたる178羽は1年未満での確認例でした。3年を越える再確認は14羽（5%）ほどで、最も長い放鳥から再確認までの期間は7年強でした。再確認までの期間には性別による違いはありませんでしたが、成鳥で放鳥した個体は幼鳥で放鳥した個体よりも再確認までの期間が長いという結果になりました。

標識場所から再確認した地点までの移動距離は、119個体でデータが得られました。これらのうち、84%が1,000m以内の移動であり、最も長い距離の移動例は3,112mでした。再確認までの時間と移動距離には顕著な関係は認められず、移動距離は性別によって大きな違いは見られませんでした。放鳥時に幼鳥だった個体は成鳥になるまでにより長距離を移動する傾向がありました。

再確認される個体の割合がそれほど高くないことから、アマミヤマシギは同じ個体がいつも林道を繰り返し利用するわけではないらしいということが示唆されました。また、幼鳥は成鳥よりも再確認までの期間が短いことから、幼鳥は成鳥より死亡率が高い、もしくは、より速くに分散して再確認されづらいのではないかと考えられます。さらに、成鳥と幼鳥の移動性の違いからは、一度定着したらあまり移動しない、ということが示唆されました。

アマミヤマシギの標識調査のデータからは、再確認される鳥の割合を用いた個体数の推定や、より詳細な生存期間の推定を行うことができます。また、林道への出現傾向から交通事故の対策を行う、捕獲時の糞などの採取から食性を把握するなど、様々な発展が見込まれるとのこと。今後、保全に役立つこのような取り組みを視野に入れて標識調査を実施していきたいとのこと。

講演のあとは、アマミヤマシギの成鳥と幼鳥の形態的な違いや、なぜ夜間に道路に出てくるか、奄美大島以外の奄美群島での生息状況などについて、多くの質問やコメントが寄せられ、水田さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に61人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、12月30日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=zpN1WsmqBjs>

次回、1月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の平岡 考さんに、アホウドリのたどった歴史とこれからの保全についてお話しいただく予定です。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

November 7日Tuesday: ジャパンバードフェスティバル2023

カテゴリ: General 投稿者: someya

11月4日(土)と5日(日)の2日間、我孫子市でジャパンバードフェスティバル2023が開催されました。コロナ禍ではリモート開催や会場の規模を縮小して行ってきました。4年ぶりにコロナ禍以前の状態に戻しての開催となりました。

2019年以降のフル開催、再開するイベントの準備をしながら、来場者の方をお待ちしました。会場の1つである鳥の博物館も、開館と同時に多くの来館者で賑わいました。その様子の一部をご紹介します。来年も多くの来場者で賑わうことを楽しみにしています。



▲外のテントブース

鳥に関係する団体や食べ物のテントブースがたくさん



▲鳥の博物館友の会のテントブース ワークショップが行われていました



▲こちらも友の会のテントブース オリジナルカレンダーが販売されましたが完売しました



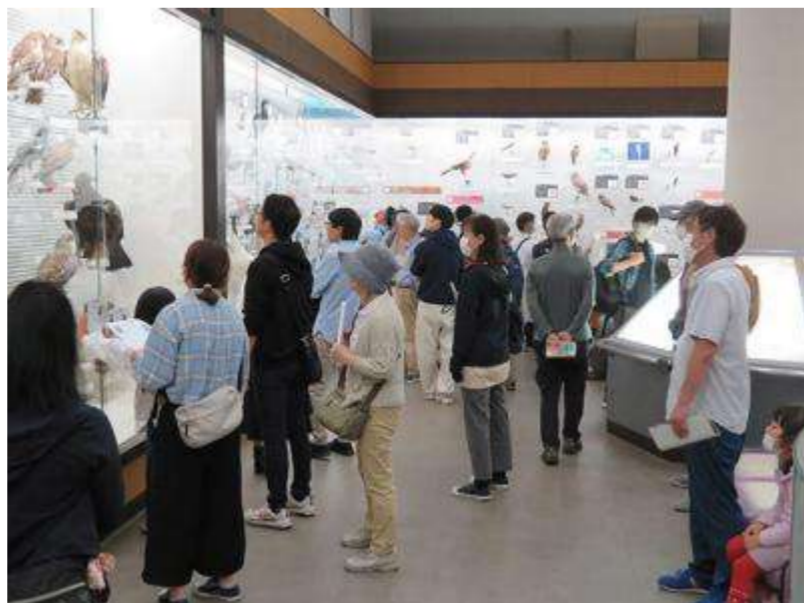
▲鳥の博物館内 ミュージアムショップも混雑していました



▲午前の館内イベントはハシビロコウの帽子づくり 満員御礼



▲午後の館内イベントは鳥博クイズ 満員御礼



▲展示をみながら答えるクイズです



▲鳥博クイズの全問正解者にはオリジナルポストカードをプレゼントしました

November 5日Sunday: 第33回JBF鳥学講座を開催しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



11日4日（土）に、我孫子市生涯学習センター「アピスタ」のホールで第33回JBF鳥学講座を開催しました。今回は、「小笠原諸島の海鳥は、増えたり、減ったり、海を越えたり、越えなかったり」と題して、森林総合研究所鳥獣生態研究室長の川上和人さんにお話しいただきました。

川上さんは、小笠原諸島をフィールドに、島の鳥の生態系の中での機能や保全管理について研究されています。今回は、長年取り組んでいらっしゃる小笠原諸島の海鳥を題材に、その進化から保全にいたるまでの様々な研究成果を中心にお話しいただきました。

小笠原諸島はこれまでに一度も日本本土とつながったことのない海洋島で、在来の陸上の捕食者がいませんでした。そのため、海鳥の高密度のコロニーが形成され、21種の海鳥の繁殖記録があります。

海鳥は高密度でたくさん繁殖します。そのため、島の中を歩き回ることによって森林の下層の植生の発達が妨げられること、地面に巣を作るためのトンネルを掘り、鳥の巣を好む昆虫に生息場所を提供すること、海で餌を食べて島で糞をすることによって窒素やリンを島の陸上に運ぶこと、植物の種を体に付けて島の間を運ぶことなどのさまざまな生態的な機能があることが分かってきました。

小笠原で繁殖する海鳥の中には、世界でもここだけで繁殖するものがあります。それは、クロウミツバメ、オガサワラミズナギドリ、オガサワラヒメミズナギドリの3種です。クロウミツバメは世界で南硫黄島の山頂付近でしか繁殖していないウミツバメです。オガサワラミズナギドリは南硫黄島と東島だけで繁殖する鳥で、かつてセグロミズナギドリの1亜種とされていましたが、セグロミズナギドリのグループからは遺伝的にかなり異なっていることが分かり、別種とする提案が受け入れられています。オガサワラヒメミズナギドリは、ハワイで採集されていた標本をもとに2011年に新種として記載されたもので、2000年代にしばしば小笠原で見つかった小型の種不明のミズナギドリもこれと同種であることが判明しました。その後、父島列島の東島で営巣しているのが見つかり、現在まで世界でこの場所での繁殖地が見つかっていません。

小笠原諸島に広く分布するアナドリという海鳥は、世界中の海に分布していますが、その個体群の間での系統的な違いなどはよく分かっていませんでした。川上さんは、ポルトガルの研究チームとの共同研究で、大西洋、ハワイ、小笠原の個体のそれぞれのDNA配列を比較し、小笠原の集団は、他のすべての集団から最も早く、約85万年前に分岐したことが分かりました。地理的な距離のより近いハワイの集団は、小笠原の集団よりも大西洋の集団により近縁だったので、なぜこのような現象が起こっているのかははっきりとはわかっていませんが、小笠原とハワイの間には海鳥の食物の量の指標になる植物プランクトンの量が少ないこと、渡り経路が異なることなどが原因として考えられています。

小笠原諸島に人間が入植したのは1800年代で、彼らによってネズミ類、ネコ、ノヤギなどの外来の哺乳類が持ち込まれました。鳥ごとに侵入した哺乳類の種数と現在の海鳥の繁殖種数を比較してみると、これには強い負の相関がありました。外来種の哺乳類は、海鳥の卵やヒナ、親鳥の捕食や、植物を食べて森林を草原に変えてしまったことで、海鳥の個体群の減少を引き起こしたのです。

その後、小笠原では様々な自然再生事業が展開されるようになり、植生を破壊するノヤギの駆除は父島を除くすべての島で完了しました。その結果、クロアシアホウドリ、カツオドリ、オナガミズナギドリ、アナドリなどの海鳥につ

いては増加していることが分かっています。しかし、小笠原の過去の海鳥相はあまりよくわかっておらず、これらの在来種の増加は、回復と言ってよいのかどうか分かりません。

そこで、川上さんたちは海鳥繁殖地である南島の鍾乳洞から海鳥の骨を発掘し、人間が入植する前の海鳥相を復元しました。その結果、現在は限られた島で少数が繁殖しているだけのシロハラミズナギドリ、オガサワラミズナギドリ、オガサワラヒメミズナギドリの3種の骨が非常に多く出土し、この3種だけで全体の約70%を占めることが分かりました。このうちいくつかの骨を年代測定してみると、いずれも数千年前から数百年前のもので、幼鳥の骨も出てきました。そのため、人間の入植前まではたくさん繁殖していたけれど、外来種の侵入によってこれらの種類は大きく減少したことが分かりました。すなわち、回復しているように見えている海鳥の個体群は、実は分布の狭い小型の固有種から、広域に分布するより大型の種に入れ替わってしまっていたのです。

では、これまでの保全活動は失敗してしまったのでしょうか？ 川上さんは、現在の状況は回復までステップの一つだと説明されました。まず、海鳥の生態系の中での機能が元に戻りつつあるのが現在の状態で、これから小型の固有種を含むかつての海鳥相に近づいていくために多様性の回復を進めていくことが重要とのことです。このように、かつてのあるべき姿がどのようなものであったかを復元し、目指すべき目標を定めていくことは、小笠原の海鳥に限らず、私たちの身近な生物多様性を保全していくために普遍的に重要なことではないか、というお話で講演を締めくくられていました。

講演のあとには、「なぜ海鳥には保全対策で増える種と増えない種がいるのか」、「海鳥の繁殖場所の好みと分布の広さに関係はあるか」などについて来場者からの質問をいただき、川上さんにわかりやすくお答えいただきました。特に、「何のために希少な海鳥を保全するのか」というご質問に対しての、「生態的な機能や生態系サービスの有無にかかわらず、私たちの知的好奇心を刺激してくれることそのものが、その生物を守る意義ではないか」というお答えは、生物多様性を守っていきたく考える多くの人を勇気づけるものだと感じました。

今回の鳥学講座は、同時中継の別会場を合わせて198人の方にご参加いただきました。ご好評をいただいたため、会場の都合で入室をお断りせざるを得なかったみなさまにはお詫びいたします。ご講演いただいた川上さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

参考資料：

今回のお話のもとになった論文の日本語プレスリリース

・オガサワラヒメミズナギドリの営巣地の発見
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2015/20150324/index.html>

・オガサワラミズナギドリの系統の研究
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2018/20180125/index.html>

・アナドリの系統の研究
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2023/20230411/index.html>

・鍾乳洞で見つかった骨からわかった海鳥相の変化
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2022/20220720/index.html>

今回のお話の内容と関係した川上さんの著書

「無人島、研究と冒険、半分半分。」
<https://www.tokyo-shoseki.co.jp/books/81714/>

November 1日Wednesday: 中学生が博物館のお仕事を体験 (2023.10.25)

カテゴリ: General 投稿者: someya

我孫子市我孫子中学校の生徒さんが職場体験に来館されました。博物館ではどのような人が働いていて、どのような仕事をしているのか、知ってもらえる貴重な機会です。

博物館での仕事は展示をするだけではありません。職場体験をきっかけに博物館に興味を持ってもらえたらいいなと思いながら取り組み、私にとってはあつという間の一日でした。展示室での作業、標本が収蔵してある収蔵庫での作業、イベントの準備など、様々な業務を体験してもらいました。



▲本で調べながら分類順に標本をしまいました



▲ミュージアムショップで販売業務を体験



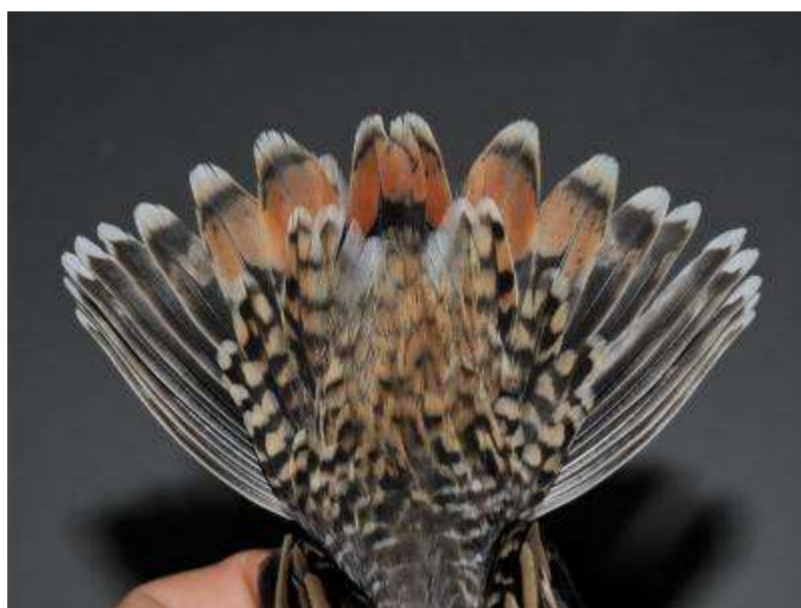
▲見やすいパネルって？解説で使うシートや案内表示をつくりました



▲作品が完成しました

October22日Sunday: 2023年10月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



△チュウジシギ雄成鳥の尾羽（20枚の個体）

10月21日に、2023年10月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、鳥の博物館の小田谷が「ジシギの尾羽を調べてみたら」と題してお話しました。

ジシギ類とは、チドリ目シギ科のうち、タシギ属とそれに近縁な数種を含むグループです。鳥の尾羽は12枚のものが多く、10枚や14枚のものもありますが、種の中での尾羽の枚数は比較的安定しています。ところが、ジシギ類は14枚以上の尾羽を持ち、近縁種の間でその枚数が異なること、種の中で様々な枚数を持つものがあることが知られています。しかし、その枚数ごとの頻度などに関する情報は乏しく、種によっては混乱が生じていました。

そこで、ジシギ類の種ごとの尾羽の枚数の変異を整理し、その原因を調べるため、標識調査の際に捕獲した生きた鳥の尾羽の枚数を数え、その形態（長さ、太さ、羽色）を記録する調査を行いました。2012年から2023年まで、4種のジシギ類について合計1241羽の尾羽を調査し、その枚数ごとの頻度を調べました。その結果、種ごとに以下のことが分かりました。

- ・タシギでは変異の幅は12－16枚で14枚の個体が最も多い
- ・オオジシギでは変異の幅は14－20枚で、16枚と18枚の個体が多い
- ・チュウジシギでは変異の幅は16－22枚で、18枚と20枚の個体が多い
- ・ハリオシギでは変異の幅は22－28枚で、24枚と26枚の個体が多い

チュウジシギでは、多くの文献に「尾羽の枚数は20－22枚」と記載されていますから、このことは実際の頻度の分布と異なっていることが分かりました。このことから、尾羽が18枚の個体について、オオジシギなのかチュウジシギなのかは、他の特徴も併せて判断する必要があるという事がいえます。

それでは、種内で見られる変異は何によって決まっているのでしょうか？この問いについて、オオジシギとチュウジシギを対象に、詳しく調べてみました。これまでに、この2種では、先行研究によって、性別によって尾羽の枚数が異なることが示されていました。私の研究では、オオジシギについては年齢にかかわらずサンプルを収集し、チュウジシギについてはサンプル数を増やし、枚数以外の形態についても分析を行いました。

オオジシギ、チュウジシギともに、雄のほうが雌よりも尾羽の枚数が多い傾向がありました。特に、チュウジシギの尾羽が18枚の個体は、そのほとんどが雌でした。チュウジシギは2つの個体群で尾羽の枚数の頻度に大きな違いはありませんでしたが、西側の個体群のほうが21－22枚の個体の割合が高い可能性があります。尾羽の長さは、どの種でも成鳥のほうが幼鳥よりも長く、雄のほうが雌よりも長い傾向がありました。また、チュウジシギの個体群の間では、西側の個体群のほうが尾羽が短い傾向がありました。

尾羽の幅は、中央から5番目の尾羽で、オオジシギのほうがチュウジシギよりも顕著に太いことが分かりました。羽色の点では、両種ともに幼鳥のほうが成鳥よりも外側尾羽の地色の暗色部が淡く、白色斑が多い傾向にありました。尾羽の形状や羽色の性差についてはまだ詳しく調査できていませんが、雄のほうが雌よりも外側尾羽の湾曲が大きく、羽色が暗い傾向があるようです。

以上の事から、尾羽の枚数には性別による違い、尾羽の形状には性別と年齢による違いがあることが分かりました。チュウジシギの地域によるこれらの違いについては、これから調査を進めていきたいと考えています。これらの様々な種内の変異を踏まえることで、より正確な種の識別や生息分布域の把握につながっていくことが期待されます。

講演のあとには、尾羽の計測の方法や、ジシギ類の外側尾羽の形状の生態的な意味などについて質問が寄せられ、小田谷からお答えしました。

今回のオンライン講演は、最大同時に133人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、11月4日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=jnrWvyla7no>

11月は鳥のサイエンストークはお休みです。次回、12月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の水田さんに、アマミヤマシギの移動や寿命についての研究結果をお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

September 3日Sunday: 鳥博セミナーを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: mochizuki



9月3日に鳥博セミナーをオンライン配信にて実施しました。今回は北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）学芸員の中原亨さんに「越冬地から切り拓くノスリ研究の新境地」と題してお話いただきました。

ノスリはカラスくらいの大きさの猛禽で、ネズミやモグラ、小鳥や昆虫などの小動物を食べます。日本にいるノスリ(学名*Buteo japonicus*)はかつてヨーロッパノスリ(*Buteo buteo*)の亜種とされていましたが、現在は別種扱いとなっています。日本には渡りをするものと渡りをしないものがあり、北日本にいるノスリは秋になると南に渡って越冬します。西日本で見られるノスリはほとんどが越冬個体です。

西日本で越冬するノスリはどのような環境で暮らしているのでしょうか？中原さんたちの研究グループは、ノスリにGPSロガーを装着して、行動圏の広さや環境を調べてみました。行動圏の広さは地域や個体によってばらつきがあり、長崎の個体は福岡よりも狭い範囲を行動圏としていること、利用している環境は地域によって大きく異なることが分かりました。

また越冬地では、時々茶色いノスリが見られることがあります。普通のノスリは喉から腹にかけて白色をしています。この部分が茶色いノスリの正体は一体何でしょうか。中原さんはこの茶色いノスリがユーラシア大陸の亜種(学名*B. j. burmanicus*)である可能性を考え、DNAの解析や繁殖地を探す追跡調査をはじめました。

九州で28個体のノスリを捕まえDNA配列を調べたところ、白い見た目のノスリ24個体は日本の亜種と一致し、茶色い見た目のノスリ4個体は大陸亜種と一致する結果となりました。またGPSロガーの追跡調査では、茶色いノスリは全て朝鮮半島を渡ってロシアの方まで渡って行ったほか、白いノスリは北日本の方に渡っていったことが明らかになりました。

DNA解析とGPSロガーの結果から、茶色いノスリはユーラシア大陸の亜種であると言えるでしょう。

中原さんは、ノスリが上昇気流や追い風を利用して渡りをすることから、上昇気流の発生しない日本海を避けて渡りを行っている可能性を指摘し、大陸と日本の2亜種に分かれたのではないかと考察しています。

その他に、九州で越冬するノスリは基本的に1羽ずつの縄張りを持つことが多いのですが、まれに2羽が同じ縄張り内にいることを中原さんの研究グループは発見しました。一年中同じ場所にいる留鳥の地域では、つがいの2羽が冬も一緒にいる例はありますが、越冬地で2羽一緒にいることはとても珍しく、この2羽がつがいであるのか、どんな関係性なのかはよく分かっていませんでした。そこで、中原さんたちがこの"2羽どまり"を捕まえて追跡調査を行ったところ、この2羽は雌雄の組み合わせであったものの、繁殖期にはそれぞれ別の場所に渡って行ったことが分かりました。

2羽どまりのノスリは繁殖地が異なることから、おそらくつがいでは無いと考えられますが、兄弟などの血縁関係があるのか、浮気相手であるのか、冬だけの共同関係なのか、今後の調査で明らかにしていきたいそうです。

講演の後には、雌雄での行動圏の違いや調査方法についての質問が多く寄せられ、中原さんにお答えいただきました。今回の鳥博セミナーは最大同時に252人にご視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様ありがとうございました。

企画展「猛禽ータカ・フクロウ・ハヤブサー」では今回ご紹介いただいたノスリの他、様々な猛禽類の生態やからだの仕組みをご紹介します。企画展は11月5日までの開催となっておりますので、ぜひ期間中にご来館ください。

今回の講演のレジュメはこちら

August19日Saturday: 2023年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



撮影：今野美和

8月19日に、2023年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の山崎剛史さんに、「実は2種いたアホウドリ、名前はどうか？」と題してお話いただきました。

アホウドリは、北太平洋で最大の海鳥で、かつては伊豆諸島から台湾周辺の島々まで広く繁殖分布していました。アホウドリは繁殖地ではすぐに飛び立てず、人を恐れないため、羽毛の採取の為に乱獲され、絶滅の危機に瀕してしまいました。その後の保護活動によって個体数は回復していますが、現在の主な生息地は伊豆諸島の鳥島と尖閣諸島の2か所に限られ、小笠原諸島の鴉島列島では再導入された個体群が少数繁殖しています。

山階鳥類研究所が継続してきた鳥島での標識調査と保全活動の際に、尖閣諸島生まれと考えられる足環のない個体がしばしば確認されてきました（鳥島生まれの個体は基本的にすべて足環が付けられているため）。こうした個体（以下、「尖閣系」）は体の大きさが小さく、嘴が細長い形態が鳥島で繁殖しているアホウドリ（以下、「鳥島系」）とは異なっていることが知られていました。何年もの間、保全活動の為に設置されたデコイに対して求愛行動を行った「デコちゃん」と名付けられた個体も尖閣系でした。

これとは別に、北海道大学の江田さんたちは、遺跡から出土した骨の形態やDNAの分析により、アホウドリの種内に2つのグループが存在することを明らかにしました。これらの違いは、「鳥島系」と「尖閣系」の違いと一致し、両者には生殖隔離が見られることも明らかになったため、現在のアホウドリには、種レベルの違いに相当する2つのグループが存在することが明らかになりました（これらの研究については第31回鳥学講座「センカクアホウドリ発見記」の報告で詳しく紹介しています）。

これらの研究によってアホウドリが2種に分かれることになりましたが、それぞれの学名をどうするのかは議論が必要です。山崎さんたちは、動物の学名の国際的なルールを定めた「国際動物命名規約」に基づき、この2つのグループにそれぞれどのような学名を付ければよいかを検討しました。種を記載するときに規準になる標本は、「タイプ標本」と呼ばれます。現在使われているアホウドリの学名である *Phoebastria albatrus* のタイプ標本は、探検家のステラーによって現在のオホーツク海で採集され、ドイツ人の博物学者であるパラスによって記載されました。しかし、この標本は、19世紀に廃棄されてしまっていたことがわかったのです。

そのため、山崎さんたちは、本来のタイプ標本と同じオホーツク海で採集され、サンクトペテルブルグ博物館に保存されていた標本を「ネオタイプ」に指定し、このネオタイプの嘴の形態を調べて「尖閣系」に該当することを明らかにしました。これらのことから、現在の *Phoebastria albatrus* という学名は尖閣系のアホウドリに引き継がれることになります。

それでは、「鳥島系」の学名はどのようになるのでしょうか？ 実は、アホウドリには4つの異名が存在します。今後、これらに対応するタイプ標本を探し、「鳥島系」と「尖閣系」のどちらに一致するのかを検討していく必要があります。これらについて記載の年が古い順から確認をすすめ、タイプ標本が「鳥島系」の種であれば、その学名を鳥島系のアホウドリに用い、一致する標本が見つからなければ新しい名前を付けることになります。それぞれにどのような学名が適用されるのか、今後の研究で明らかになる事に期待しましょう。

講演のあとは、両種の交雑個体の有無と雑種の繁殖可能性、ネオタイプを1点に絞る理由などについて、多くの質問やコメントが寄せられ、山崎さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に87人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話は、9月2日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=F4W_JGPKLY0

9月は鳥のサイエンストークはお休みです。次回、10月の鳥のサイエンストークは、鳥の博物館の小田谷が、ジシギ類の尾羽の枚数や形態についての研究結果をお話します。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

今回のお話の元になった論文(英文)：

Yamasaki T, Eda M, Schodde R & Loskot V (2022) Neotype designation of the Short-tailed Albatross *Phoebastria albatrus* (Pallas, 1769) (Aves: Procellariiformes: Diomedidae). *Zootaxa* 5124(1): 081–087.

<https://www.biotaxa.org/Zootaxa/article/view/zootaxa.5124.1.6>

| 次頁>

とりはく自然通信

我孫子市鳥の博物館

< 2024-02 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2 3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29		

過去ログ

あなたは現在、2024年Februaryの過去ログをしています。

February19日Monday: 「観察しよう！手賀沼の冬鳥」を実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



2024年2月18日に、手賀の丘青少年自然の家との共催の観察会「観察しよう！手賀沼の冬鳥」を実施しました。30名の方にご参加いただきました(3/15参加者数を修正)。2つのグループに分かれて林から沼までの幅広い環境で観察を行いました。

まず、手賀の丘の林の中で小鳥の姿を探しました。サクラの花芽を食べるカワラヒワや、樹幹を移動するカラ類やメジロ、コグラの混群を観察しました。ここ数年は下草がきれいに刈られてしまっているためか、小鳥の数は少なめでした。

林を出ると、モズやムクドリが草地で採食の様子や、ムクドリの巣穴をめぐる争いの様子が見られました。田んぼで採食するツグミやハクセキレイも観察しました。

手賀沼沿いに出ると、沼の水面で休息しているマガモなどのカモ類やカンムリカイツブリ、岸のヨシ原で採食しているアオジやホオジロなどを観察できました。

田んぼの中を歩いて手賀の丘に戻る途中、農道の足元からウズラが飛び出すサプライズもありました。上空をノスリ、トビ、ハシボソガラスが並んで飛ぶ様子も見られました。今回はタヒバリやヒバリの数は少な目で、タヒバリが1羽見られただけに留まりました。

林の中を歩いて青少年自然の家へ戻り、12時ごろに観察のまとめをして解散しました。2グループともに、見られた種は多少異なりますが、ともに41種の鳥を見聞きすることができました。

関東地方では冬に鳥の種数と個体数が最も多くなります。さらに、これからの季節は繁殖の準備を始めている留鳥たちの行動もおもしろくなってきます。ぜひ身近なところで観察を楽しんでいただければ幸いです。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[観察会](#)
[観察会下見](#)
[昆虫](#)
[植物](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

[ログイン](#)

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[google.co.jp](#)



鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2024年Januaryの過去ログを見えています。

January24日Wednesday: 2024年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



▲伊豆諸島の鳥島から小笠原諸島の鴛島に移送されたアホウドリのヒナ

1月20日に、2024年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の平岡 考さんに、「北西太平洋の美しい海鳥アホウドリの歴史と未来」と題してお話いただきました。

アホウドリは、ミズナギドリ目アホウドリ科に属する北太平洋で最大の海鳥で、翼を広げた大きさは2m以上に達します。かつては北西太平洋に数多く生息していましたが、人間による乱獲によって減少してしまいました。現在では国指定の特別天然記念物や、種の保存法などの指定を受けて保護されています。今回は、アホウドリと人間の関わりの歴史を振り返り、今後必要な取り組みについてお話しいただきました。

現在のアホウドリの繁殖地は、伊豆諸島の鳥島、沖縄県の尖閣諸島、再導入が行われている小笠原諸島の鴛島の3か所のみですが、かつては小笠原諸島や大東

< 2024-01 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

諸島、台湾周辺の島々などにより広く分布しており、その個体数は数百万羽に及んでいたと考えられています。

google.co.jp



全国各地の縄文時代から近代の遺跡からもアホウドリ類の骨が出土しており、礼文島の遺跡からはアホウドリ類の上腕の骨を加工して作られた針入れも出土しています。江戸時代には、漂流した漁師が鳥島にたどり着き、島を埋め尽くすように生息していたアホウドリについての記録も残っています。また、1840年頃に編纂された「梅園禽譜」には、江戸の市中に迷行したアホウドリの巣立ち直後の幼鳥の記録も残されています。

時代は進み、明治時代になると、資源を求めて海洋島の開発が進みました。簡単に捕獲でき、大きな体から大量の羽毛が手に入るアホウドリは、羽毛布団の原料として乱獲され、1903年までに5,000,000羽ほどが殺されたと推定されています。山階鳥類研究所の創設者である山階芳麿博士は、1929年に鳥島を訪れ、約2000羽が生息していたことを映像とともに記録に残しています。山階博士の調査結果を受けて1933年に鳥島は禁猟区に指定されましたが、その直前に駆け込み的な大量の捕殺があったとされています。

第二次世界大戦に入ると詳細な生息状況は不明になってしまいましたが、戦後になって1949年3月から4月にGHQのオリバー・オースチン氏が海上から調査を行いました。この時、繁殖期であるにも関わらずアホウドリの姿が見られないことから、「絶滅した可能性が高い」という主旨の報告を行いました。しかし、その2年後の1951年、鳥島に駐在していた気象庁の職員によって、約10羽が鳥島南端の燕崎にいるのが発見されました。この再発見を受けて、山階鳥類研究所の研究者が気象庁の船に便乗して鳥島に渡航し、標識調査が開始され、測候所が廃止になる1965年まで継続されました。

1970年代後半からは、長谷川博氏による調査活動が始まり、繁殖成功率などのデータを取られるようになりました。その結果、燕崎の急斜面で崩れた土に卵やヒナが埋まってしまうために巣立ち率が低いことが明らかになり、ハチジョウススキの移植などの環境整備が行われました。しかし、この取り組みはあまりうまくいかず、島内の別の場所に繁殖地を移す試みの重要性が高まってきました。

長谷川氏は、デコイと音声を用いて海鳥の繁殖地を移動させた先行研究がアホウドリにも応用できると考えて日本に紹介しました。日本のバードカービングの草分けである内山春雄氏は、長谷川博氏のアイデアを聞いて、アホウドリのデコイの木型を作成し、山階鳥類研究所と協力して1991年から鳥島への設置が始まりました。この取り組みもなかなか成功しませんでした。2000年代後半になってようやく新繁殖地での繁殖が軌道に乗るようになって、島全体の巣立ち率の向上につながりました。

これまでの取り組みによって鳥島の中で2つの繁殖地ができ、個体数も安定してきました。しかし、鳥島は火山島であり、近年でもたびたび大規模な噴火が起こっており、噴火の時期によっては繁殖個体の全滅などのリスクもあります。また、尖閣諸島は政治的に不安定であり、モニタリングなどの調査を行うことが

できません。このような理由から、安定した第3の生息地への再導入の必要性が高まっていました。

そこで、かつての生息地であり、上記のような問題のない、小笠原諸島の鴫島が移転先として選ばれました。2008年から2012年までの5年間に鳥島からヒナを移送し、巣立ち場所を覚えたヒナが同じ場所に戻る習性を利用して、この場所に繁殖地を形成しようという取り組みです。その結果、2016年に最初のヒナが巣立ち、それ以降も2023年までに11羽のヒナが巣立ちました。鴫島への繁殖地の形成はまだ道半ばで、今後時間をかけて取り組みを継続していくとのこと

です。

鳥島では2022-23年の繁殖期には1088羽のひなが確認され、総個体数は7900羽以上まで回復しました。しかし、この増加を受けて、公的な調査の予算は削減される傾向にあるそうです。個体数は回復傾向にあるものの、近年の研究によりアホウドリは2種が含まれることが判明したことによる様々な新たな課題の解決に向けた調査や、人間活動による悪影響の調査を行うため、鳥島でのアホウドリを毎年調査する必要性は失われていません。

そこで、山階鳥類研究所では、アホウドリの保全活動とモニタリングを継続するためのマンスリーサポーター（500円/月）の募集を始められました。詳しくは、以下のウェブサイトからご確認ください。

<https://www.yamashina.or.jp/albatross/kifu.html>

講演のあとに、小笠原に導入された集団に2つの系統が含まれることの問題についてご質問をいただき、平岡さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に62人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のお話しは、2月3日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=JP_gCzFX0zI

次回、2月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の岩見さんに、標本製作の実演をしながらお話しいただく予定です。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

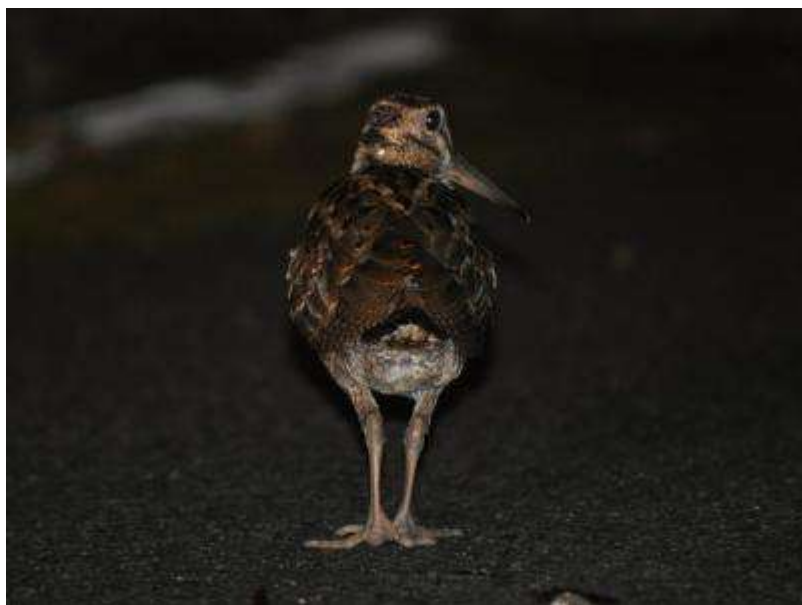
鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Decemberの過去ログを見えています。

December19日Tuesday: 2023年12月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



▲夜の道路上に現れたアマミヤマシギ。

12月16日に、2023年12月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の水田 拓さんに、「アマミヤマシギはどれくらい生きるか、どれくらい移動するか」と題してお話いただきました。

鳥に足環などの目印を付けて寿命や渡りを調べる「鳥類標識調査」は、19世紀の終わりにデンマークで始まり、日本でも1924年に東京都でゴイサギに足環を付けられたことで開始されました。現在では、山階鳥類研究所が環境省から委託を受けて実施しています。1961年から2020年までに500種以上、620万羽以上の鳥に足環が付けて放されました。

鳥類標識調査では、生きていた期間や動いた距離だけではなく、鳥類のモニタ

< 2023-12 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくろうトピックス
- とりはく自然通信

リングに重要な個体数の推定や、絶滅危惧種の保全のために重要な生態の解明、鳥インフルエンザなどの動物由来の感染症の対策に必要な伝播経路の調査など、さまざまな情報を得ることができます。これらの情報は、生物多様性の損失を食い止める目標である「ネイチャー・ポジティブ」や、人間・家畜・野生動物の健康を一体として目指す「ワンヘルス・アプローチ」にも寄与するものです。

水田さんが活動されていた奄美大島では、アマミヤマシギを含むさまざまな固有種が生息しており、その保全に向けた様々な取り組みが行われています。アマミヤマシギは森林に生息するシギの仲間で、世界で奄美群島でのみ繁殖します。過去の森林伐採、マングースなどの外来の哺乳類による捕食、交通事故などが脅威であると考えられており、国内希少野生動物種に指定されています。その保全のために、標識調査を含む個体群のモニタリング調査が2002年から行われています。

この調査は、夜間に林道上でアマミヤマシギを捕獲し、金属リングと色足環を使って標識した後、その個体を再び確認するという方法で行われました。調査は2003年から2018年まで主に5か所の調査地で行われ、5年程度で調査地を移動して行われました。704羽のアマミヤマシギに対して標識が行われ、そのうち258羽（37%）の個体が1回以上再確認されました。2回以上確認された個体は9%程度でした。

標識から再確認までの期間については、再確認された258羽のうち、69%にあたる178羽は1年未満での確認例でした。3年を越える再確認は14羽（5%）ほどで、最も長い放鳥から再確認までの期間は7年強でした。再確認までの期間には性別による違いはありませんでしたが、成鳥で放鳥した個体は幼鳥で放鳥した個体よりも再確認までの期間が長いという結果になりました。

標識場所から再確認した地点までの移動距離は、119個体でデータが得られました。これらのうち、84%が1,000m以内の移動であり、最も長い距離の移動例は3,112mでした。再確認までの時間と移動距離には顕著な関係は認められず、移動距離は性別によって大きな違いは見られませんでした。放鳥時に幼鳥だった個体は成鳥になるまでにより長距離を移動する傾向がありました。

再確認される個体の割合がそれほど高くないことから、アマミヤマシギは同じ個体がいつも林道を繰り返し利用するわけではないらしいということが示唆されました。また、幼鳥は成鳥よりも再確認までの期間が短いことから、幼鳥は成鳥より死亡率が高い、もしくは、より遠くに分散していて再確認されづらいのではないかと考えられます。さらに、成鳥と幼鳥の移動性の違いからは、一度定着したらあまり移動しない、ということが示唆されました。

アマミヤマシギの標識調査のデータからは、再確認される鳥の割合を用いた個体数の推定や、より詳細な生存期間の推定を行うことができます。また、林道への出現傾向から交通事故の対策を行う、捕獲時の糞などの採取から食性を把握するなど、様々な発展が見込まれるとのこと。今後、保全に役立つこのような取り組みを視野に入れて標識調査を実施していきたいとのこと。

鳥の博物館友の会

google.co.jp



講演のあとには、アマミヤマシギの成鳥と幼鳥の形態的な違いや、なぜ夜間に道路に出てくるか、奄美大島以外の奄美群島での生息状況などについて、多くの質問やコメントが寄せられ、水田さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に61人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、12月30日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=zpN1WsmqBjs>

次回、1月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の平岡 考さんに、アホウドリのたどった歴史とこれからの保全についてお話しいただく予定です。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Novemberの過去ログを見えています。

November 7日Tuesday: ジャパンバードフェスティバル2023

カテゴリ: General 投稿者: someya

11月4日(土)と5日(日)の2日間、我孫子市でジャパンバードフェスティバル2023が開催されました。コロナ禍ではリモート開催や会場の規模を縮小して行ってきました。4年ぶりにコロナ禍以前の状態に戻しての開催となりました。

2019年以来のフル開催、再開するイベントの準備をしながら、来場者の方をお待ちしました。会場の1つである鳥の博物館も、開館と同時に多くの来館者で賑わいました。その様子の一部をご紹介します。来年も多くの来場者で賑わうことを楽しみにしています。



▲外のテントブース
鳥に関係する団体や食べ物のテントブースがたくさん



▲鳥の博物館友の会のテントブース ワークショップが行われていました



▲こちらも友の会のテントブース オリジナルカレンダーが販売されましたが完売しました



▲鳥の博物館内 ミュージアムショップも混雑していました

< 2023-11 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくろうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

google.co.jp

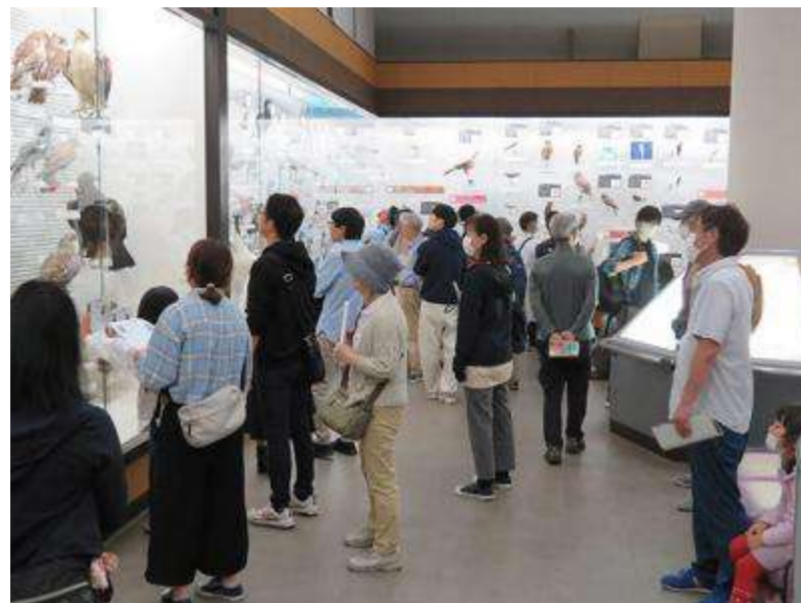




▲午前の館内イベントはハシビロコウの帽子づくり 満員御礼



▲午後の館内イベントは鳥博クイズ 満員御礼



▲展示をみながら答えるクイズです



▲鳥博クイズの全問正解者にはオリジナルポストカードをプレゼントしました

November 5日Sunday: 第33回JBF鳥学講座を開催しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



11日4日(土)に、我孫子市生涯学習センター「アピスタ」のホールで第33回JBF鳥学講座を開催しました。今回は、「小笠原諸島の海鳥は、増えたり、減ったり、海を越えたり、越えなかったり」と題して、森林総合研究所鳥獣生態研究室長の川上和人さんにお話しいただきました。

川上さんは、小笠原諸島をフィールドに、島の鳥の生態系の中での機能や保全管理について研究されています。今回は、長年取り組んでいらっしゃる小笠原諸島の海鳥を題材に、その進化から保全にいたるまでの様々な研究成果を中心にお話しいただきました。

小笠原諸島はこれまでに一度も日本本土とつながったことのない海洋島で、在来の陸上の捕食者がいませんでした。そのため、海鳥の高密度のコロニーが形成され、21種の海鳥の繁殖記録があります。

海鳥は高密度でたくさん繁殖します。そのため、島の中を歩き回ることによって森林の下層の植生の発達が妨げられること、地面に巣を作るためのトンネルを掘り、鳥の巣を好む昆虫に生息場所を提供すること、海で餌を食べて鳥で糞をすることによって窒素やリンを島の陸上に運ぶこと、植物の種を体に付けて島の間を運ぶことなどのさまざまな生態的な機能があることが分かってきました。

小笠原で繁殖する海鳥の中には、世界でもここだけで繁殖するものがあります。それは、クロウミツバメ、オガサワラミズナギドリ、オガサワラヒメミズナギドリの3種です。クロウミツバメは世界で南硫黄島の山頂付近でしか繁殖していないウミツバメです。オガサワラミズナギドリは南硫黄島と東島だけで繁殖する鳥で、かつてセグロミズナギドリの1亜種とされていましたが、セグロミズナギドリのグループからは遺伝的にかなり異なっていることが分かり、別種とする提案が受け入れられています。オガサワラヒメミズナギドリは、ハワイで採集されていた標本をもとに2011年に新種として記載されたもので、2000年代にしばしば小笠原で見ついていた小型の種不明のミズナギドリもこれと同種であることが判明しました。その後、父島列島の東島で営巣しているのが見つかり、現在まで世界でこの場所では繁殖地が見つかっていません。

小笠原諸島に広く分布するアナドリという海鳥は、世界中の海に分布していますが、その個体群の間での系統的な違いなどはよく分かっていませんでした。川上さんは、ポルトガルの研究チームとの共同研究で、大西洋、ハワイ、小笠原の個体のそれぞれのDNA配列を比較し、小笠原の集団は、他のすべての集団から最も早く、約85万年前に分岐したことが分かりました。地理的な距離のより近いハワイの集団は、小笠原の集団よりも大西洋の集団により近縁だったのです。なぜこのような現象が起こっているのかははっきりとはわかっていませんが、小笠原とハワイの間には海鳥の食物の量の指標になる植物プランクトンの量が少ないこと、渡り経路が異なることなどが原因として考えられています。

小笠原諸島に人間が入植したのは1800年代で、彼らによってネズミ類、ネコ、ノヤギなどの外来の哺乳類が持ち込まれました。島ごとに侵入した哺乳類の種数と現在の海鳥の繁殖種数を比較してみると、これには強い負の相関がありました。外来種の哺乳類は、海鳥の卵やヒナ、親鳥の捕食や、植物を食べて森林を草原に変えてしまったことで、海鳥の個体群の減少を引き起こしたのです。

その後、小笠原では様々な自然再生事業が展開されるようになり、植生を破壊するノヤギの駆除は父島を除くすべての島で完了しました。その結果、クロアシアホウドリ、カツオドリ、オナガミズナギドリ、アナドリなどの海鳥については増加していることが分かっています。しかし、小笠原の過去の海鳥相はあまりよくわかっておらず、これらの在来種の増加は、回復と言ってよいのかどうか分かりません。

そこで、川上さんたちは海鳥繁殖地である南島の鍾乳洞から海鳥の骨を発掘し、人間が入植する前の海鳥相を復元しました。その結果、現在は限られた島で少数が繁殖しているだけのシロハラミズナギドリ、オガサワラミズナギドリ、オガサワラヒメミズナギドリの3種の骨が非常に多く出土し、この3種だけで全体の約70%を占めることが分かりました。このうちいくつかの骨を年代測定してみると、いずれも数千年前から数百年前のもので、幼鳥の骨も出てきました。そのため、人間の入植前まではたくさん繁殖していたけれど、外来種の侵入によってこれらの種類は大きく減少したことが分かりました。すなわち、回復しているように見えている海鳥の個体群は、実は分布の狭い小型の固有種から、広域に分布するより大型の種に入れ替わってしまっていたのです。

では、これまでの保全活動は失敗してしまったのでしょうか？ 川上さんは、現在の状況は回復までステップの一つだと説明されました。まず、海鳥の生態系の中での機能が元に戻りつつあるのが現在の状態で、これから小型の固有種を含むかつての海鳥相に近づいていくために多様性の回復を進めていくことが重要とのことです。このように、かつてのあるべき姿がどのようなものであったかを復元し、目指すべき目標を定めていくことは、小笠原の海鳥に限らず、私たちの身近な生物多様性を保全していくために普遍的に重要なことではないか、というお話で講演を締めくくられていました。

講演のあとには、「なぜ海鳥には保全対策で増える種と増えない種がいるのか」、「海鳥の繁殖場所の好みと分布の広さに関係はあるか」などについて来場者からの質問をいただき、川上さんにわかりやすくお答えいただきました。特に、「何のために希少な海鳥を保全するのか」というご質問に対しての、「生態的な機能や生態系サービスの有無にかかわらず、私たちの知的好奇心を刺激してくれることそのものが、その生物を守る意義ではないか」というお答えは、生物多様性を守っていききたいと考える多くの人を勇気づけるものだと感じました。

今回の鳥学講座は、同時中継の別会場を合わせて198人の方にご参加いただきました。ご好評をいただいたため、会場の都合で入室をお断りせざるを得なかったみなさまにはお詫びいたします。ご講演いただいた川上さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

参考資料：

今年のお話しのもとになった論文の日本語プレスリリース

・オガサワラヒメミズナギドリの営巣地の発見
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2015/20150324/index.html>

・オガサワラミズナギドリの系統の研究
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2018/20180125/index.html>

・アナドリの系統の研究
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2023/20230411/index.html>

・鍾乳洞で見つかった骨からわかった海鳥相の変化
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/press/2022/20220720/index.html>

今年のお話の内容と関係した川上さんの著書

「無人島、研究と冒険、半分半分。」

<https://www.tokyo-shoseki.co.jp/books/81714/>

November 1日Wednesday: 中学生が博物館のお仕事を体験
(2023.10.25)

カテゴリ: General 投稿者: someya

我孫子市我孫子中学校の生徒さんが職場体験に来館されました。博物館ではどのような人が働いていて、どのような仕事をしているのか、知ってもらえる貴重な機会です。

博物館での仕事は展示をするだけではありません。職場体験をきっかけに博物館に興味を持ってもらえたらいいなと思いながら取り組み、私にとってはあっという間の一日でした。展示室での作業、標本が収蔵してある収蔵庫での作業、イベントの準備など、様々な業務を体験してもらいました。



▲本で調べながら分類順に標本をしまいました



▲ミュージアムショップで販売業務を体験



▲見やすいパネルって？解説で使うシートや案内表示をつくりました



▲作品が完成しました

鳥博日記

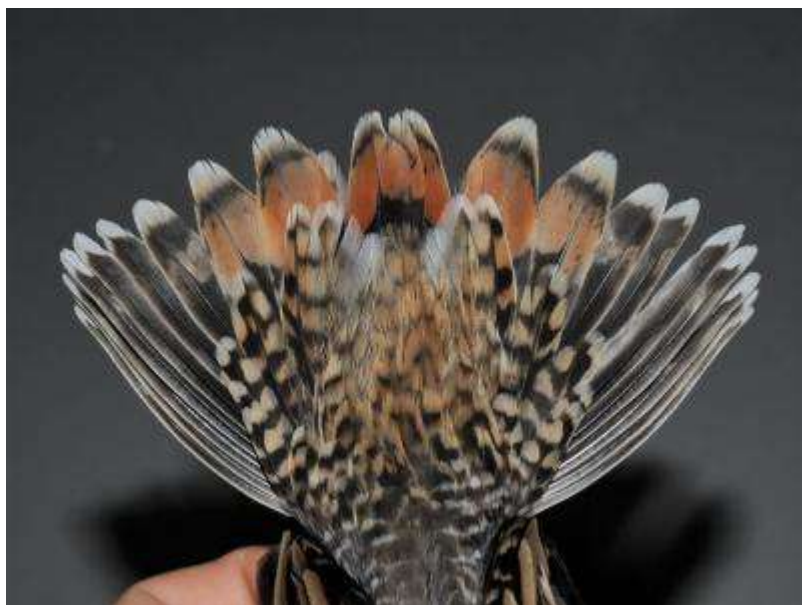
過去ログ

あなたは現在、2023年Octoberの過去ログをしています。

October22日Sunday: 2023年10月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△チュウジシギ雄成鳥の尾羽（20枚の個体）

10月21日に、2023年10月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、鳥の博物館の小田谷が「ジシギの尾羽を調べてみたら」と題してお話しました。

ジシギ類とは、チドリ目シギ科のうち、タシギ属とそれに近縁な数種を含むグループです。鳥の尾羽は12枚のものが多く、10枚や14枚のものもありますが、種の中での尾羽の枚数は比較的安定しています。ところが、ジシギ類は14枚以上の尾羽を持ち、近縁種の間でその枚数が異なること、種の中で様々な枚数を持つものがあることが知られています。しかし、その枚数ごとの頻度などに関する情報は乏しく、種によっては混乱が生じていました。

そこで、ジシギ類の種ごとの尾羽の枚数の変異を整理し、その原因を調べるた

< 2023-10 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

め、標識調査の際に捕獲した生きた鳥の尾羽の枚数を数え、その形態（長さ、太さ、羽色）を記録する調査を行いました。2012年から2023年まで、4種のジシギ類について合計1241羽の尾羽を調査し、その枚数ごとの頻度を調べました。その結果、種ごとに以下のことが分かりました。

google.co.jp



- ・タシギでは変異の幅は12-16枚で14枚の個体が最も多い
- ・オオジシギでは変異の幅は14-20枚で、16枚と18枚の個体が多い
- ・チュウジシギでは変異の幅は16-22枚で、18枚と20枚の個体が多い
- ・ハリオシギでは変異の幅は22-28枚で、24枚と26枚の個体が多い

チュウジシギでは、多くの文献に「尾羽の枚数は20-22枚」と記載されていますから、このことは実際の頻度の分布と異なっていることが分かりました。このことから、尾羽が18枚の個体について、オオジシギなのかチュウジシギなのかは、他の特徴も併せて判断する必要があるという事がいえます。

それでは、種内で見られる変異は何によって決まっているのでしょうか？この問いについて、オオジシギとチュウジシギを対象に、詳しく調べてみました。これまでに、この2種では、先行研究によって、性別によって尾羽の枚数が異なることが示されていました。私の研究では、オオジシギについては年齢にかかわらずサンプルを収集し、チュウジシギについてはサンプル数を増やし、枚数以外の形態についても分析を行いました。

オオジシギ、チュウジシギともに、雄のほうが雌よりも尾羽の枚数が多い傾向がありました。特に、チュウジシギの尾羽が18枚の個体は、そのほとんどが雌でした。チュウジシギは2つの個体群で尾羽の枚数の頻度に大きな違いはありませんでしたが、西側の個体群のほうが21-22枚の個体の割合が高い可能性があります。尾羽の長さは、どの種でも成鳥のほうが幼鳥よりも長く、雄のほうが雌よりも長い傾向がありました。また、チュウジシギの個体群の間では、西側の個体群のほうが尾羽が短い傾向がありました。

尾羽の幅は、中央から5番目の尾羽で、オオジシギのほうがチュウジシギよりも顕著に太いことが分かりました。羽色の点では、両種ともに幼鳥のほうが成鳥よりも外側尾羽の地色の暗色部が淡く、白色斑が多い傾向にありました。尾羽の形状や羽色の性差についてはまだ詳しく調査できていませんが、雄のほうが雌よりも外側尾羽の湾曲が大きく、羽色が暗い傾向があるようです。

以上の事から、尾羽の枚数には性別による違い、尾羽の形状には性別と年齢による違いがあることが分かりました。チュウジシギの地域によるこれらの違いについては、これから調査を進めていきたいと考えています。

これらの様々な種内の変異を踏まえることで、より正確な種の識別や生息分布域の把握につながっていくことが期待されます。

講演のあとには、尾羽の計測の方法や、ジシギ類の外側尾羽の形状の生態的な意味などについて質問が寄せられ、小田谷からお答えしました。

今回のオンライン講演は、最大同時に133人の方に視聴いただきました。ご視

聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のお話しは、11月4日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=jnrWvyla7no>

11月は鳥のサイエンストークはお休みです。次回、12月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の水田さんに、アマミヤマシギの移動や寿命についての研究結果をお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Septemberの過去ログをしています。

September 3日Sunday: 鳥博セミナーを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [mochizuki](#)



9月3日に鳥博セミナーをオンライン配信にて実施しました。

今回は北九州市立自然史・歴史博物館（いのちのたび博物館）学芸員の中原さんに「越冬地から切り拓くノスリ研究の新境地」と題してお話いただきました。

ノスリはカラスくらいの大きさの猛禽で、ネズミやモグラ、小鳥や昆虫などの小動物を食べます。日本にいるノスリ(学名*Buteo japonicus*)はかつてヨーロッパノスリ(*Buteo buteo*)の亜種とされていましたが、現在は別種扱いとなっています。日本には渡りをするものと渡りをしないものがいて、北日本にいるノスリは秋になると南に渡って越冬します。西日本で見られるノスリはほとんどが越冬個体です。

西日本で越冬するノスリはどのような環境で暮らしているのでしょうか？

中原さんたちの研究グループは、ノスリにGPSロガーを装着して、行動圏の広さや環境を調べてみました。行動圏の広さは地域や個体によってばらつきがあり、長崎の個体は福岡よりも狭い範囲を行動圏としていること、利用している環境は地域によって大きく異なることが分かりました。

また越冬地では、時々茶色いノスリが見られることがあります。普通のノスリは喉から腹にかけて白色をしています。この部分が茶色いノスリの正体は一体何でしょうか。中原さんはこの茶色いノスリがユーラシア大陸の亜種(学名*B. j. burmanicus*)である可能性を考え、DNAの解析や繁殖地を探す追跡調査をはじめました。

< 2023-09 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

九州で28個体のノスリを捕まえDNA配列を調べたところ、白い見た目のノスリ24個体は日本の亜種と一致し、茶色い見た目のノスリ4個体は大陸亜種と一致する結果となりました。またGPSロガーの追跡調査では、茶色いノスリは全て朝鮮半島を渡ってロシアの方まで渡って行ったほか、白いノスリは北日本の方に渡っていったことが明らかになりました。

DNA解析とGPSロガーの結果から、茶色いノスリはユーラシア大陸の亜種であると言えるでしょう。

中原さんは、ノスリが上昇気流や追い風を利用して渡りをするところから、上昇気流の発生しない日本海を避けて渡りを行っている可能性を指摘し、大陸と日本の2亜種に分かれたのではないかと考察しています。

その他に、九州で越冬するノスリは基本的に1羽ずつの縄張りを持つことが多いのですが、まれに2羽が同じ縄張り内にいることを中原さんの研究グループは発見しました。一年中同じ場所にいる留鳥の地域では、つがいの2羽が冬も一緒にいる例はありますが、越冬地で2羽一緒にいることはとても珍しく、この2羽がつがいであるのか、どんな関係性なのかはよく分かっていませんでした。そこで、中原さんたちがこの"2羽どまり"を捕まえて追跡調査を行ったところ、この2羽は雌雄の組み合わせであったものの、繁殖期にはそれぞれ別の場所に渡って行ったことが分かりました。

2羽どまりのノスリは繁殖地が異なることから、おそらくつがいでは無いと考えられますが、兄弟などの血縁関係があるのか、浮気相手であるのか、冬だけの共同関係なのか、今後の調査で明らかにしていきたいそうです。

講演の後には、雌雄での行動圏の違いや調査方法についての質問が多く寄せられ、中原さんにお答えいただきました。

今回の鳥博セミナーは最大同時に252人にご視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様ありがとうございました。

企画展「猛禽 ータカ・フクロウ・ハヤブサー」では今回ご紹介いただいたノスリの他、様々な猛禽類の生態やからだの仕組みをご紹介します。企画展は11月5日までの開催となっておりますので、ぜひ期間中にご来館ください。

今回の講演のレジュメは[こちら](#)

google.co.jp



鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Augustの過去ログを見えています。

August19日Saturday: 2023年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



8月19日に、2023年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の山崎剛史さんに、「実は2種いたアホウドリ、名前はどうか？」と題してお話いただきました。

アホウドリは、北太平洋で最大の海鳥で、かつては伊豆諸島から台湾周辺の島々まで広く繁殖分布していました。アホウドリは繁殖地ではすぐに飛び立えず、人を恐れないため、羽毛の採取の為に乱獲され、絶滅の危機に瀕してしまいました。その後の保護活動によって個体数は回復していますが、現在の主な生息地は伊豆諸島の鳥島と尖閣諸島の2か所に限られ、小笠原諸島の聳島列島では再導入された個体群が少数繁殖しています。

山階鳥類研究所が継続してきた鳥島での標識調査と保全活動の際に、尖閣諸島生まれと考えられる足環のない個体がしばしば確認されてきました（鳥島生ま

< 2023-08 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

れの個体は基本的にすべて足環が付けられているため)。こうした個体（以下、「尖閣系」）は体の大きさが小さく、嘴が細長い形態が鳥島で繁殖しているアホウドリ（以下、「鳥島系」）とは異なっていることが知られていました。何年もの間、保全活動の為に設置されたデコイに対して求愛行動を行った「デコちゃん」と名付けられた個体も尖閣系でした。

google.co.jp



これとは別に、北海道大学の江田さんたちは、遺跡から出土した骨の形態やDNAの分析により、アホウドリの種内に2つのグループが存在することを明らかにしました。これらの違いは、「鳥島系」と「尖閣系」の違いと一致し、両者には生殖隔離が見られることも明らかになったため、現在のアホウドリには、種レベルの違いに相当する2つのグループが存在することが明らかになりました（これらの研究については第31回鳥学講座「センカクアホウドリ発見記」の報告で詳しく紹介しています）。

これらの研究によってアホウドリが2種に分かれることになりましたが、それぞれの学名をどうするのかは議論が必要です。山崎さんたちは、動物の学名の国際的なルールを定めた「国際動物命名規約」に基づき、この2つのグループにそれぞれどのような学名を付ければよいかを検討しました。種を記載するときに規準になる標本は、「タイプ標本」と呼ばれます。現在使われているアホウドリの学名である *Phoebastria albatrus* のタイプ標本は、探検家のステラーによって現在のオホーツク海で採集され、ドイツ人の博物学者であるパラスによって記載されました。しかし、この標本は、19世紀に廃棄されてしまっていたことがわかったのです。

そのため、山崎さんたちは、本来のタイプ標本と同じオホーツク海で採集され、サンクトペテルブルグ博物館に保存されていた標本を「ネオタイプ」に指定し、このネオタイプの嘴の形態を調べて「尖閣系」に該当することを明らかにしました。これらのことから、現在の *Phoebastria albatrus* という学名は尖閣系のアホウドリに引き継がれることとなります。

それでは、「鳥島系」の学名はどのようになるのでしょうか？ 実は、アホウドリには4つの異名が存在します。今後、これらに対応するタイプ標本を探し、「鳥島系」と「尖閣系」のどちらに一致するのかを検討していく必要があります。これらについて記載の年が古い順から確認をすすめ、タイプ標本が「鳥島系」の種であれば、その学名を鳥島系のアホウドリに用い、一致する標本が見つからなければ新しい名前を付けることとなります。それぞれにどのような学名が適用されるのか、今後の研究で明らかになる事に期待しましょう。

講演のあとには、両種の交雑個体の有無と雑種の繁殖可能性、ネオタイプを1点に絞る理由などについて、多くの質問やコメントが寄せられ、山崎さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に87人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のお話しは、9月2日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

https://www.youtube.com/watch?v=F4W_JGPKLY0

9月は鳥のサイエンストークはお休みです。次回、10月の鳥のサイエンストークは、鳥の博物館の小田谷が、ジシギ類の尾羽の枚数や形態についての研究結果をお話しします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

今回のお話の元になった論文(英文)：

Yamasaki T, Eda M, Schodde R & Loskot V (2022) Neotype designation of the Short-tailed Albatross *Phoebastria albatrus* (Pallas, 1769) (Aves: Procellariiformes: Diomedidae). *Zootaxa* 5124(1): 081-087.

<https://www.biotaxa.org/Zootaxa/article/view/zootaxa.5124.1.6>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Julyの過去ログを見えています。

July16日Sunday: 2023年7月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



△巣箱で営巣したゴジュウカラの雛

7月15日に、2023年7月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の油田照秋さんに、「ゴジュウカラってどんな鳥？」と題してお話しいただきました。

ゴジュウカラは、ヨーロッパからカムチャッカ半島まで、ユーラシア大陸に広く分布する鳥で、日本国内では北海道から九州にかけて分布しています。平地の林

< 2023-07 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくろうトピックス
- とりはく自然通信

にも分布する北海道以外では、比較的標高の高い山地にのみ分布しており、あまりなじみのない鳥かもしれません。広葉樹や針葉樹との混交林を好み、夏には昆虫、冬には植物の種子を主に食べます。カラ類の混群に入り、木の幹を頭を下にして移動することができるなど、特徴的な行動をすることが知られています。

ゴジュウカラは、シジュウカラなどに比べて巣箱の利用率が低く、ヨーロッパ以外の地域ではあまり生態が研究されてきませんでした。日本国内では、それぞれ3~4巣を調べた古い研究が2つあるだけで、その繁殖生態についてはまだよくわかっていませんでした。

油田さんたちは、シジュウカラの生態研究のために設置した巣箱に入ったゴジュウカラの繁殖生態を調査しました。2009年から2010年と2012年から2015年の6シーズンの繁殖期に、北海道大学の苫小牧研究林の中に300個の巣箱を設置し、5~8月の繁殖期に巣箱内の繁殖状況を調べました。その結果、合計9回のゴジュウカラの繁殖が確認されたそうです。

ゴジュウカラの巣は、巣材にツルアジサイの樹皮を用い、巣箱の底に敷きつめます。シジュウカラなどで見られる獣毛を使った産座は作りません。さらに、泥を巣箱の中に運んできて、入り口の大きさを狭めたり、天井の隙間に塗り込んだりするそうです。

調べた9回の巣箱での繁殖では、最初の卵の産卵日は平均5月8日、一腹卵数は平均7.8個、抱卵期間は平均18.6日、巣内での育雛期間は平均20.4日だったそうです。これらの値をヨーロッパでの調査結果と比較すると、繁殖開始時期は遅く、一腹卵数は多め（最大9）とのことで、シジュウカラでも同様の違いがみられたそうです。また、抱卵期間が長く、育雛期間が短いそうで、これらはそれぞれ、北海道の低い気温と餌の豊富さと関係していそうだとのことでした。9回の繁殖のうち少なくとも1羽が巣立ちした巣は5巣で、繁殖失敗の要因としては、猛禽類やテンによる捕食などがあったそうです。

講演のあとに、巣箱がゴジュウカラにあまり利用されない理由や、雄と雌の違い、ヒナに給餌する昆虫の種類などについて、視聴者の方からご質問をいただき、油田さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に71人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、7月29日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=MopkBkDhW54>

次回、8月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の山崎さんに、アホウドリの分類の変更と学名についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

鳥の博物館友の会

google.co.jp



今回のお話の元になった論文

Yuta T & Nomi D (2019) Breeding Biology of the Eurasian Nuthatch *Sitta europaea* in Northern Japan. *J. Yamashina Inst. Ornithol* 51: 62–67.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/51/1/51_62/_article/-char/ja/

(英文ですが和文の要旨があります)

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Juneの過去ログをしています。

June20日Tuesday: イベントでブース出展しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [mochizuki](#)

6月17日(土)に松戸市で行われたイベント「道合第二公園お楽しみ会」にてブース出展をしました！



イベントでは3Dプリントで作った標本の模型を展示したほか、標本3Dデータを使ったほねほねサイコロを配布しました。

野外に本物の標本を持ち出すのは破損のリスクがあって難しいのですが、3Dプリントの模型は自由に見て触ってもらえるので、野外のイベントで大活躍でした。

< 2023-06 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

検索

検索

ナビゲーション

- [前の月](#)
- [次の月](#)
- [今日の投稿](#)
- [過去ログ](#)

カテゴリ

- [全てのカテゴリ](#)
- [General](#)
- [お知らせ](#)
- [今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- [我孫子市鳥の博物館](#)
- [フィールドミュージアム](#)
- [ふくるうトピックス](#)
- [とりはく自然通信](#)
- [鳥の博物館友の会](#)



google.co.jp



スズメとフクロウの頭の違いを説明しているところ。

今回展示した3Dプリント模型は、以下の7種類です。(同じ種類で大きさの違う物もあります)

カルガモ嘴、スズメ頭骨、フクロウ頭骨

ハヤブサ足、オオバン足、アカエリカイツブリ足、ゴイサギ足



鳥の博物館ではこの数年、標本の3Dデータ化と、3Dプリントの標本模型の作成に取り組んでいます。

これまでに鳥の頭骨3種類、鳥の足7種類の3Dデータを作成、公開しました。このデータは[Sketchfabのサイト\(リンク\)](#)から見る事ができるので、皆さまぜひご覧ください。

June18日Sunday: 2023年6月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△埼玉鴨場で放鳥されたオナガガモ。

6月17日に、2023年6月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の仲村 昇さんに、「宮内庁埼玉鴨場での50年間のカモ類捕獲数の推移」と題してお話いただきました。

宮内庁では、埼玉県と千葉県に1か所ずつある鴨場で、伝統的なカモの引堀猟を保存・継承しています。この猟は、かつては狩猟の目的で行われていましたが、内外の賓客接遇の場としての役割に加え、1971年からは捕獲したカモ類に足環を付けて放鳥する鳥類標識調査が行われています。今回は、2020年までの放鳥記録からわかったことについてお話いただきました。

鳥類標識調査は、固有の番号の刻まれた金属の足環を鳥の脚に装着し、鳥1羽1羽を区別して鳥の渡りや寿命を調べるものです。今回仲村さんが分析を行った埼玉鴨場では、50年間でマガモおよそ6800件、オナガガモ62000件の捕獲データが得られました。これらは、新しく足環を付けたもの（新規個体）と、前年以前に同所で標識したものが再度捕獲されたものの両方が含まれます。

越冬期ごとの捕獲個体数と新規個体の割合を調べたところ、マガモは1996年ごろから、オナガガモは2005年頃から捕獲個体数が減少していました。さらに、両種ともに、近年になって再捕獲個体の割合が増えていることが分かりました。ここで分析した再捕獲個体は確実に成鳥なので、このことから、鴨場に渡来するカモのうち、幼鳥の割合が減少していることが示唆されます。また、マガモでは、捕獲される個体のうち、雄の割合が低くなっていることがわかりました。マガモでは高緯度ほど雄が多い傾向があることから、このことは越冬分布の変化とも関連している可能性が示唆されました。

個体数と幼鳥率の減少の要因として、(1)カモ類の繁殖率が低下している、(2)越冬分布が変化している、(3)周辺の環境が変化している、という3つの可能性が考えられ、今回明らかになった捕獲個体数や新規個体の割合の変化は、これらの要因のうち複数に関係している可能性が高いとのことでした。

講演のあとに、鴨場での捕獲調査が現在どのように行われているかについて、視聴者の方からご質問をいただき、仲村さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に46人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回は、7月1日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=T2ghxWfdAPo>

次回、7月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の油田さんに、ゴジュウカラの特徴や繁殖生態についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

標識調査の年度別報告書（今回のお話は、令和4年度報告書に掲載されているものです）

<https://www.biodic.go.jp/banding/report.html>

環境省のガンカモ類の生息調査

https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html

宮内庁ウェブサイト「鴨の捕獲・鴨場の接遇」

<https://www.kunaicho.go.jp/about/gokomu/shinzen/gaikodan/gaikodan01.html>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Mayの過去ログを見えています。

May23日Tuesday: 2023年5月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△首に発信機を装着されたコクガン

5月20日に、2023年5月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の澤 祐介さんに、「ガン類はどんな環境を使っているか ~発信器でわかること~」と題してお話いただきました。

澤さんたちのグループでは、日本に渡ってくるガン類の渡りルートの解明のため、発信機を装着して個体の追跡を行っています。2017年からコクガンの追跡を開始され、2023年現在は日本に渡来する6種の追跡プロジェクトを進められています。

これらの追跡プロジェクトでは、国をまたぐようなダイナミックな渡りの動きだけではなく、いつ、どのような環境を利用したのか？という詳細なデータを分

< 2023-05 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

析することもできます。今回は、コクガンの追跡データを用いて明らかになったことについてお話しいたしました。

google.co.jp



コクガンは、小型のガンの仲間で、日本国内では唯一、沿岸域を主な生活の場とする種類です。これまで澤さんたちが行ってきた調査で、日本で越冬するコクガンは、春にはオホーツク海を縦断してオホーツク海北岸の中継地で短期間過ごしたあと、陸地の上を一気に飛んで北極海沿岸の繁殖地まで渡ることが分かりました。また、秋には沿岸沿いに東側に移動したのち、カムチャッカ半島の東側を少しずつ移動して日本に戻ってくることが分かり、中国まで渡っているものがあることが分かりました。

これらの渡り経路のうち、いくつかの渡来地はこれまで知られていない、または情報が非常に乏しいものでした。そこで、澤さんたちは現地の研究者と協力して、ロシアのノボシビルスク諸島が14000羽ほどが利用する換羽地であること、オホーツク海北岸の湿地が春の中継地であること、中国の山東半島先端部の沿岸域が越冬地であることを突き止められました。中国の越冬地は1990年代に一度確認されただけで、それ以来の再発見となりました。

春と秋の重要な中継地として利用されている野付半島の位置する道東地域では、季節的な環境利用の違いや周辺の渡来地との行き来などを解析されました。秋の渡り時期には捕獲場所である野付半島を中心に風連湖や国後島と行き来する個体が多い一方、春には風連湖をあまり利用せず、野付半島と国後島を行き来する個体が多いこと、遅い時期ほど国後島側を利用する個体の割合が高くなることが分かりました。

さらに、野付半島では、基本的に春・秋ともに昼間は浅い場所を、夜には深い場所を利用する傾向がありましたが、秋には夜に干潮になった場合に浅い場所を利用することが多いことが分かりました。これは、秋には渡りのエネルギー蓄積の為に短時間にたくさん採食する必要があることと関連していそうだとのことでした。

野付湾の鳥獣保護区は、コクガンが秋の渡り時期に使っていた範囲の74%（日中は84%、夜間は64%）をカバーしていました。現状の保護区に3kmのバッファを設けると、このカバー率は95%に向上するそうです。このような生息地の利用環境範囲の情報を、今後の保全に証拠として活用していきたいとのことでした。

このように渡りルートを解明し、重要生息地を洗い出し、その生息地の利用状況を詳しく解析することで、渡り鳥の適切な保全を進めていきたいとのことのお話で、講演を締めくくられました。

講演のあとに、コクガンの春と秋の渡り経路が違う理由や、アジアと北米の越冬地間での分散があるかどうかなどについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、澤さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に48人の方に視聴いただきました。ご視聴

いただいた皆様、ありがとうございました。今回は、6月3日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=7Cealax4hkM>

次回、6月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の仲村さんに、埼玉鴨場におけるカモ類の標識調査からわかったことについてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考情報：

東アジアのガン類の最新情報については、2023年1月に行われた国際シンポジウムの講演をyoutubeでご視聴いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=x0A9V3W369E>

May20日Saturday: 2023年のバードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [iwamoto](#)

2023年5月14日（日）に、「Enjoy 手賀沼！2023」で、第34回バードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました。この観察会は、山階鳥類研究所の後援をいただき、我孫子野鳥を守る会と我孫子市鳥の博物館が共催で開催しているものです。今回はコロナ禍前の受付方法（当日、現地にて受付）に戻して開催しました。



▲集合場所の様子

前日の予報では降水確率がかなり高かったのですが、直前になって、午前中は降らない予報に変わりました。快適な天気の中、手賀沼沿いを歩いてバードウォッチングを楽しみました。

1時間コース（1班）と2時間コース（3班）の4つの班に分かれて出発し、鳥を探しました。



▲手賀沼遊歩道から観察を行いました。



▲すぐ近くまで寄ってきたキジバト



▲水田で餌を探していたアオサギ

各班を合計して31種に会うことができ、我孫子野鳥を守る会の皆様にサポートいただいたおかげで重質した探鳥会となりました。

参加者数は一般の方54名（一般40名、高大学生2名、小中学生12名）、我孫子野鳥を守る会の会員の皆様31名（一般30名、中学生1名）の参加がありました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

鳥の博物館では「てがたん」をはじめとする自然観察会を執念で実施しておりますので、バードウォッチングに興味を持たれた方は、別の機会にもぜひご参加いただければと思います。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Aprilの過去ログをしています。

April18日Tuesday: 2023年4月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



4月15日に、2023年4月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の浅井芝樹さんに、「白い羽色異常はどういう仕組みで起きる？」と題してお話いただきました。この講演は、2018年8月に鳥の博物館で開催した対面の講演会「テーマトーク」でお話したものの再演です。

鳥の羽毛の様々な色は、色素と構造色によって形作られています。鳥の持つ色素は主に2つで、鳥の体内で合成されるメラニン系（黒系のユーメラニンと褐色系のフェオメラニン）と食物由来で取り込まれるカロテノイド系の主な2系統に分けられます。構造色は、羽枝やメラニンの配列の構造によって発色する青や緑の羽色を形作っています。今回は、主にメラニン系の様々な異常によって羽色が白くなるメカニズムについて、大きく分けて以下の6つの仕組みをご紹介します。 (2)~(6)の名称の訳語は浅井さんによるものです。

< 2023-04 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくろうトピックス
- とりはく自然通信



(1)Albino アルビノ

遺伝的にメラニンを作る酵素を持たず、2種のメラニンをともに合成できないもの。全身が白く、眼も赤い。体の一部にメラニン由来の色が出ているものはアルビノではなく、しばしば「部分アルビノ」といわれるものは定義上存在しない。眼に入る光を遮ることができないので、飛翔に視力が重要な鳥では、野外での生存は難しいと考えられている。

(2)Leucism 色素配分異常

メラニン芽細胞の異常が原因で、色素細胞が正しく分布しないことによる羽毛の白化。2種のメラニンに影響し、左右対称な白化になりやすい。白化する羽毛は真っ白になり、中途半端にかすれた色にはならない。眼は黒い。

(3)Progressive greying 進行性灰色化

年齢とともに羽色が白くなる現象で、遺伝的でないものもある。病気などが原因で、換羽によってもとの正常な色に戻ることもある。左右対称でないことが多い。眼は黒い。

(4)Brown 褐色変異

メラニンのうち、ユーメラニンの構造が変化することによって起こる異常。フェオメラニンには影響せず、鳥の本来黒い部分が褐色に変化する。紫外線によって脱色されやすく、かなり白っぽくなることもある。眼は黒い。

(5)Dilution 淡色化

メラニンの量が減少することによって起きる異常。2種のメラニンがともに減少して全体に白くなるPastelと、ユーメラニンだけが減少して褐色になるIsabelの2つのタイプがある。Brownと同様に脱色されやすい。眼は黒い。

(6)Ino 色素欠損

2種のメラニンの構造が大規模に変形することによって、もとの黒色は褐色に、褐色は極めて薄くなる異常。淡色な個体は眼の色素も減少して赤っぽくアルビノに似るが、羽毛にはメラニン由来の色素がわずかに見えることで区別できる。しかし、野外だと脱色してしまっていることがある。眼はアルビノよりはずっとよく見えるので、野外でもアルビノよりは生存しやすい可能性が高く、野外で見られるアルビノのような個体の多くはInoである可能性がある。

白い羽色異常の鳥を見ると、つついアルビノと言ってしまいそうになりますが、実際には真のアルビノは野外ではほとんど見られないことや、眼が赤く見える場合もアルビノとは限らないことなど、白い羽色異常の鳥の呼び方には注意が必要というお話でした。

実際に野外で白い羽色異常の鳥をご覧になった際には、眼の色が赤いかどうか、白い異常な羽毛は完全に白いか、異常な白化部分は左右対称かどうか、褐色みは残っているかなどに注目すると、この6つの仕組みのいずれが原因となっ

ているか絞り込めるかもしれません。

白い羽色異常は珍しいことですが、どのような特徴が生じているかによってその原因が異なることや、鳥の羽色がどのように形作られているかの仕組みまで想像できることはとても興味深いと感じました。

講演のあとに、異常な色の白い羽毛は換羽しても同じように生えてくるのかや、白い羽色異常では構造色はなぜ生じないのかなどについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、浅井さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に63人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、4月29日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=uuOZjwSZPzs>

次回、5月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の澤さんに、発信機を用いて明らかになったガン類の環境利用についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトで改めてご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

今回のお話のもとになった論文（英語）

van Grouw H (2013) What colour is that bird? The causes and recognition of common colour aberrations in birds. *British Birds* 106: 17–29.

https://www.researchgate.net/publication/273348895_What_Colour_is_that_bird_The_causes_and_recognition_of_common_colour_aberrations_in_b

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Marchの過去ログをしています。

March21日Tuesday: 2023年3月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△通常の亜種エナガ(左)と、眉斑の薄いエナガ(右)

3月18日に、2023年3月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、我孫子市鳥の博物館の望月みずきが、「眉の薄いエナガはどこにいる？」と題してお話しました。

エナガは尾の長い小鳥で、ユーラシア大陸の温帯～亜寒帯の地域に広く分布しています。日本では、南西諸島などを除く各地の森林や、里山や公園などの身近な環境にも生息しています。日本国内に分布するエナガは4つの亜種（地理的な羽色や大きさの変異）に分けられており、北海道には亜種シマエナガ、本州には亜種エナガ、四国と九州には亜種キュウシュウエナガ、対馬には亜種チョウセンエナガが分布しています。このうち、北海道に分布する亜種シマエナガは頭部に斑がなく、一様に白いのが特徴ですが、亜種エナガを含む他の3亜種は濃い眉のような模様（以下、眉とします）があるのが普通です。

< 2023-03 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

ところが、2010年ごろから、千葉県北西部をはじめとする関東地方の一部の地域で、眉が薄かったり、時には亜種シマエナガのようになかったりするエナガが見つかるようになりました。このエナガは、シマエナガよりも全体的に羽色が濃く、体の羽毛の地色の白さがシマエナガに比べて乏しいことから、迷ってやってきたシマエナガではないと考えられました。また、眉の薄さには個体変異が大きいこともわかりました。しかし、このエナガがどのくらいの範囲に分布しているのか、なぜこのような羽色の個体が一部の地域だけに分布するのかはわかっていません。

google.co.jp



そこで、千葉県とその周辺地域において、眉の薄いエナガがどこに分布しているのかをアンケート調査や文献、インターネット上に掲載された情報をもとに調べました。その結果、2006年から2022年の間に、眉の薄いエナガが35地点、通常のエナガが32地点で観察された情報が集まりました。眉の薄いエナガは、千葉県の中では北西部だけではなく全域に分布しており、東端の銚子市や南端の館山市でも見つかりました。また、渡良瀬遊水地や茨城県石岡市などの北部の地域、西側は埼玉県でも数例の目撃情報が得られたそうです。一方で、神奈川県や東京都の西部からは目撃情報が得られず、これらの地域には眉の薄いエナガは分布していない可能性が示唆されました。また、どの観察情報も、通常の濃い眉の個体の中に薄い眉の個体が混ざっているという状況で、眉の薄い個体のみの群れは記録されませんでした。

今後は、亜種シマエナガとの交雑の可能性を検証するための遺伝的な調査や、他の地域との形態や羽色の比較を行っていきたいとのことでした。

講演のあとに、眉の薄さに地理的な変異がみられるかどうかや、声の違い、頭部以外の羽色の違いがあるかどうかなどについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、望月からお答えしました。

今回のオンライン講演は、最大同時に85人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、4月1日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=i-QhLiDK-tQ>

次回、4月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の浅井さんに、鳥類に見られる白い羽毛の羽色異常についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトで改めてご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Februaryの過去ログをしています。

February19日Sunday: 2023年2月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△翼を開いて走り出すヤンバルクイナ

2月18日に、2023年2月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所副所長の尾崎清明さんに「ヤンバルクイナを真の遺産とするために」と題してお話いただきました。

ヤンバルクイナは、世界で沖縄島だけに分布する飛べないクイナの仲間で、1981年に山階鳥類研究所の調査チームによって新種として記載されました。しかし、発見されてから10年ほど経って1990年代に入ると、ヤンバルクイナの分布域の南限附近から姿を消しはじめ、分布域が縮小していきました。これは、外来種の捕食者であるフィリマングース（以下、マングース）の北上に伴うもので、ヤンバルクイナはこの影響を強く受けていたと考えられています。2008年には、マングースの糞からヤンバルクイナの羽毛が見つかり、直接的な捕食の証

< 2023-02 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4

5 6 7 8 9 10 11

12 13 14 15 16 17 18

19 20 21 22 23 24 25

26 27 28

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

拋が得られています。

google.co.jp

2006年に国際自然保護連合の専門家会議によって行われたシミュレーションによると、何の対策も行わなければ、2030年ごろまでにヤンバルクイナは絶滅してしまう可能性が高いものの、マングースを早期に排除できれば、当面の絶滅を回避できる可能性が高いとの予測がなされました。これに従って、2000年代からマングースの捕獲やフェンスの設置によるマングースの分布拡大の抑制の対策が始まり、現在までにやんばる地域におけるマングースの低密度化に成功しました。これにより、近年ではヤンバルクイナの個体数は回復傾向にあるそうです。



続いて、世界に分布する無飛翔性の絶滅危惧種のクイナ類の保全の例として、グアムクイナとロードハウクイナの例をご紹介します。両種ともに、外来種の捕食者の影響で個体数を減らし、積極的な保全活動によって絶滅を免れているものです。これらの種の保全においては、外来種の捕食者のコントロールをしっかりと行うことが重要だということが分かっています。

現在のヤンバルクイナの保全において大きな課題は、分布域が狭く生息可能な個体数が少ないことと、未だにマングースやネコなどの外来の捕食者の影響があることです。遺跡からの骨の出土や古い分布状況から、ヤンバルクイナのかつての分布域はより広く、沖縄島中部にも分布していたのではないかということが示唆されています。マングースを沖縄島全体から排除し、ヤンバルクイナをはじめとする固有の野生動物の生息可能な地域を拡大することが、やんばる地域の生態系を真の遺産として未来へ引き継いでいくことにつながるだろう、というお話で、講演を締めくくられました。

講演のあとに、無飛翔性の絶滅危惧種ではないクイナ科の鳥や、グアムクイナで行われているももとの生息地ではない場所への再導入について、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、尾崎さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に58人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、3月18日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://youtube.com/live/QEZUUFUC-VDs>

次回、3月の鳥のサイエンストークは、鳥の博物館の望月が、関東地方で見られる眉斑の薄いエナガの分布についてお話しします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2023年Januaryの過去ログを見えています。

January24日Tuesday: 2023年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



△鳥島で繁殖するカンムリウミスズメ

1月21日に、2023年1月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の富田直樹さんに「アホウドリをはじめとした鳥島で繁殖する海鳥の近況」と題してお話いただきました。

鳥島は、伊豆諸島南部に位置し、最も近くの有人島である八丈島からはおよそ300km南に、東京からは600km南に位置している絶海の無人島です。アホウドリの最大の繁殖地として広く知られていますが、他にも絶滅危惧種を含む多くの海鳥の繁殖が知られています。今回のご講演では、アホウドリをはじめとする海鳥の生息状況や、近年の個体数の変化、保全についてお話いただきました。

アホウドリは、かつて伊豆諸島から台湾周辺の島々に広く、多数が分布してい

< 2023-01 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

ました。しかし、明治時代から行われた羽毛採取が目的の乱獲によって個体数が激減し、1949年には絶滅宣言が出されました。その後、1951年に鳥島で再発見され、長谷川博氏をはじめさまざまな人たちによって保全活動が進められてきました。山階鳥類研究所は1991年から調査・保全活動に参画しています。

google.co.jp



鳥島内のアホウドリの繁殖地は現在3か所確認されています。島南東部の燕崎はアホウドリが再発見された場所で、急な傾斜の斜面にアホウドリが残されていました。この繁殖地は卵やヒナが転がり落ちたりして繁殖成功率が低く、噴火による影響も懸念されていました。そのため、島内の他の場所に音声やデコイを用いて周辺のアホウドリを誘引し、島の西部の初根崎に新しいコロニーを移動させる試みが1992年から行われました。その結果、2005年からは複数のヒナが巣立つようになり、2022年の秋にはおよそ670巣が確認されています。この数は旧コロニーである燕崎の数を上回るようになったとのこと。さらに、島南東部の子持山に自然に小規模なコロニーが形成されているとのこと。近年では島全体の産卵数も1000を超えるようになり、鳥島のアホウドリの回復は順調に進んでいるとのことでした。

アホウドリに近縁なクロアシアホウドリも、鳥島で繁殖しています。2017年の時点で6000羽が繁殖していると推定されており、ヒナの数も2000羽以上が巣立っていると考えられています。繁殖コロニーはアホウドリのコロニーと同じ場所に加え、鳥島内の4か所に分散して繁殖しているとのこと。小型の海鳥であるオーストンウミツバメやカンムリウミスズメも、鳥島で繁殖が確認されています。しかし、これらの種は外来種であるクマネズミの影響を強く受けており、鳥島の繁殖個体群の絶滅が危惧されています。2017年に一部で殺鼠剤の散布が行われたものの根絶には至っておらず、今後の影響が心配されるということです。2009年には、オナガミズナギドリの繁殖が確認されました。オナガミズナギドリは日本では小笠原諸島などで見られますが、鳥島の繁殖地は北大西洋の集団の北限になります。2018年には126巣が確認されているとのこと。

今後の保全上の課題として、アホウドリには形態の異なる2種が含まれることから、それぞれ別の単位として保全を進める必要があること、アホウドリ以外の海鳥についても重要な生息地であると考えられることから、今後もモニタリング調査を継続していく必要があることをお話しされていました。

講演のあとに、クマネズミの駆除活動や、オオミズナギドリとオナガミズナギドリの繁殖分布、島での調査生活などについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、富田さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に79人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、2月4日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=mQY0rIKMLK4>

次回、2月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所の尾崎清明さんに、ヤンバルクイナの保全についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜ

ひび視聴ください。

参考資料：

佐藤文男 (2022) 日本の海鳥の現状と保全の課題—環境省モニタリングサイト
1000海鳥調査から—。山階鳥類学雑誌 54(1): 3-53. (オープンアクセス)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/54/1/54_3/_article/-char/ja/

上記論文の電子付録：日本のモニタリングサイト1000 対象海鳥の繁殖状況。
(PDFへの直リンクです)
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/54/1/54_3/_supplement
/_download/54_3_1.pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/54/1/54_3/_supplement/_download/54_3_1.pdf)

山階鳥類研究所の「アホウドリ 復活への展望」のページ
[https://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/albatross
/ahou_mokuji.html](https://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/albatross/ahou_mokuji.html)

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Decemberの過去ログをしています。

December24日Saturday: 2022年12月の鳥のサイエンストークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△カモメの仲間のウミネコ。

12月24日に、2022年12月の鳥のサイエンストークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の岩見恭子さんに「鳥の学術標本作り・中級編 ―中型の海鳥を作るうー」と題してお話しいただき、学術標本の製作の実演もしていただきました。このようなライブ配信は、2021年7月に行った試みに続いて2回目となりました。

まず、鳥の標本を集める目的や保管方法などについてお話しいただきました。剥製を作る大まかな手順を説明いただいてから、さっそく実際の製作に入りました。今回は中型の海鳥であるカモメの仲間のウミネコを材料に、皮むきから縫

< 2022-12 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3

4 5 6 7 8 9 10

11 12 13 14 15 16 17

18 19 20 21 22 23 24

25 26 27 28 29 30 31

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

い合わせるまでの一連の流れを見せていただきました。手元を写したカメラを使って、作業上のポイントを見せていただきながら解説していただいたので、どのように標本が作られているのかがよくわかりました。今回の材料は繁殖地に侵入したキツネによって殺されてしまったもので、体に残る傷も標本製作の際に記録していることをお話しいただきました。

google.co.jp



基本的な手順は前回のアカショウビンと大きく変わりませんが、海鳥では個体によって脂肪の量が多いことが特徴です。長期保存に耐えうる標本を製作するには、しっかり皮から脂肪を除去することが重要であることを強調されていました。

講演のあとに、視聴者のみなさんとチャット機能を用いて質疑応答が交わされました。標本が昆虫の食害にあってしまった場合にどのように対応するか、剥製を作る際の衛生管理をどのように行うか、何点くらい作れば上手に作れるようになるかなどについて、岩見さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に102人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信の見逃し配信は行いません。

次回、2023年1月のテーマトークは、1月21日（土）に、山階鳥類研究所の富田直樹さんに、伊豆諸島の鳥島で繁殖する海鳥についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

December10日Saturday: 友の会展スタート

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

12月10日本日より「第91回企画展第18回友の会展」が始まりました。友の会の同好会には鳥凧同好会・鳥絵同好会・デジカメ同好会・みて歩こう会・万葉集同好会・しちじゅうにこうの会があり、それぞれの活動を楽しまれています。

今回のテーマ展示ではマンホール蓋に描かれた鳥を紹介しています。担当したのは鳥絵同好会です。何ヶ月も前から打ち合わせを繰り返し、頑張って準備されていました。友の会の活動の成果を紹介する友の会展は来年の1月29日まで開催しています。お見逃しなく。



▲テーマ展示「マンホール上の鳥たち」
展示室内を見上げると鳥風同好会の作品が



▲デジカメ同好会



▲鳥絵同好会



▲鳥凧同好会



▲万葉集同好会



▲しちじゅうにこうの会



▲みて歩こう会

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Novemberの過去ログをしています。

November10日Thursday: 第32回JBF鳥学講座を開催しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



11日5日（土）に、第32回JBF鳥学講座を開催しました。今回は、我孫子駅南口にあるアビーホールで実施しました。「江戸の鳥の美食学—環境破壊や乱獲がもたらした野鳥食文化の衰退」と題して、東京大学東洋文化研究所教授の菅豊さんにお話しいただきました。オンラインではない対面での開催は2019年ぶりとなります。

菅さんは、日本と中国をフィールドに、民俗学の視点から、地域社会における自然資源や文化資源の利用や管理のあり方について研究されています。今回は、2021年に出版された「鷹將軍と鶴の味噌汁 江戸の鳥の美食学」（講談社選書メチエ）の内容から、江戸における鳥食文化を中心に話しいただきました。

日本の伝統的な食といえば刺身や寿司に代表される魚食の文化という印象がありますが、野生の鳥を食べる文化は、縄文時代から続いてきたことが、歴史資料や考古学的な調査からわかっています。特に、江戸時代にはその最盛期を迎

< 2022-11 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくろうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

え、社会的・政治的に重要な役割を担ったほか、大衆を含めた多くの人々に食べられていました。たとえば、江戸時代初期に著された「江戸料理物語」には、18種の野生の鳥の97以上のレシピが記述されています。

今回は、このような野鳥食文化を復活させようという主張ではなく、このような食文化が社会や政治においてどのような役割を果たしていたのか、なぜ衰退してしまったのかについてご講演いただきました。

google.co.jp



鷹狩りは、古代より天皇・貴族のたしなみとして行われており、中世からは武士の社会的な権威を示すための行事として行われてきました。江戸幕府を開いた徳川家康は、その重要性をよく理解しており、鷹狩りの獲物を贈答品として朝廷に献上したり、各地の大名に下賜したりして、政治的な道具として利用してきたそうです。江戸時代の江戸周辺には、将軍家やその分家である御三家が鷹狩りを行う「御拳場（おこぶしば）」や「御借場（おかりば）」があり、この鷹狩りの狩場を守るため、江戸周辺での狩猟や市中への野生の鳥の持ち込みは厳しく管理されていました。

第5代将軍徳川綱吉の時代になると、「生類憐みの令」によって鷹狩りや野生の鳥の取引は禁止されました。しかし、これは逆効果で、密猟が横行することによってかえって鳥の数が減る事態を招いたそうです。その後、徳川吉宗が第8代将軍の座に就くと、かつての鷹場の管理制度が復活し、鷹場の管理と流通の制限が復活しました。幕府に認められた10軒の鳥問屋が、野生の鳥の肉の取引を管理し、一般大衆の食卓にも野鳥の肉料理が上っていました。しかし、幕末期になると、江戸幕府が弱体化するとともに鷹狩りの分化は衰退し、1863年に行われたのを最後に、将軍家による鷹狩りは行われなくなってしまいました。

では、江戸時代にこれだけ栄えた野鳥食文化は、なぜ衰退したのでしょうか？戦後導入された欧米の養鶏技術によってニワトリの肉の生産量が大きく伸びたこともその理由の一つですが、菅さんは、野生の鳥の数の減少が大きな理由だと指摘されています。開発による生息環境の破壊、明治以降普及して無秩序に行われた狩猟などが減少の原因といえるでしょう。食文化が衰退すると、それを守る人もいなくなるという負のスパイラルに陥り、野鳥の食文化は現在ではごく一部の地域にしか見られなくなってしまいました。このように、資源の適切な管理を怠ったために食文化が消滅の危機に瀕していることは、現代におけるウナギなどの魚にも同じことが言えるでしょう。古くからある一皿の料理を失わないために、野鳥食文化の衰退の歴史を教訓とする必要があるだろう、というお話で講演を締めくくられていました。

講演のあとは、国内の鳥食文化の地域差や、宗教と鳥猟の関係などについて来場者からの質問をいただき、菅さんにわかりやすくお答えいただきました。今回の鳥学講座は、118人の方にご参加いただきました。お話しいただいた菅さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

今回の講演のレジュメは以下の山階鳥類研究所のウェブサイトに掲載されているリンクよりダウンロードできます。

<https://www.yamashina.or.jp/hp/event/event.html#chogakukoza2022>

今回のお話の内容が含まれる菅さんの著書

「鷹將軍と鶴の味噌汁 江戸の鳥の美食学」

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000354725>

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Octoberの過去ログをしています。

October15日Saturday: 2022年10月の鳥のサイエンストークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



10月15日に、2022年10月の鳥のサイエンストークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、鳥の博物館の小田谷が「手賀沼の鳥を調べる 一 個体数モニタリングと鳥類相」と題してお話ししました。

鳥の博物館では、開館以来、様々な形で地域の鳥類の調査を続けてきました。今回は、手賀沼とその周辺で行っている個体数のモニタリングと鳥類相の調査についてお話ししました。

鳥の博物館の調査活動の軸となるのは、手賀沼内の鳥類の数を毎月カウントしている手賀沼鳥類センサスです。この調査は、1988年から現在に至るまで（途中5年間の中断をはさんで）継続されています。調査を開始してから現在までの間に減少した種としてカイツブリ・ハシビロガモ・ミコアイサ・コアジサシ、増

< 2022-10 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくろうトピックス
- とりはく自然通信

加した種としてカワウ、ミサゴ、コブハクチョウを紹介し、その推定される原因についてお話ししました。

鳥の博物館友の会

[google.co.jp](https://www.google.co.jp)

この調査のほかに、手賀沼のヨシ原の環境を代表する鳥類であるオオバンとオオヨシキリについては、それぞれ毎年4月下旬と5月下旬に、その個体数と分布を記録する調査を行っています。その結果、両種ともに繁殖個体数は減少傾向にあることが示唆されています。



センサス調査に加え、様々な方法を用いて地域の鳥類相の把握に努めています。今回は、標本収集と捕獲・標識調査によって明らかになった鳥類の記録についてご紹介しました。我孫子市で拾得されたオオマシコやニューナイスズメの鳥の博物館所蔵の標本は地域の貴重な記録であり、標識調査によってマキノセンニューやオガワコマドリなどのこれまで記録されていなかった鳥類の分布記録も得られました。

今後も、地域の鳥類の情報センターとしての役割を担っていくため、現在行っている調査を継続していきたいと考えています。

講演のあとに、「肉食性の鳥のうち小型の種が減り、大型の種の個体数が回復しているように見えるのはなぜか」「外来植物のナガエツルノゲイトウが鳥類に与える影響はわかっているか」などの視聴者のみなさんからのご質問にお答えしました。

今回のオンライン講演は、最大同時に46人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、10月29日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

https://youtu.be/alJn_tp4o98

11月のテーマトークはお休みです。次回、12月のテーマトークは、12月24日（土）に、山階鳥類研究所の岩見恭子さんに、鳥類標本の作製方法について、海鳥類を材料に解説していただきます。実施の日付は、今回に限り、従来の第3土曜日から変更となりますのでご注意ください。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

手賀沼鳥類センサスの結果

<https://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/info2/tyousakenkyu/teganumatyousa.html>

我孫子市・手賀沼鳥類リスト（PDF直リンク）

https://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/info1/kako.files/abiko_checklist.pdf

October 4日Tuesday: 2022年の鳥博セミナーを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



2022年10月1日（土）に、令和4年度の鳥博セミナーをオンライン配信にて開催しました。今回は「カモとハクチョウの冬の暮らし」と題して、公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田哲郎さんにお話しいただきました。

カモ科の鳥の仲間は体の大きさの異なる3つのグループにおおまかに分けることができます。小さいカモ類、中型のガン類、大型のハクチョウ類です。国内ではカモ類とハクチョウ類は比較的広い地域に渡来しますが、ガン類の飛来する地域は限定されます。今回は、カモ類とハクチョウ類の渡り、冬の暮らし、人のかかわりについてお話しいただきました。

カモ科の鳥は公園の池などの身近なところにも飛来し、採食の行動をじっくり観察することができます。また、カモ類はカルガモを除き雌雄で羽の色が大きく異なり、冬につがいを形成することから求愛行動なども観察しやすいグループです。

冬に日本に渡来するハクチョウ類やカモ類は、どこからどのように日本にやってくるのでしょうか？ 嶋田さんたちは、国内の越冬地で捕獲した鳥に発信機を装着し、彼らの繁殖地や渡りの経路を調査しました。その結果、オオハクチョウとコハクチョウでは繁殖地の緯度が異なり、前者はタイガ地帯の川の中流域、後者は北極海沿岸のツンドラ地帯で繁殖すること、両種の中継地や渡り経路はよく似ていることを発見されました。また、オナガガモやヒドリガモはマガモに比べて高緯度の地域まで渡りを行うことも確かめられました。

越冬期の生活についても、宮城県北部のフィールドで発信機を装着して調査が行われました。マガモやカルガモは昼間は沼で休息し、夜間になると周辺の水田や水路に飛んで行って採食すること、オナガガモでは年によっては給餌場所に夜も留まるものがあることがわかりました。オオハクチョウはハスの地下茎（レンコン）を好むため、一日中沼の中で採食していますが、水位が高くなってレンコンを採食しづらくなると、周囲の水田で落穂を食べることがわかりました。沼の水位が低く、多くのオオハクチョウがレンコンを食べた翌年夏には、ハスの群落が衰退し、沼の水質が改善したこともあったそうです。

湖沼の中に水草や魚などの餌があるかどうか、その場所にいるカモ類の種構成を決めているため、沼のカモ類は環境の指標となります。伊豆沼では、カモ類のほとんどが沼の外で採食するマガモなどの種類で、沼の中で水草を食べるヒドリガモ、魚を食べるミコアイサの数は少ない状況が続いています。後者の個体数の減少には、外来生物であるオオクチバスによる小魚の捕食を通じた餌の減少が影響していると考えられており、実際に駆除によってオオクチバスが減ると、ミコアイサの個体数は回復に転じたそうです。

国内でも鳥インフルエンザへの対策のために、2000年代から感染リスクを増大させる野生の鳥への餌づけが制限されるようになりました。嶋田さんたちは、科学的な対策のために、餌づけが鳥たちにとってどのような影響を与えるのかを調査されました。給餌される餌のエネルギーと、鳥の個体数と体重から算出した代謝エネルギーの量を比較すると、厳冬期には餌づけだけでは消費カロリーをまかなえていないことがわかりました。このデータをもとに、餌づけの量をおよそ8割削減して餌場からの分散を促し、消毒などの措置を併せて実施することで、鳥インフルエンザの対策を行っているとのことでした。

講演のあとには、カモがハクチョウの糞を食べる際の周辺の状況や、コロナ禍における観光客の減少による餌づけ量の変化、農耕の歴史とカモ類の個体数の変化などについて質問が寄せられ、嶋田さんにお答えいただきました。今回の鳥学講座は、最大同時に88人の方にご視聴いただきました。お話しいただいた嶋田さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

今回の講演は10月15日（土）まで、鳥の博物館のYoutubeチャンネルにて見逃し配信を行っています。ご興味があるけれど見逃した方や、もう一度見たい方は以下のリンクからご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=o5glB9aM1Q8>

企画展「手賀沼の鳥 ―環境と水鳥 いま・むかし―」では、今回ご紹介いただいたカモ科の鳥を含む手賀沼の水鳥たちの個体数の移り変わりについて展示しています。11月27日（日）までの開催ですので、ぜひ鳥の博物館にもお越しください。

参考資料

- ・今回の講演のレジュメ（PDF直リンク）

https://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/gyoji/event/index.files/torihaku_seminar202210.pdf

- ・知って楽しいカモ学講座 ―カモ、ガン、ハクチョウのせかい―

<https://www.midorishobo.co.jp/SHOP/1598.html>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Augustの過去ログを見えています。

August23日Tuesday: 2022年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△捕獲許可を得て巣から取り出したモズの卵

8月20日に、2022年8月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所専門員の千田万里子さんに「鳥にまつわる法律のハナシ」と題してお話しいただきました。今回のお話は、2016年7月に対面の催しでお話しした内容の再演です。

落ちている鳥の羽を拾う、けがをしている鳥を保護する、巣を撤去したい、など「この行為はやってもいいのかな？」と迷うような具体的な事例を挙げてい

< 2022-08 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

ただき、その背景となる法律について解説していただきました。

google.co.jp

日本で鳥の保護や管理にかかわる法律は大きく分けて3つあります。

(1) 鳥獣保護管理法

鳥獣保護法では、野鳥は勝手に捕獲してはいけないこと、巣や卵の捕獲行為には許可申請が必要なが定められています。狩猟の期間や対象となる鳥獣について定められているのもこの法律です。傷ついた野鳥を保護したりする場合は、まず都道府県等の担当部署に連絡をして許可を得ることが望まれます。



(2) 種の保存法

国際的に野生動物の取引を規制するワシントン条約の国内法です。この該当種の羽毛を拾った場合、他の人に譲ったりすると違法となってしまいます。該当する種の死体などを見つけた際には、死因の究明などのため、担当する環境省の地方環境事務所に連絡してほしいとのことでした。

(3) 文化財保護法

この法律によって天然記念物または特別天然記念物に指定されている種を捕獲したり、対象種の巣を撤去したりする場合には、文化庁の許可が必要となります。

加えて、各地方自治体などが独自に条例で保護を定めている場合もあるそうです。また、対応の方法が微妙に異なることもあるので、詳しくは該当する市町村や都道府県の担当部署に問い合わせるのが最も確実とのことでした。

講演のあとに、防鳥ネットに鳥がかかっている場合の対応方法、狩猟期間に捕獲した鳥獣を飼養することの問題点などについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、千田さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に106人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、9月3日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=BnTMegXBink&t=6s>

9月は鳥のサイエンストークはお休みです。次回、2022年10月の鳥のサイエンストークは、鳥の博物館の小田谷が、鳥の博物館が手賀沼周辺で行っている鳥類調査についてお話しします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Julyの過去ログをえています。

July31日Sunday: 手賀沼の魚を観察しました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

7月30日の土曜日に事前申込制のイベント「手賀沼の魚をみよう」を実施しました。コロナ禍で定員は以前より少なく設定していますが、17名の方にご参加いただきました。夏場のイベントなので、館内であらかじめスケジュールや生き物のお話をしてから外に出ました。



▲観察できる可能性のある魚と水草の今昔（昔：ガシャモク/今：ナガエツルノゲイトウ、オオバナミズキンバイなど）をお話しました

< 2022-07 >

日	月	火	水	木	金	土
						1 2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)



鳥の博物館友の会

google.co.jp



▲手賀大橋をバックに釣りスタート



▲短時間でモツゴ（写真左）、オイカワ（写真右）、タイリクバラタナゴが釣れました。



▲次はあらかじめ仕掛けておいたもんどりを回収。栈橋の老朽化によりスタッフだけの回収にしました



▲もんどりにはたくさんの魚が入っていました



▲モツゴ大漁。おっと、タモロコも混ざっていますね



▲仕分けして特徴や見分けるポイントをお話しました。モツゴとタイリクバラタナゴが圧倒的に多く、タモロコ、スジエビなど、他にミニ手賀沼でカダヤシなどを採集しました。



▲魚と遊んだら元の場所に返しました。また遊ぼうね。

July31日Sunday: 親子の日、イベントに鳥博出張！

カテゴリ: General 投稿者: someya

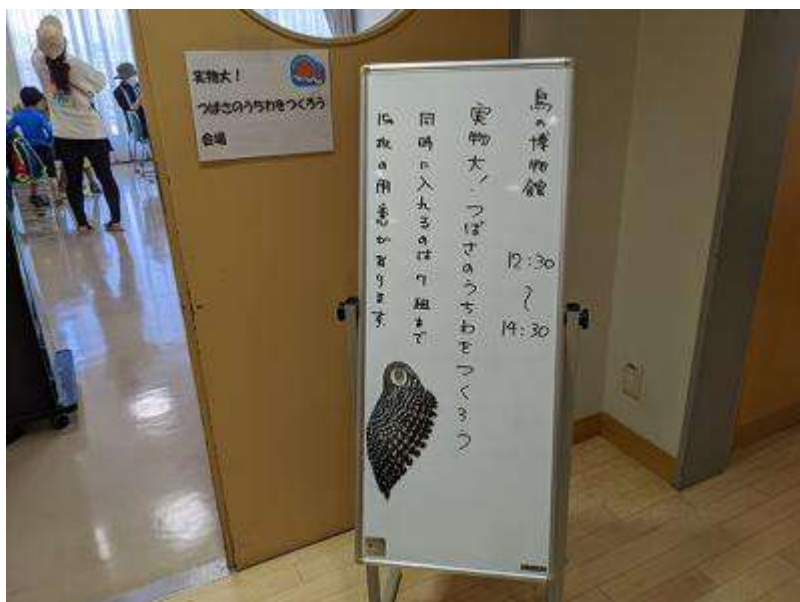
7月の第4日曜日は「親子の日」です。親子の日に合わせて、今年是我孫子市でイベントが開催されました。鳥の博物館からはミュージアムショップと工作の2つのブースを出店しました。会場のアビスタは来場者で賑わっていました。暑い日で大変な中、鳥博スタッフも力を合わせて頑張りました。



▲我孫子市では初めて開催された親子の日イベント



▲鳥博ミュージアムショップのグッズを販売しました



▲実物大のつばさうちわの工作ブース



▲スタートと同時にたくさんの方が来てくれました。参加者総数は137名でした。混み合っている時は写真が撮れず、一段落してからの撮影です。



▲掲示物を貼って鳥博をPR

暑い中、鳥博ブースをのぞいてくださったみなさま、ありがとうございました。夏休み期間を利用して鳥の博物館にも遊びにきてくださいね。

July31日Sunday: ミニ手賀沼で生き物調べ&水草植栽イベント

カテゴリ: General 投稿者: someya

鳥の博物館の目の前にある手賀沼親水広場内には手賀沼を模した「ミニ手賀沼」があります。毎年7月、ミニ手賀沼にどんな生き物がいるのか調べることと、手賀沼では絶滅してしまったガシャモクという水草を植えるイベントが開催されています。今年もお手伝いで参加してきました。



暑い中、いざ生き物採集スタート



私はみなさんが採集してきた生き物を預かり、種類ごとに仕分けました



最後はミニ手賀沼内にガシャモクを植えました

ミニ手賀沼にガシャモクを植えて繁茂することもあります。いつの間にかなくなってしまいます。ガシャモクは透き通った黄緑色の葉が特徴のキレイな水草です。ガシャモクでいっぱいになったミニ手賀沼を楽しみに待ちたいと思います。

July18日Monday: 2022年7月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△かつて南鳥島で繁殖していたカツオドリ。

7月16日に、2022年7月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の小林さやかさんに「明治期の標本が語る—南鳥島の話」と題してお話いただきました。

南鳥島は小笠原諸島に属する日本最東端の島で、1896年（明治29年）から人が移住し、グアノ（鳥の糞が堆積してできたもので、リンが多く含まれるため肥料として使われていた）や鳥類の剥製・羽毛の輸出などが行われていました。しかし、1902年（明治35年）7月にアメリカの帆船「ワーレン号」が領有を目的にハワイから南鳥島に向けて出港しました。これを察知した日本政府は軍艦「笠置」を派遣して海軍兵を南鳥島に配置し、ワーレン号を退けました。これを南鳥島事件といいます。

山階鳥類研究所の収蔵庫からは、この時期に南鳥島で採集され、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）に寄贈された標本が合計26点見つかりました。これらは、南鳥島事件で派遣された海軍軍人の秋元秀太郎と、南鳥島で剥製業を営んでいた上滝七五郎が東京帝室博物館へ寄贈したものでした。秋元は「南鳥島事件」で派遣された1902年7月から8月に標本を入手し、上滝は南鳥島で剥製業を開始した1900年から、標本を寄贈する1902年10月までに標本を入手したと推定されます。

再発見されたこれらの標本には、採集地がラベルに記載されていないものが10点含まれていましたが、小林さんは、帝室博物館の台帳と照合することで、標本の採集情報を復元し、学術的な価値を高める研究に取り組みました。また、種が不明だった9点についても再同定を行われました。

この調査の結果、帝室博物館の南鳥島産の鳥類標本には11種が含まれることがわかりました。この中にはコミズナギドリやシロアジサシなど、現在の日本に繁殖地が知られていない種や、オナガミズナギドリやカツオドリなど、現在は南鳥島では絶滅してしまった種の標本が含まれることもわかりました。これま

で知られている他の調査結果と併せて、当時の南鳥島の鳥類相がいかに豊かだったかの証拠となる貴重な標本群であることが分かったそうです。

講演のあとに、鳥類の剥製は現地で製作されていたのかや、南鳥島で行われた他の調査がなかったかどうかなどについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、小林さんにお答えいただきました。今回のオンライン講演は、最大同時に62人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回は、7月30日（土）まで見逃し配信を行います。配信したURLと同一の以下のリンクよりご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=L0BtBomyb5g>

次回、2022年8月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所研究員の千田万里子さんに、野生の鳥にまつわる法律についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

小林さやか・加藤 克 (2022) 明治期の南鳥島産鳥類標本の情報復元. 山階鳥類学雑誌 54(1): 103-139.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/54/1/54_103/_article/-char/ja

*7/21に内容の修正を行いました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Juneの過去ログをしています。

June18日Saturday: 2022年6月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△標識足環を装着されるハマシギ（許可を得て捕獲されたものです）。

6月18日に、2022年6月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の齋藤武馬さんに「日本に渡ってくるハマシギはどこから来るのか？—DNA分析から繁殖集団を推定する—」と題してお話いただきました。

ハマシギはチドリ目シギ科のうち小型の鳥で、日本では繁殖しておらず、渡りの途中で立ち寄ったり、越冬のためにやってくる渡り鳥です。国内で越冬しているシギ・チドリの中では最も数が多く、国内で3万羽程度が越冬していますが、その個体数は減少しているといわれています。ハマシギは北半球に広く繁殖分布し、10ほどの亜種に分けられています。そのため、それぞれの亜種がどこからどこに渡っているのかを調べるのが、保全上の重要な課題となっています。

< 2022-06 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4

5 6 7 8 9 10 11

12 13 14 15 16 17 18

19 20 21 22 23 24 25

26 27 28 29 30

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

山階鳥類研究所では、環境省の委託を受けてシギ・チドリ類の渡り経路の追跡調査を進めています。これまでの研究で、日本国内で越冬するハマシギの多くはアラスカで繁殖する亜種キタアラスカハマシギであることがわかっています（参考資料の2019年5月のテーマトークの報告をご覧ください）。さらに、分布域からはユーラシア大陸で繁殖する別の3亜種（亜種ハマシギ、亜種カムチャッカハマシギ、亜種カラフトハマシギ）が渡来している可能性があることが指摘されています。しかし、ハマシギの亜種による羽色の違いは夏羽でしか明瞭ではないため、越冬期の国内での亜種の識別は容易ではなく、DNAを用いた解析が待たれていました。

google.co.jp



国内や周辺地域で捕獲されたハマシギから採集されたサンプルについて、ミトコンドリアDNAのD-loop領域の配列を比較してみると、大きく分けて3つのグループに分けられました。(1)亜種キタアラスカハマシギのグループ、(2)亜種カラフトハマシギと亜種カムチャッカハマシギからなるグループ、(3)亜種カムチャッカハマシギと亜種ハマシギからなるグループです。このうち、国内で越冬していた多くの個体は(1)のグループに含まれましたが、渡り時期には(3)のグループに含まれる個体も見つかりました。(2)のグループに含まれる個体は、今回の解析では見つかりませんでした。

以上のことから、フラッグによる調査で分かっていた結果と同様に、国内で越冬するハマシギの多くは亜種キタアラスカハマシギである可能性が高いことが確認されました。また、亜種ハマシギや亜種カムチャッカハマシギも渡来の可能性があることがDNAによる解析結果からも示唆されました。しかし、今回調べた領域では、そもそも繁殖地で採取された同じ亜種のサンプルの中にも複数の遺伝子のタイプが見つかるため、亜種についてははっきりとした結論を出すことができなかつたとのこと。今後、さらに詳細な遺伝的な解析が進められれば、はっきりしたことがわかるかもしれません。

講演のあとに、遺伝的な解析手法や、亜種キタアラスカハマシギ以外の亜種の越冬する場所などについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、齋藤さんにお答えいただきました。今回のオンライン講演は、最大同時に87人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回は、主催者側の都合により見逃し配信は行いません。見られなかった方には申し訳ありませんが、ご理解いただけますよう、よろしくお願いいたします。

次回、2022年7月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所研究員の小林さやかさんに、日本最東端の島である南鳥島で採集された鳥類標本についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

2019年5月のテーマトーク「日本に渡ってくるハマシギの亜種はどれ？」

<http://strix.in/blog/index.php?itemid=685>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Mayの過去ログを見えています。

May21日Saturday: 2022年5月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



△発信器付き首環を装着されたカリガネ（右）とマガン

5月21日に、2022年5月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の澤 祐介さんに「潮目が変わる！？ガン類追跡の今」と題してお話いただきました。

ガン類はカモ目カモ科のうち中型の鳥で、日本には越冬のためにロシアなどから飛来する渡り鳥です。日本を含む東アジアには9種が生息しており、日本にはそのうちマガン、ヒシクイ、コクガンが比較的広い範囲に渡来し、シジュウカラガン、ハクガン、カリガネが局地的に渡来します。サカツラガン、ハイイロガン、インドガンは国内で定期的に越冬する群れは知られていません。

澤さんたちが調査を始めるまでに、国内で越冬する個体の渡り追跡が行われて

< 2022-05 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

きたのはマガン、ヒシクイ、コクガンの3種で、首環や発信機による追跡調査によって繁殖地、中継地や春の渡り経路などが明らかにされてきました。これに加えて、近年では次の3つのポイントをきっかけに、日本国内でのガン類の渡り追跡の研究が大幅に進展しているそうです。

google.co.jp



(1)追跡機器の進化

これまではガン類の追跡には衛星発信機が主に使用されてきましたが、これは衛星通信の使用料がかかり、少数の個体しか追跡できませんでした。近年では携帯電話の通信網を利用した発信機が普及しており、比較的安価に多くの個体を追跡することができるようになりました。また、アンテナが内臓されているため、ガン類に装着した発信機を壊されにくくなったこともメリットだそうです。

(2)中国の研究者による大規模追跡研究

近年、中国の研究者によって東アジアの各種の追跡研究が発表され（以下の参考資料をご参照ください）、これによって日本で取り組むべき課題（カリガネの日本での越冬個体群の追跡や、ユーラシア大陸ではほとんど越冬しないシジュウカラガンやハクガンの追跡）が明確になったそうです。

(3)希少なガン類の個体数回復

カリガネ、ハクガン、シジュウカラガンの個体数はかつては非常に少ない状況が続いていましたが、特に後者2種は積極的な再導入活動や保全によって日本に渡来する個体数が大幅に回復しました。そのため、現実的に捕獲を行って追跡できる見通しが立ってきたとのことでした。

このような状況を受けて、澤さんたちのグループでは2017年からコクガン、2020年からカリガネとマガン、2021年からハクガンとシジュウカラガンの追跡を開始しました。その結果、コクガンの繁殖地やこれまで知られていなかった黄海の越冬地の特定、カリガネの繁殖地や渡り経路の特定などの成果をあげられたそうです。ハクガンとシジュウカラガンは携帯電話の電波網の圏外に出たことによって現在の位置情報は不明となっていますが、秋になって電波の圏内に南下してくれば、繁殖地や渡り経路のデータが得られるだろうとのことでした。これらの種の繁殖地や渡り経路が判明するのが結果がとても楽しみです。

講演のあとに、コクガンの黄海の越冬地での利用環境や、首環や発信機をかわいそうだと思う人にどのように説明しているかについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、澤さんにお答えいただきました。今回のオンライン講演は、最大同時に101人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、6月4日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://www.youtube.com/watch?v=gtD5C1kdFfy>

次回、2022年5月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所研究員の齋藤武馬さんに、日本に渡来するハマシギの亜種について、DNAを用いて推定した研究についてお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴くださ

い。

参考資料：

希少ガンのシンポジウム（2021年1月30日に開催されたもので、Youtubeで視聴できます）

<https://www.youtube.com/watch?v=7eQ9rCozLEI>

Wildfowl 2020年特別号 東アジアのガンカモ類の渡り（それぞれの英語論文をどなたでも見ることができます）

<https://wildfowl.wwt.org.uk/index.php/wildfowl/issue/view/300>

May10日Tuesday: 2022年のバードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya

2022年5月8日（日）に、Enjoy手賀沼！と併せて、第33回バードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました。この観察会は、山階鳥類研究所の後援をいただき、我孫子野鳥を守る会と我孫子市鳥の博物館が共催で開催しているものです。2020年と2021年*は新型コロナウイルスの感染防止のため残念ながら探鳥会は中止となりましたので、今回は3年ぶりの開催となりました。



▲集合場所のようす。

前日までの雨は上がり、さわやかな天候の中、手賀沼沿いを歩いてバードウォッチングを楽しみました。5つの班に分かれて出発し、1時間コース（1班）と2時間コース（4班）に分かれて鳥を探しました。



▲手賀沼遊歩道から観察を行いました。



▲水田で餌を探していたセグロセキレイ



▲空中で昆虫をとらえて巣に運んでいたスズメ

各班を合計して29種の鳥たちに会うことができ、我孫子野鳥を守る会のみなさんにサポートいただいたおかげで充実した観察ができたと思います。

今回の探鳥会には一般の方50名、我孫子野鳥を守る会の会員のみなさまの32名の参加がありました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

今回は定員を50名に絞って申し込み制で開催しました。途中から申し込み者多数のためキャンセル待ちでの受付となってしまう、ご希望に添えなかったみなさまには申し訳ありませんでした。鳥の博物館では周年「てがたん」をはじめとする自然観察会を実施しておりますので、別の機会にぜひご参加いただければと思います。

*中止となった年の誤りを修正しました (5/18)

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Aprilの過去ログをしています。

April16日Saturday: 2022年4月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



▲岩棚に作られたオオトラツグミの巣（ビデオカメラにて無人で十分な距離を保って撮影されたもの）。

4月16日に、2022年4月の「鳥のサイエンストーク」を実施しました。これまで「テーマトーク」として2011年より実施してきましたが、より内容が分かりやすい名称に変更して多くの方に視聴いただくため、今月からタイトルを改称いたしました。

これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所自然誌・保全研究ディレクターの水田 拓さんに「目に見えるものだけを信じるな—奄美大島の絶滅危惧種オオトラツグミの巣の特徴—」と題してお話いただきました。

鳥の巣は、卵を生み、ヒナを育てる構造物で、その形や場所は鳥のグループや種によって様々です。巣は動くことのできない卵やヒナを襲うことができるた

< 2022-04 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

め、捕食者によっては容易に手に入るよい食物となります。そのため、巣の捕食は鳥の繁殖失敗の主な要因の一つになっており、捕食を避けるための色彩や行動が進化してきました。このような巣の特徴を調べることは、進化の研究だけでなく、絶滅危惧種の保全に際しても重要となります。

google.co.jp



オオトラツグミは、日本鳥類目録7版では、日本本土に広く分布するトラツグミ *Zoothera dauma*の亜種とされています。オオトラツグミの姿は本土のトラツグミとよく似ていますが、囀りは大きく異なり、マミジロに似た「キョローン」という声の特徴です。森林伐採や外来種の影響によって数を減らしていましたが、近年では個体数が回復傾向にあります。

水田さんの研究によって、オオトラツグミの好む環境は、大きなスケールでは、標高と林齢が高く、広葉樹林の面積が広い森林が適していることがわかりました。一方、小さなスケールでは、巣は木の又に作る事が多く、3メートルほどの低い位置に作られていることが多いことがわかりました。しかし、水田さんによれば、この結果は「ちょっと慎重さを欠いていた」とのこと。それはなぜなのでしょう。

オオトラツグミの巣の見つけ方には大きく分けて、(1)偶然見つける場合、(2)親の行動を追跡して見つける場合の2つがあります。これまでに(1)では62巣、(2)では44巣が見つかっています。これらの見つけ方によって、見つける巣のタイプを比較したところ、(1)の方法で見つける巣はより低い位置にあり、木の又に作られている割合が高いことがわかりました。(2)の方法で見つける巣は比較的高い場所にあり、折れた幹の上や岩棚にある割合が高かったのです。オオトラツグミにとって林内の枯死木は重要な資源であるということも、この再解析によって明らかになりました。

目につくところにある巣は見つけやすく、目立たない巣は見つけにくいという、当たり前かもしれないことですが、得られた結果だけを見ていると見落としがちになってしまいそうです。このように、目につきやすいものだけをみて物事を判断すると、誤った結論を出してしまう可能性があるという教訓でお話を締めくくられました。

講演のあとに、巣の場所ごとの繁殖成功率の違いがあるかどうかや、実際に存在する巣の場所を偏りなく見つけるためにはどんな方法が考えられるかについて、視聴者の皆さんからのご質問をいただき、水田さんにお答えいただきました。

また、鳥の巣を観察・撮影するときの一般的な注意点についてもお話いただきました。鳥の巣に近づくと、親鳥が抱卵や給餌のために巣に戻る事ができない、人間のにおいを付けて捕食を誘発するなどの悪影響が懸念されるので、必要がない場合には巣に接近せず、必要がある場合も影響を最小限にとどめるような工夫が必要とのことでした。

今回のオンライン講演は、最大同時に94人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、4月30日(土)まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://youtu.be/Au1X4QFEnPk>

次回、2022年5月の鳥のサイエンストークは、山階鳥類研究所研究員の澤祐介さんに、ガン類の渡り追跡に関する最新の話をお話しいたします。
配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイト
で改めてご案内します。次回もぜひご視聴ください。

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Marchの過去ログを見えています。

March19日Saturday: 2022年3月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: mochizuki



▲日本で最も身近な鳥の一つのキジバト

3月19日に、2022年3月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信を用いています。今回は、我孫子市鳥の博物館学芸員の望月が「DNAから明らかになったキジバトの進化史」と題してお話ししました。

DNAは生物の設計図であり、鳥類は核DNAとミトコンドリアDNA(以下mtDNA)の2種類を持ちます。この2つのDNAは親からの遺伝の仕方が異なり、核DNAは両親から半分ずつ、mtDNAは雌親から遺伝することが分かっています。またDNAには変異の起こりやすい場所や逆に変異が起こりにくい場所など様々な機能がわかっており、それらの特性を利用して進化の歴史を推定することが可能です。近年行われた進化史の研究の例として、小笠原諸島のヒヨドリの研究やメボソムシクイの分類について簡単に紹介をしました。

< 2022-03 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

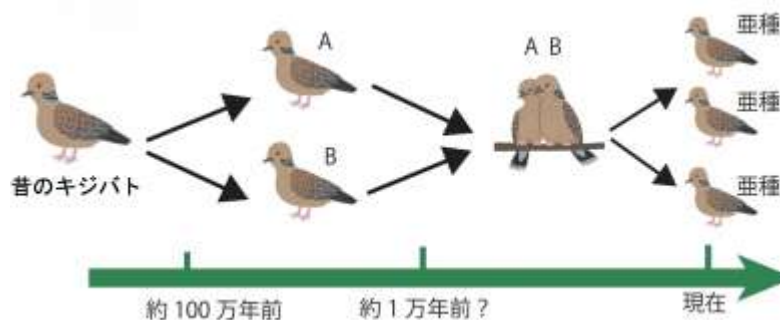
google.co.jp



キジバトはユーラシア大陸の中央から東側に広く分布する種で、2015年に行われたmtDNAの調査によって遺伝的に大きく異なる2タイプがいることが分かっており、隠蔽種の候補として挙げられていました。しかしmtDNAの2タイプが本当に隠蔽種であるか明らかにするためには核DNAの解析をする必要があります。そこで、国内外のキジバトのDNAサンプルを収集しDNA解析を行いました。サンプルは、本州、南西諸島、北海道、ロシア、台湾、中国、ミャンマーと広い地域から収集を行いました。

その結果、キジバトのmtDNAの2タイプは広い地域で確認されること、核DNAとmtDNAの系統は一致しないこと、キジバトの亜種間には核DNAのマイクロサテライト領域に殆ど遺伝的な差がないことなどが明らかになりました。

この結果から、キジバトは約100万年前に2タイプに分かれたのち、比較的最近(約1万年前)になってからこの2タイプが交雑し、さらに現在の亜種に分かれていったという進化史を推定することができました。



講演のあとに、隠蔽種が見つかる頻度についての質問や、mtDNAの2タイプを持つ個体間で生態的な違いがあるかどうか、過去に2タイプに分かれた要因についてなどの質疑応答を行いました。

今回のオンライン講演は、最大同時に146人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信は、4月2日(土)まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://www.youtube.com/watch?v=xphFsQPMNkk>

次回、2022年4月のテーマトークは、山階鳥類研究所の水田拓さんに、奄美大島のオオトラツグミの生態に関する話題をご紹介します。

配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Februaryの過去ログをしています。

February23日Wednesday: 2022年2月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



▲鳥に装着された発信機によって、一度に長距離を渡ることがわかったオオソリハシシギ。

2月19日に、2022年2月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所研究員の森本 元さんに「さまざまな鳥の渡りー鳥の渡り研究の発展とよもやま話ー」と題してお話いただきました。

鳥の渡りは、古くから多くの人の注目を集め、多くの研究者によって調べられてきました。その伝統的な手法の一つが、鳥類標識調査です。鳥類標識調査は、鳥に個体識別のための足環などを装着して放鳥し、再捕獲や観察によって情報を収集することによって、鳥の移動や寿命を調べる調査です。日本では、1924年に始まってから、90年以上にわたって続けられており、現在では環境省が山階鳥類研究所に委託して事業が継続されています。

< 2022-02 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

google.co.jp



30年ほど前からは、GPS発信機や記録計を鳥そのものに取り付けることにより、より詳細な移動の調査が行われるようになりました。これによって、渡り研究は飛躍的に進展し、既存の標識調査のデータと組み合わせることで、多くの鳥の渡り経路や渡りの戦略が明らかになっています。しかし、これらの情報は一般のバードウォッチャーや愛好家の人にとって、ひとつひとつもとになった論文にアクセスするのは難しいでしょう。そこで、鳥の渡りについて近年出版された、森本さんおすすめの日本語書籍をいくつかご紹介いただきました。

「鳥の渡り生態学」（2021年、東京大学出版会）は、鳥の渡りについて様々な分類群や観点からまとめられた総合的な学術書で、鳥の渡りを総合的に深く学びたいという人に向いているそうです。「世界の渡り鳥図鑑」（2021年、緑書房）は、世界の様々な鳥の渡りが魅力的な写真とともに紹介されており、世界の鳥の渡りの多様性を知るのに向いているそうです。「日本の渡り鳥ガイド」（2019年、文一総合出版）は、渡り鳥を観察するためのコツが紹介されており、実際に野外で観察したい人に役立つ情報が含まれているそうです。他にも、渡り鳥に関する魅力的な書籍をご紹介いただきました。

講演のあとに、標識調査の放鳥地と回収地を結ぶ線の意味や、渡り鳥への餌づけの是非などについて質問をいただき、森本さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に138人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、2月26日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://www.youtube.com/watch?v=n4JU1b4KpKc>

次回、2022年3月のテーマトークは、我孫子市鳥の博物館の望月が、DNAを用いた研究によって明らかになったキジバトの進化史についてお話しします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

鳥類標識調査について

<https://www.biodic.go.jp/banding/search.html>

鳥類アトラス

<https://www.biodic.go.jp/banding/atlas.html>

鳥の渡り生態学

<http://www.utp.or.jp/book/b577415.html>

世界の渡り鳥大図鑑

<https://www.midorishobo.co.jp/SHOP/1584.html>

日本の渡り鳥観察ガイド

<https://www.bun-ichi.co.jp/tabid/57/pdid/978-4-8299-7508-4/Default.aspx>

February19日Saturday: 鳥博、出張展示～あびこショッピングプラザ～

カテゴリ: General 投稿者: someya

2月18日（金）から2月22日（火）まで、あびこショッピングプラザ3階市民ギャラリーにて「内山春雄のバードカービング展」を開催しています。

同時期に、1階フードコートイベントスペースにて鳥の博物館の紹介&手賀沼周辺で見られる鳥について展示を行っています。鳥の博物館ってどんなところ？どこにあるの？なんて思った方は、お買い物ついでに展示をご覧ください。そして、ぜひ鳥の博物館にお越し下さい。



▲お買い物袋をさげている方が目立ちました



▲「すごい、すごい」とパネルをみてくれていました
博物館で待ってるね



鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2022年Januaryの過去ログを見えています。

January15日Saturday: 2022年1月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



▲キンバトの雄（撮影：仲地邦博氏）

1月15日に、2022年1月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所広報ディレクターの平岡 考さんに「標本から鳥の換羽を調べる—先島諸島産のキンバトの調査」と題してお話いただきました。

換羽とは、周期的な羽毛の更新のことをいい、1年に1回の基本的な更新スケジュールに加え、成長段階や季節によって様々な生え替わりの方式があります。換羽は繁殖、渡りとならぶ鳥にとっての大イベントであるため、鳥がどのように暮らしているのかの研究をする上で重要です。また、換羽の方式を理解することで、鳥の年齢を識別する事が出来る場合が多く、様々な生態研究に役立つ基礎的な情報となります。

キンバトは東南アジアから南アジア、オーストラリアに分布する小形のハトの仲間です。日本では沖縄県南部の先島諸島にのみ生息しています。日本産の亜種は分布が狭く希少なため、国内希少野生動植物種や天然記念物に指定されています。

< 2022-01 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

検索

ナビゲーション

- [前の月](#)
- [次の月](#)
- [今日の投稿](#)
- [過去ログ](#)

カテゴリ

- [全てのカテゴリ](#)
- [General](#)
- [お知らせ](#)
- [今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

- [我孫子市鳥の博物館](#)
- [フィールドミュージアム](#)
- [ふくろうトピックス](#)
- [とりはく自然通信](#)

鳥の博物館友の会

[google.co.jp](https://www.google.co.jp)

平岡さんは、この地域で窓ガラスにぶつかって死んでしまったあと山階鳥類研究所に寄贈されたキンバト22羽の初列風切の換羽を調べました。その結果、成鳥・幼鳥ともに夏から秋にかけて最も内側の初列風切から換羽が始まること、その換羽は繁殖期までに完了している場合と、外側数枚を残して繁殖期中断する場合がありますことがわかりました。残された外側数枚の風切羽の換羽は、中断した後に再開されるようです。このとき、次の換羽のサイクルが再び始まるので、一時的に翼に3世代の羽毛が見られる事があるということでした。このような換羽サイクルは、渡りをしない亜熱帯の鳥や、あるいはハト科の鳥に特徴的であるかもしれないとのことでした。

このような羽衣の変化や生殖器の確認の結果から得られる基本的な情報をもとに図鑑が作られること、今後も情報を蓄積していくために、鳥類の死体の寄贈を引き続きお願いしたいということをお話しされ、お話を締めくくられていました。

講演のあとに、生殖器の確認によって年齢を識別する事は可能かどうか、キンバトのような天然記念物の鳥の死体を拾ったときはどのような届出が必要なのか、温帯の鳥と亜熱帯の鳥の換羽はどのように異なるのかなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に80人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信は、1月22日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://www.youtube.com/watch?v=rNAK0mPp9PE>

次回、2022年2月のテーマトークは、山階鳥類研究所の森本 元さんに、鳥類標識調査や最近の追跡機器によって明らかになった様々な鳥の渡りに関する話題をご紹介します。

配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

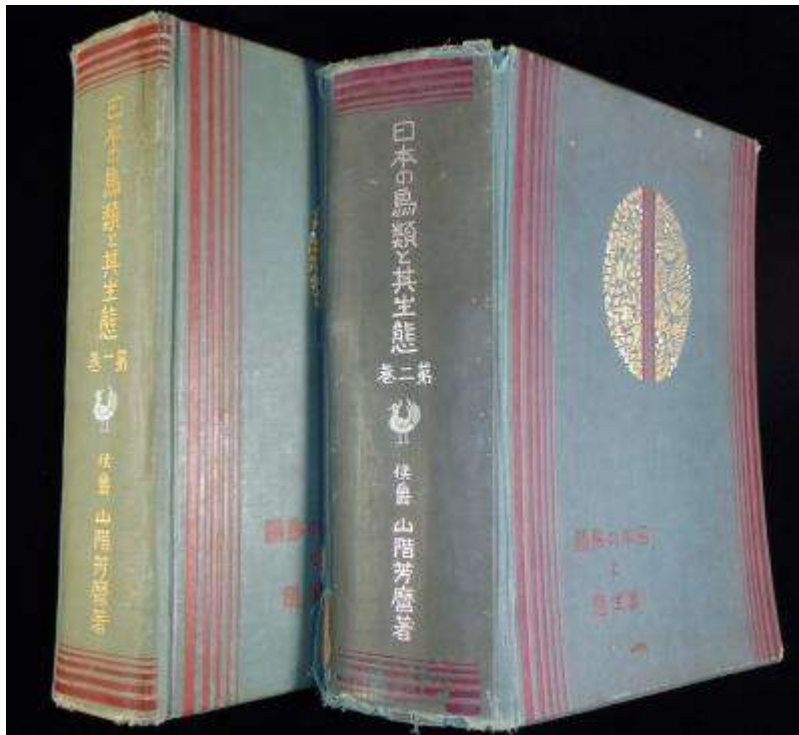
過去ログ

あなたは現在、2021年Decemberの過去ログをしています。

December18日Saturday: 2021年12月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



12月18日に、2021年12月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所 コレクションディレクターの鶴見みや古さんに「山階博士が作った図鑑、こんな資料が残っていました」と題してお話いただきました。

山階鳥類研究所創設理事長、山階芳麿博士（1900-1989）は、「日本の鳥類と其の生態」という図鑑を1934年（第1巻）と1941年（第2巻）に出版しました。山階博士はドイツ留学時に手にした図譜の美しい版画の挿絵に影響を受けて、日本産鳥類について同様の書籍を作ることを志したそうです。

< 2021-12 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

「日本の鳥類と其の生態」の巻頭には、本書の目的として、「本書は日本産鳥類全部に関する既知の事項を総合整理して一般の了解に便すると共に将来の研究の伴侶たらしむる目的を以って執筆したものである。」と記されており、日本産鳥類の形態や生態について文章と精緻な図を用いて大変詳しく述べられています。この図鑑に用いられた原稿や原図などの資料は、現在も山階鳥類研究所に多く保管されています。

google.co.jp



本書の図の多くには「著者原図」と記されていますが、実は、これらの多くは山階博士自身の手によるものではありません。最も多くの図版を描いたのは鳥類画家の小林重三（こばやし・しげかず）で、小林が原図を描いた後、木口木版（こぐちもくはん）の職人によって版木が彫られ、図版として使用されたものです。また、カラーの図版のいくつかは、山階博士の夫人の山階寿賀子によって描かれたものであることがわかりました。いずれの図版も、標本をもとにして描かれたものであることが、原画の裏に残されているメモから明らかになっています。また、これらの図版の原画や木版の試し刷りには、山階博士による修正指示があったこともわかっています。

本書は当初5巻組で出版される予定でしたが、第2次世界大戦の様々な影響で、3巻以降は完成することはありませんでした。しかし、その情報量や内容の正確さから、現在でも多くの研究者に活用されています。

第1巻の出版社である梓書房の岡茂雄と、第2巻の出版社である岩波書店の岩波茂雄は、ともに堅牢な書籍を出版することに強いこだわりを持っていたようで、出版前の試験として本を床にたたきつけてその丈夫さをテストしていたとのエピソードもご紹介いただきました。

講演のあとに、質疑応答が交わされ、「3巻以降の構成についてやその残っている資料はあるのか」「木口木版を彫った人は誰なのか」などについて鶴見さんにお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に55人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、12月25日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://www.youtube.com/watch?v=1bzIFeNz0IY>

次回、2022年1月のテーマトークは、山階鳥類研究所の平岡 考さんに、標本を利用して鳥の換羽を調べる例として、先島諸島産のキンバトに関する調査結果をお話しいただきます。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

・今回のお話のもとになった報告：

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jyio/45/2/45_136/_article/-char/ja/

・小林重三について

<http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/shozomeihin/meihin04.html>

・山階寿賀子について

<http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/shozomeihin/meihin02.html>

December12日Sunday: 第17回友の会展がはじまりました

カテゴリ: General 投稿者: saito

今年で設立20周年を迎える鳥の博物館友の会。第17回目の企画展が始まりました。

今回のメイン展示は、鳥凧同好会のクマタカ凧づくりです。クマタカ凧が出来上がるまでを詳しく紹介しています。

合わせて、デジカメ同好会・鳥絵同好会・万葉集同好会・しちじゅうにこうの会・みて歩こう会の活動も紹介しています。

コロナ感染対策に留意し、ご覧ください。



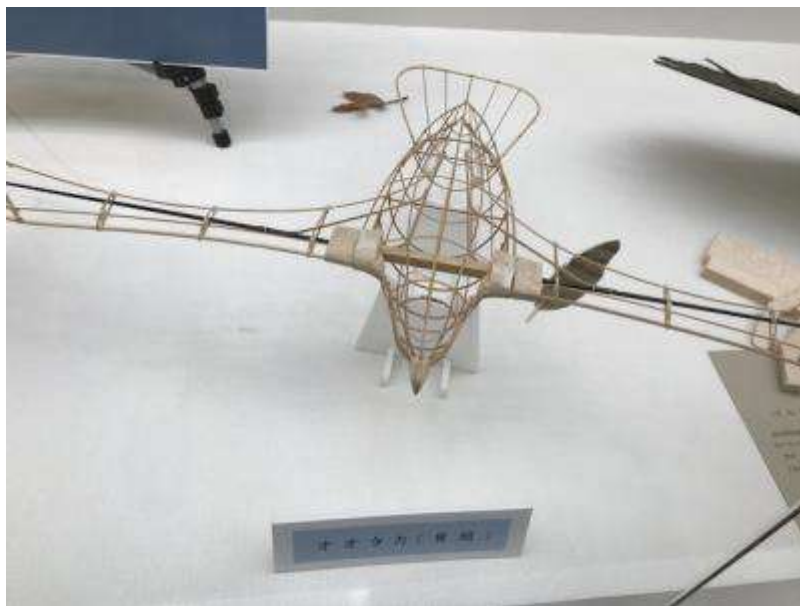
▲展示室入口。



▲鳥凧同好会の展示。



▲今回のメイン展示、クマタカ凧とその制作過程を詳しく紹介しています。



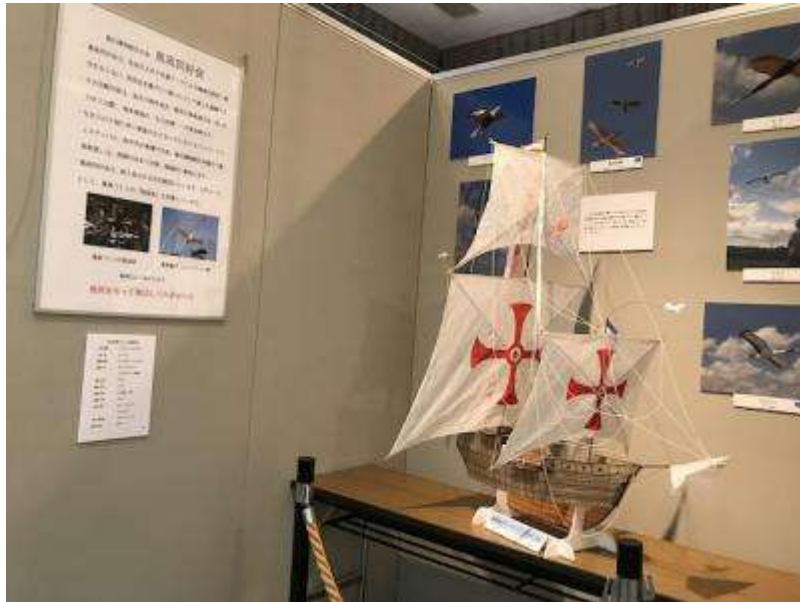
▲クマタカ凧の骨組み。



▲クマタカハのあしの部分の展示。



▲ハづくりの道具と材料。



▲大作、帆船の立体罫。



▲デジカメ同好会の展示。



▲鳥絵同好会の展示。



▲万葉同好会の展示。



▲しちじゅうにこうの会の展示。



▲みて歩こう会の展示。

友の会展は、令和4年1月16日（日）までです。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Novemberの過去ログを見えています。

November 6日Saturday: 第31回JBF鳥学講座を実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



△アホウドリのつがい(左2羽)と“センカクアホウドリ”のメス(右2羽) 撮影：今野美和さん

11日6日（土）に、第31回JBF鳥学講座をオンライン配信にて開催しました。今回は「『センカクアホウドリ』発見記」と題して、北海道大学総合博物館の江田真毅さんと、山階鳥類研究所保全研究室の富田直樹さんのお二人にお話しいただきました。

アホウドリは北太平洋で最大の海鳥ですが、人間による乱獲が原因でその数を減らし、一時は絶滅の危機に陥りました。繁殖地は伊豆諸島の鳥島と尖閣諸島の2か所だけになりましたが、多くの人や団体の保全活動によって、少しずつその個体数を回復させています。近年の研究によって、そんな絶滅危惧種であるアホウドリに2つのグループが含まれ、それぞれは別種に相当すると考えられるようになりました。今回は、その研究にかかわったお二人に、その研究にかかわる様々なトピックについて語っていただきました。

< 2021-11 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4 5 6

7 8 9 10 11 12 13

14 15 16 17 18 19 20

21 22 23 24 25 26 27

28 29 30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



まずは、江田さんに「きっかけは考古鳥類学」と題して、アホウドリに2つの系統が含まれることの発見のきっかけをお話いただきました。江田さんは、北海道の礼文島にある浜中遺跡から出土したオホーツク文化期（5世紀から12世紀ごろ）のアホウドリ類の骨に関する研究を進めていました。骨からの種同定に取り組む際に、出土するアホウドリの骨の大きさに変異が非常に大きいことに気が付きました。DNAの解析によって、この大きさの違いは遺伝的に異なる2つの系統と対応していることが明らかになり、さらに、現在の尖閣諸島産と鳥島産の個体から得られたDNAの違いとも一致しました。このDNA配列の違いの大きさは、他のアホウドリの姉妹種の組み合わせの遺伝的な違いの大きさに相当することがわかりました。すなわち、現在のアホウドリにも2つの遺伝的に大きく異なるグループが存在することが明らかになったのです。

続いて、富田さんに「決め手は鳥類生態学」と題して、これらの2つの系統が別種であることの研究についてお話いただきました。富田さんたち山階鳥類研究所の調査チームは、アホウドリの最大の繁殖地である鳥島で、足環のついていない個体（鳥島生まれ）と足環のついていない個体（尖閣生まれと推定される）の繁殖行動を観察し、番いの組みあわせを調査しました。この調査によって、同じ系統的なタイプ同士でつがいになる傾向があることがわかりました。さらに、鳥島系統の成鳥と尖閣系統の成鳥にジオロケータ（日出・日入などから位置を推定する小型記録計）を付けて非繁殖期の移動を追跡したところ、尖閣系統の個体は鳥島系統の個体が利用しなかったオホーツク海をよく使うことがわかりました。また、それぞれの系統の個体の形態を詳細に計測して解析したところ、尖閣系統の個体は鳥島系統の個体に比べて嘴が細長く、体の大きさが小さいことがわかりました。

このようにして、アホウドリには遺伝的にも形態的にも異なる2種が含まれることが明らかになりました。今後は、どのように2種の生殖隔離が起こっているのかを明らかにすることや、どのように尖閣諸島集団の保全や調査を進めていくかが課題とのことでした。

講演のあとには、遺跡で出土するアホウドリはどのように捕獲されたものか、絶滅した繁殖地の集団はどちらの系統に含まれていたのか、確定していない2種の学名について今後どのように分類学的手続きを進めていくのかなどについて、多くの質問やコメントが寄せられ、江田さんと富田さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回の鳥学講座は、最大同時に133人の方にご視聴いただきました。お話しいただいた江田さんと富田さん、ご視聴いただいたみなさま、ありがとうございました。

11月7日（日）の24：00までの予定で見逃し配信が行われます。見逃した方、もう一度見たい方は以下のページにあるリンクからご覧ください。

<http://www.birdfesta.net/jbf/online.html>

参考資料：

当日のレジユメは、以下からご覧いただけます（PDF直リンク）。

<http://www.yamashina.or.jp/hp/event/images/jbf211106resume.pdf>

今回のお話のもとになったプレスリリース資料は以下よりお読みいただけます
（日本語）

http://www.yamashina.or.jp/hp/p_release/images/20201120_prelease.pdf

今回のお話のもとになった論文は以下よりダウンロードして読むことができます
（英語）

<https://www.int-res.com/abstracts/esr/v43/p375-386/>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Octoberの過去ログを見えています。

October16日Saturday: 2021年10月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



10月16日に、2021年10月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、鳥の博物館の小田谷が「ヤマシギの越冬期の暮らし」と題してお話しました。

水鳥のシギの仲間は主に水辺にすみ、歩いて水の中に入って餌をとることの多い鳥です。しかし、ヤマシギは森林や草地を主なすみかとするちょっと変わった鳥で、夜行性の暮らしに適応した様々な特徴を持っています。秋になると越冬地の関東地方に渡ってきますが、夜行性であるために国内におけるその生態はあまりよく知られていませんでした。

2012年秋から2021年春までに2か所の利根川下流域の調査地を中心に336羽に足環を付けて放鳥し、のべ106羽を再び捕獲しました。それらの捕獲データから、ヤマシギは同じ場所に比較的戻ってくること、12月～2月が主要な越冬期であること、幼鳥の渡来時期や割合は年によってばらつきがあることなどがわか

< 2021-10 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)

りました。また、放鳥した個体のうち2羽がサハリンで繁殖期に回収されたことから、関東地方で越冬する個体の繁殖地の一つであることが示唆されました。これらの基礎的な情報をもとに、さらにヤマシギの越冬期の生活史に関する研究を進めたいと思っています。

講演のあとに、視聴者のみなさんとチャット機能を用いて質疑応答が交わされました。「ダンス」を行うのはアメリカヤマシギだけか、狩猟鳥として十分な個体数があるのか、成鳥と幼鳥で嘴の長さに違いがあるかなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に135人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信は、10月30日（土）まで以下のURLより見逃し配信を行います。

<https://youtu.be/elPluqJb1gl>

11月のテーマトークはお休みです。次回、12月のテーマトークは、山階鳥類研究所コレクションディレクターの鶴見みや古さんに、山階芳麿博士の著書「日本の鳥類と其の生態」の関連資料についての調査結果をお話しいたします。配信方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

October 3日Sunday: 2021年の鳥博セミナーを実施しました！

カテゴリ: **General**

投稿者: **odaya**



写真：移動記録装置を装着されたハリオアマツバメ（撮影：今野怜さん）

2021年10月2日（土）に、令和3年度の鳥博セミナーをオンライン配信にて開催しました。今回は「ハリオアマツバメの繁殖生態と渡り研究の最前線」と題して、酪農学園大学准教授の森 さやかさんにお話しいただきました。

ハリオアマツバメは大型のアマツバメの仲間で、日本では夏鳥として北海道や本

鳥の博物館友の会

google.co.jp



州の高地に渡来します。空中で昆虫をとらえて食べる生態や長い鎌形の翼などの形態はツバメによく似ていますが、実はスズメ目のツバメとは類縁が遠く、ヨタカやハチドリに近い仲間です。

本種は世界で最も早い速度で水平飛行ができる鳥といわれており、その飛行速度は時速170kmに達するとされることもあるようです。しかし、その計測方法などは公表されておらず、実際にどのくらいの速度で飛ぶのかは、実はまだはっきりとわかっていないそうです。

日本におけるハリオアマツバメの生態については、森さんの共同研究者である米川さんが1980年代から長年研究を続けてこられ、本種が木の洞を好んで利用すること、体のわりに非常に大きな木の洞を利用することが明らかになってきました。森さんたちは、生態研究をさらに進めるために、さまざまな条件で巣箱の利用率や繁殖の成功率を調査され、試行錯誤しながら改良を重ねているそうです。

十勝平野にかけた巣箱で繁殖しているハリオアマツバメに移動記録装置を装着して調べたところ、高い飛翔能力を活かして、最大で50平方キロメートルほどの範囲で餌を取りに行っていることが明らかになりました。餌生物は主にハチ目の昆虫で、そのほとんどは結婚飛行中のケアリ属だそうです。羽アリの出す性フェロモンを嗅覚で感知している可能性が、野外実験によって示唆されたそうです。

渡りを調べるための小型の機器であるジオロケータを2020年までに25個体に取り付け、そのうち5個体から渡り経路のデータを得ることができたそうです。北海道から越冬地のオーストラリアまでを往復し、大きく8の字を描くルートで春と秋で異なる経路を通して渡りを行っていることが明らかになりました。

今後は、繁殖、採食、渡りなどのさまざまな謎を明らかにし、空の生活者としてハリオアマツバメがどのように暮らしているのかを明らかにしていきたいとのこと。

講演のあとには、ハリオアマツバメの尾羽の“針”の機能、巣箱の利用率を高め、捕食率を下げるにはどうしたらよいか、渡りの時に飛ぶ速さなどについて、多くの質問が寄せられ、森さんにお答えいただきました。

今回の鳥学講座は、最大同時に175人の方にご視聴いただきました。お話しいただいた森さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

今回の講演は10月9日（土）まで、鳥の博物館のYoutubeチャンネルにて見逃し配信を行っています。ご興味があるけれど見逃した方や、もう一度見たい方は以下のリンクからご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=hVMz4EGcQyg>

企画展「鳥のチャンピオン」では、今回ご紹介いただいたハリオアマツバメを含む様々な鳥たちのすごい能力についてご紹介しています。11月28日（日）までの開催ですので、ぜひ鳥の博物館にもお越しください。

★参考資料

- ・ 今回の講演のレジュメ (PDF直リンク)

http://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/gyoji/event/index.files/torihaku_seminar202109.pdf

- ・ 米川さんによるハリオアマツバメの動画

<https://www.youtube.com/watch?v=1SPpRkoVViA&t=1s>

- ・ ハリオアマツバメの渡り経路の研究のプレスリリース

<https://www.rakuno.ac.jp/archives/14797.html>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Augustの過去ログを見えています。

August29日Sunday: ペットボトルホルダー、販売スタートしました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

本日より、ミュージアムショップにて、オリジナルペットボトルホルダーの販売を始めました。

ペットボトルはもちろんのこと、サイズによってはタンブラーも入ります。ストラップはお好みに合わせて、ショルダーベルトに付け替えることも可能です。内側にアルミシートはついていませんが、気になるペットボトルの水滴を吸収してくれます。

カラフルな糸を使い、作家さんが丁寧に編んだハンドメイド品です。スズメのイラスト入りオリジナル缶バッジ付きです。ホルダーとバッジは生き物好きな姉妹のコラボ商品です。飲み物を手放せないこの時期にオススメの一品です。



▲ペットボトルホルダー
カラフルなラインナップ

< 2021-08 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



▲ミュージアムショップにて1,300円で販売中



▲スズメのイラスト入りバッジがついています

August21日Saturday: 2021年8月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



テーマトーク

「いかに自分の遺伝子を残すか
～シジュウカラの繁殖戦略～」

日時：2021年8月21日（土）
13:30～14:15

演者：油田照秋
（山階鳥類研究所保全研究室研究員）

8月21日に、2021年8月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の油田照秋さんに、「いかに自分の遺伝子を残すか ～シジュウカラの繁殖戦略～」と題してお話しいただきました。

鳥類は90%以上の種が一夫一妻の繁殖形態を持ちますが、1990年代からDNA解析による親子判定の研究が行われるようになると、その75%もの種でつがい相手以外の雄との子を残す「つがい外父性」と呼ばれる現象が発見されました。このような現象は一般的にみられることから、鳥類の繁殖システムの進化を研究する上で無視できないと考えられています。

雌がなぜつがい外交尾をして、つがい相手以外の遺伝子を自分の子に残そうとするのかについては、さまざまな仮説が提唱されていますが、その一つが、確実に卵を受精させるため、というものです。油田さんたちは、北海道で繁殖するシジュウカラを用いた操作実験で、この仮説を検証しました。

巣箱で繁殖するシジュウカラの1回目の繁殖で卵を擬卵に置き換えて繁殖を失敗させると、2回目の繁殖の時にヒナにどのくらいつがい外の雄の父性が含まれるのかを調べられました。その結果、1回目の繁殖で擬卵に置き換えたペアでは、2回目の繁殖の時により多くのつがい外父性が含まれる傾向があることがわかりました。このことは、1回目の繁殖がうまくいかなかったことを受けて、雌が確実な受精をするために積極的につがい外の雄と交尾を行っていることを示唆しています。この研究は、初めてこの仮説を実験的に検証したものといえるそうです。

講演のあとに、視聴者のみなさんとチャット機能を用いて質疑応答が交わされました。2回目のやり直し繁殖の時につがい相手を変えない理由や、雌はどのようにつがい外交尾を行う雄を選んでいるのかなどについて、質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に204人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、9月4日（土）まで見逃し配信を行います。

次回、10月のテーマトークは、我孫子市鳥の博物館の小田谷が、ヤマシギの越冬期の生態についてお話しする予定です。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

今回のお話のもとになった論文（英語）

Yuta T, Nomi D, Ihle M & Koizumi I. (2018) Simulated hatching failure predicts female plasticity in extra-pair behavior over successive broods. *Behavioral Ecology* 29: 1264-1270.

<https://academic.oup.com/beheco/article/29/6/1264/5119825>

論文のプレスリリース資料（日本語）

https://www.hokudai.ac.jp/news/181009_pr2.pdf

鳥類のつがい外父性に関する総説（英語）

<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1046/j.1365-294X.2002.01613.x>

August21日Saturday: 鳥博に3Dプリンターがやってきた！

カテゴリ: General

投稿者: mochizuki

鳥の博物館では、今年新たな企画として「鳥の標本を3Dプリント模型化し、学習セットとして博物館外に貸し出す」プロジェクトを立ち上げました！

昨年度に(一財)全国科学博物館振興財団が行っている博物館向けの助成事業に応募したところ、上記のプロジェクトで採択頂きました。誠にありがとうございます。

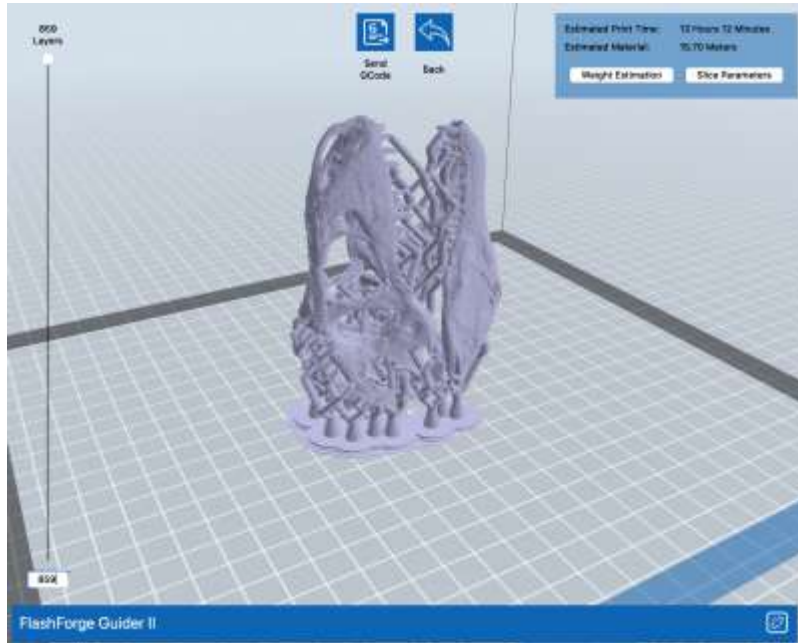
4月より3Dプリンターの導入の手続きを着々と進めていたのですが、今月ついに3Dプリンターの「Guider II」が届きました！



鳥の頭骨などの骨格標本を3Dプリントするのが目標ですが、プリントするには3Dデータを作る必要があります。

鳥の博物館の標本の3Dデータ化は現在進めています。まずはアメリカの Smithsonian 博物館で公開されている3Dデータを用いて印刷のテストを始めました。

3Dプリンターにも色々種類があるのですが、今回導入したプリンターは積層型の機械で、下から順に約0.1mmずつ樹脂を積み上げていく手法を取っています。そのため、複雑な形をしているところにはデータ上で支柱を設計し、樹脂を物理的に積み上げられる形にする必要があります。



スミソニアン博物館のデータをPCのソフト上で加工し、支柱や土台を設計したものがこちら。樹脂を積み上げていく都合上、なるべく支柱が少ない形となるよう、頭骨を上向きに設定します。(実はこの前段階で、頭骨を横向きに印刷しようとして失敗しました。)



そして、テストプリントの結果がこちら。約14時間かけてティラノサウルスの頭骨を印刷できました！



▲プリンターから取り出した状態。



支柱を外して、ティラノサウルス頭骨の3Dプリント模型が完成しました！

鳥の骨格標本は壊れやすいため、気軽に触れる資料として外部に貸し出すことは資料保存の観点から困難でした。しかし、こうやって博物館標本をデータ化し複製をすることで、今後は教育普及用教材として小学校等に貸し出していきたいと思っています。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Julyの過去ログを見えています。

July28日Wednesday: 「手賀沼の魚をみよう」を実施しました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

7月22日（木・祝）、あびこ自然観察隊「手賀沼の魚をみよう」を実施しました。広報誌のみで広報を行い、申込制で参加者を募りました。

手賀沼で採集し、どんな魚がいるのか観察しました。また、手賀沼親水広場内にある人口池のミニ手賀沼でも採集しました。新型コロナウイルス感染拡大防止対策と熱中症対策にご協力いただきながら、無事に観察会を終えることができました。暑い中、ありがとうございました。また魚のイベントに参加したいというお声をいただきましたので、今後も企画できればと思っています。



自分で生き餌をつけて釣り開始

< 2021-07 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)



google.co.jp



みなさんモツゴをGET

カッコいいサングラスで日差し対策をされていました



仕掛けに入った魚の仕分け

以前はみなさんと一緒に仕掛けをあげましたが、栈橋の老朽化により、スタッフだけの回収となりました



日陰に入り採集した生き物を紹介
質問にもお答えしました



魚を触るのが人生初という参加者も
魚とずっと遊んでいました

July17日Saturday: 2021年7月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



7月17日に、2021年7月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所の岩見恭子さんに、「鳥の剥製作りを見てみよう」と題してお話しいただきました。

今回は、初めての試みとして、岩見さんが実際に標本を作られる様子をライブ配信しました。

まず、標本を作るために必要な材料と、製作の前に行う計測についてご紹介いただいたあと、さっそく実際の製作に入りました。今回は初心者向きといわれるアカショウビンを材料に、皮むきから縫い合わせるまでの一連の流れを見せていただきました。手元を写したカメラを使って、実際の作業上のポイントを見せていただきながら解説していただいたので、実際にどのように標本が作られているのかがよくわかりました。

標本を作るときに解剖によって生殖器を確認して性の識別を行う様子についても見せていただき、剥製の皮側には残さない骨や内臓なども、研究用のサンプルとして大切に保管されていることをご説明いただきました。

講演のあとに、視聴者のみなさんとチャット機能を用いて質疑応答が交わされました。標本を作るときに技術的な問題や、保存する際に注意すること、鳥の死体を拾った時にどうすればよいかなどについて、岩見さんに様々な角度からお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に280人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信の見逃し配信は行いません。

次回、8月のテーマトークは、山階鳥類研究所の油田照秋さんに、シジウカラの社会関係やつがい外父性についてお話しいただく予定です。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Juneの過去ログをしています。

June19日Saturday: 2021年6月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



6月19日に、2021年6月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所保全研究室研究員の仲村 昇さんに、「冬眠に似た体温低下、鳥のトーパーとは？」と題して、主に海外で行われた研究の内容をお話いただきました。

鳥や哺乳類は、体の温度を一定に保つ仕組みを持っている恒温動物です。特に気温の低い時期には体の温度を保つために大量のエネルギーを消費するため、哺乳類には冬眠を行うものが多く含まれています。冬眠と同様に、体のエネルギー消費を抑えて数時間～数日の休眠を行うことを「トーパー」といいます。鳥類では普通の体温よりも5～20℃ほど体温を下げ、エネルギーの消費を抑えるそうです。

トーパーを行うことが鳥類で最初に知られたのはアメリカに分布するブアーウィルヨタカでした。この鳥は、冬眠を行う唯一の鳥として知られていますが、実際に確実な冬眠が確認された例はそれほど多くないそうです。他にもヨタカのなかまでは、体の大きいオーストラリアガマグチヨタカを含む複数の種で、低温

< 2021-06 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4 5

6 7 8 9 10 11 12

13 14 15 16 17 18 19

20 21 22 23 24 25 26

27 28 29 30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

時にトーパーを行うことが知られています。他にも、ハチドリ類、アマツバメ類の多くの種でトーパーを行うことが知られており、ウズラ、ハト、フクロウ、ツバメ、シジュウカラなどの多様な鳥で実験室や野外での確認の報告があるようです。

google.co.jp



日本産鳥類ではほとんど研究が進んでいないトーパーですが、厳冬期に氷点下になるような環境にいる体の小さい小鳥であるキクイタダキ、ヒガラ、エナガなどの小鳥もトーパーを行っている可能性があるのではないかとのことでした。

講演の後に、猛禽類でトーパーを行うものはいるのかについてや、低温で弱った鳥とトーパー状態の違いなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に66人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、以下の同じURLから7月3日（土）までご視聴いただけます。

<https://youtu.be/QI2Gg6Yulj4>

次回、7月のテーマトークは、山階鳥類研究所の岩見恭子さんに、標本製作の様子を実際にライブ中継しながらお話しいただく予定です。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

June 5日Saturday: 続、話題のミナミジサイチョウ

カテゴリ: General 投稿者: someya

捕獲作戦が試みられていたミナミジサイチョウは、本日午後2時半頃に無事に捕獲されたとのことです。

当館のミナミジサイチョウの剥製は常設展示室でご覧いただけます。ぜひご来館下さい。

June 4日Friday: 話題のミナミジサイチョウ

カテゴリ: General 投稿者: someya

話題沸騰中のミナミジサイチョウ。本来は日本の自然で見かける鳥ではなく、アフリカに生息する鳥です。どうやら飼育していた個体が逃げたようです。

2020年の春頃からミナミジサイチョウの目撃情報がありました。その場所は牛久、龍ヶ崎、取手、我孫子、柏、流山、鎌ヶ谷、野田、三郷などなど。1年以上もこの辺りで快適に暮らしているわけです。黒くて大きな姿が目立つようで「この鳥は何ですか」とのお問い合わせをいただきます。ミナミジサイチョウは全身ほぼ真っ黒で喉袋と目のまわりが赤く、翼の一部が白いのが特徴です。歩きながら、ヘビ・カエルといった爬虫類などを採食しています。

本日、捕獲が試みられた（鳥博ではありません）ようですが、どうなったのか気になります。

鳥の博物館では、ミナミジサイチョウの剥製を展示しています（3階、世界の鳥コーナー）。間近でじっくり観察できます。ぜひご覧下さい。



▲展示室のミナミジサイチョウ（剥製）

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Mayの過去ログをしています。

May15日Saturday: 2021年5月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



5月15日に、2021年5月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。今回は、山階鳥類研究所保全研究室研究員の澤祐介さんに、「ここまでわかった！東アジアのガン類の渡り」と題してお話いただきました。

日本に定期的に渡来するガンの仲間は、マガン、ヒシクイ、コクガン、カリガネ、シジュウカラガン、ハクガンの6種です。これらの種の渡り経路については、どのくらいわかっているのでしょうか。

1980年代から行われた首環標識などを用いた調査によって、マガンやヒシクイの断片的な渡り経路は判明していましたが、追跡できた例数は多くなく、確実な繁殖地が不明なままの種があったり、保全の重要性の高い希少なガンについては情報が少ないままでした。

ガン・カモ専門の研究誌「Wildowl」の2020年に出版された巻では、日本産のガン類を含む東アジアのガン・カモ類についての渡り経路や個体群動態の論

< 2021-05 >

日 月 火 水 木 金 土
1
2 3 4 5 6 7 8
9 10 11 12 13 14 15
16 17 18 19 20 21 22
23 24 25 26 27 28 29
30 31

検索

ナビゲーション

前の月
次の月
今日の投稿
過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ
General
お知らせ
今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

我孫子市鳥の博物館
フィールドミュージアム
ふくろうトピックス
とりはく自然通信

文が掲載されました。今回はこの研究誌に掲載された最新の渡り経路の情報や、澤さんたちのこれからの研究の展望についてお話しいただきました。

鳥の博物館友の会

[google.co.jp](https://www.google.co.jp)

これらの研究では、マガン62羽、ヒシクイ156羽（亜種オオヒシクイ22羽、亜種ヒシクイ134羽）、カリガネ19羽、コクガン11羽の追跡結果などをもとに、東アジアでの渡り経路がどのようになっているのかを報告しています。このうち、コクガンでは澤さんたちの研究によって、日本に渡来するコクガンの春と秋の渡り経路が異なること、野付半島が重要な中継地になっていることが分かったそうです。



将来の課題として、日本で越冬する個体の追跡数の少ないマガンの渡り経路の経年変化やヒシクイの繁殖地の特定、世界的に減少しているけれど日本では少しづつ数が増えているカリガネの追跡、東アジアで減少しているコクガンの正確な繁殖地を特定するための追跡、近年の保全活動で個体数が回復したシジュウカラガンやカリガネの追跡を行っていくことが挙げられるそうです。

これらの課題を解決していくためには、継続した調査を行う人材を各地に育成していくことが重要であることもお話しいただきました。

講演の後に、カリガネが世界的に減少しているのはなぜか、アジアのガンカモ類の個体数調査の信頼性はどのくらいかなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に107人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、以下の同じURLから5月29日までご視聴いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=UF1eez4a45w>

次回、6月のテーマトークは、山階鳥類研究所の仲村昇さんに、一部の鳥に見られる冬眠に似た体温低下であるトーパーについてのお話をさせていただきます。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

雁の里親友の会のウェブサイト

<http://shibalabo.eco.coocan.jp/goose/index.htm>

ガン・カモ類の研究専門誌「Wildfowl」の2020年号（東アジアのガン・カモ類の渡り・個体群動態の特集号）

<https://wildfowl.wwt.org.uk/index.php/wildfowl>

希少ガンのシンポジウム（見逃し配信中）

<https://www.youtube.com/watch?v=7eQ9rCozLEI>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Aprilの過去ログをしています。

April21日Wednesday: 2021年4月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



4月17日に、2021年4月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所保全研究室専門員の千田万里子さんに、「その足環、いつ付けた？ 鳥類標識調査でわかる長期生存」と題してお話いただきました。

鳥の寿命を知ることは、生活史を知るための研究においては重要です。しかし、鳥は比較的長寿命であるため、それぞれの種について単一の研究プロジェクトで調査するには限界があります。

鳥類標識調査は、野生の鳥に足環をつけて渡りや寿命を調べる調査です。鳥に足環をつけて放鳥し、その鳥が再び発見されたときに、つけた時点からの経過期間をさかのぼることで、鳥が生存していた期間を知ることができます。これは厳密な寿命とは異なる場合が多いのですが、「少なくともいつからいつまで生きていた」という客観的な情報を得ることができます。

標識調査はすべての鳥を対象にして継続して行われているので、鳥の寿命を総合

< 2021-04 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3

4 5 6 7 8 9 10

11 12 13 14 15 16 17

18 19 20 21 22 23 24

25 26 27 28 29 30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

的に調べる唯一の方法といえます。今回は、1961年から行われている日本の鳥類標識調査において、2017年までに得られた長期生存の記録をまとめた吉安ら(2020)の内容をもとにお話しいただきました。

google.co.jp



世界で最も長寿の鳥の記録は、ハワイのミッドウェイ環礁で繁殖しているコアホウドリのメス(ウィズダムと名付けられています)で、2021年春時点で70歳以上だそうです。日本の鳥類標識調査でも長寿の種は海鳥や大型の鳥に多く、確認された最も長期生存の記録はオオミズナギドリの36年8か月だったとのこと。日本における足環の回収記録は一般の市民からの回収によるところが大きく、今後も継続してご協力をお願いしたいと呼びかけられていました。

講演の後に、視聴者のみなさまからチャットに長寿記録を知りたい鳥のリクエストを書き込んでいただき、ツバメ、ハヤブサ、アホウドリなど30種以上の鳥の長寿記録についてその場でお答えいただきました。また、鳥の平均的な寿命や標識調査の鳥類への影響などについても質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に145人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信は、以下の同じURLから5月1日までご視聴いただけます。

https://www.youtube.com/watch?v=1g_YPiY5EAg

次回、5月のテーマトークは、山階鳥類研究所の澤祐介さんに、衛星追跡で明らかになったガン類の渡りについてのお話をさせていただきます。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

鳥類標識調査について(環境省ウェブサイト)

<http://www.biodic.go.jp/banding/index.html>

吉安京子・森本 元・千田万里子・仲村 昇(2020)鳥類標識調査より得られた種別の生存期間一覧. 山階鳥類学雑誌, 52(1): 21-48.

上記論文のプレスリリースは以下よりご覧いただけます。

<http://www.yamashina.or.jp/hp/ashiwa/news/202011saichoju.html>

ヨーロッパの鳥類標識調査における長期生存記録一覧

<https://euring.org/data-and-codes/longevity-list>

北米の鳥類標識調査における長期生存記録一覧

https://www.pwrc.usgs.gov/bbl/longevity/longevity_main.cfm

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Marchの過去ログをしています。

March23日Tuesday: 公益財団法人山階鳥類研究所との協力関係を深めるため協定を締結しました

カテゴリ: General 投稿者: saito

鳥の博物館は、開館以来公益財団法人山階鳥類研究所と協力関係にあり、学術的な面でアドバイスいただいたり、共催の事業を開催してきました。

この度、この協力関係を確固とするため、山階鳥類研究所と我孫子市教育委員会との間で協定を締結し、今日（2021年3月23日）調印式が行われました。

これから一層協力関係を深め、相互の活動が活性化することが期待できます。



山階鳥類研究所 壬生基博理事長（右）と我孫子市教育委員会 倉部俊治教育長（左）

< 2021-03 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

March20日Saturday: 2021年3月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya

google.co.jp



3月20日に、2021年3月のテーマトークを実施しました。これまでと同様に Youtube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室専門員の小林さやかさんに、「古い標本が語るもの ―明治に米国スミソニアン博物館から送られた鳥類標本―」と題して、古い標本の歴史にまつわる研究のお話しをしていただきました。

山階鳥類研究所には約80,000点におよぶ日本最大の鳥類の標本コレクションが所蔵されており、100年以上前に製作された古い時代の標本も多く含まれています。そのうち、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）から学習院を経て寄贈されたものが3,300点以上も含まれています。

古い文書の記録をさかのぼると、東京帝室博物館と東京教育博物館（現在の国立科学博物館）は1877年と1887年の2回にわたってアメリカのスミソニアン博物館から合計1300点以上の鳥類標本の寄贈を受けていることがわかりました。そして、日米双方に保管されている台帳の照合から、それらの標本の大部分は山階鳥類研究所に現存していることが明らかになりました。

資料や台帳などの照合を行うことで、失われたり誤ってラベルに記入されていた情報を復元することができたとのことです。たとえば、山階鳥類研究所で最も古い標本とされていた1779年に採集されたとラベルに記されていたアメリカオグロシギの採集年は、正しくは1879年だったことがわかりました。

これらの標本群には、カロライナインコなどの絶滅種や、リュウキュウヒヨドリ、リュウキュウカラスバトなど日本産鳥類のタイプ標本（種や亜種の記載のもとになる学術的に重要な標本）が含まれています。これらは、日本側から分類学的に重要な標本を送った対価として贈られたものではないかとのことです。また、著名な人物が採集した標本として、第26代アメリカ大統領のセオドア・ルーズ

ベルトや作家のW.H.ハドソン、鳥類図譜の制作者であるジョン・グールドが採集・収集した標本などが見つかったとのことでした。

講演の後には、標本をやり取りしていた日本側の担当者は誰だったのか、当時の交換にあたっての標本の収集方針などはあったのかなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に42人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、以下の同じURLから4月3日までご視聴いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=tppgNOFvBSA>

次回、4月のテーマトークは、山階鳥類研究所の千田万里子さんに、標識調査で明らかになった鳥の寿命についてのお話をさせていただきます。視聴者のみなさんが寿命を知りたい鳥の種類をチャットでリクエストしていただき、それにお答えする形式でのお話も予定しています。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

小林さやか・加藤 克 (2017) 明治・大正期に収集された国立博物館の鳥類標本コレクションの検証—山階鳥類研究所所蔵の皇室博物館旧蔵鳥類標本の歴史的背景とその評価—, 日本動物分類学会誌 43: 42-61.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/taxa/43/0/43_42/_article/-char/ja/

小林さやか・加藤 克 (2020) 東京皇室博物館旧蔵鳥類標本コレクションの歴史—スミソニアン米国立博物館に由来する標本に注目して—, 日本動物分類学会誌 49: 45-55.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/taxa/49/0/49_45/_article/-char/ja/

山階鳥類研究所標本データベース

<https://decochan.net/>

March19日Friday: 木下館長、取材を受けました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

本日、取材がありました。北千葉導水路※が20年経過したことから、改めてその効果や重要性を広く認知してもらおうとデジタルコンテンツを作成されるそうので、鳥の博物館からは木下館長（写真右）がインタビューを受けました。館内の様子を紹介すると共に、手賀沼の変遷ついて話をしました。





完成したデジタルコンテンツは沿川の方々や地方公共団体などが閲覧の対象とのことです。完成が楽しみです。

※北千葉導水事業の背景と目的

- ・首都圏の人口増加等にもない水需要が増加し、水不足が深刻化。
→都市用水の供給が必要
- ・手賀川・坂川流域の急速な都市化等により、内水被害が増大。
→手賀川及び坂川流域の内水排除
- ・昭和49年から27年連続で全国の湖沼ワースト1。
→手賀沼及び坂川の急速な水質浄化が必要

March18日Thursday: 山階鳥類研究所の標本データベースに当館の鳥類標本が追加されました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

我孫子市鳥の博物館と隣接する研究機関である山階鳥類研究所は、国内最大の鳥類の標本コレクションを管理されており、その標本データベースをオンラインで公開されています。

山階鳥類研究所の多大なご協力を得て、2018年から我孫子市鳥の博物館の所蔵する標本をこのデータベースで検索・閲覧できるようにする準備を進めてまいりましたが、このたび、2183点の情報をどなたでも検索・閲覧できるようになりました。

その方法を以下にご説明します。

まず、山階鳥類研究所標本データベースのページにアクセスしてください。

<https://decochan.net/>



▲山階鳥類研究所標本データベースのトップページ。

トップページ左上の「キーワード検索」のタブをクリックすると、データベースから登録されている標本の情報や画像を検索することができます。



▲キーワード検索の画面。

「詳細条件で検索」の「所属」の2つのチェックのうち、あらかじめ入っている「山階鳥類研究所」のチェックを外して「我孫子市鳥の博物館」だけにして検索すると、鳥の博物館に所蔵している標本の一覧が表示されます。



▲我孫子市鳥の博物館の標本の検索結果。

このうち、標本番号が「ACMB-00011」となっている標本をクリックすると、次のように、標本の採集場所や採集日の情報、標本やそのラベルの情報を閲覧することができます。



▲標本の採集場所や採集日の情報。

画像を大きいサイズで表示



▲標本と標本ラベルの画像。クリックすると拡大して表示できる。

これまでは、一般の方に見ていただけるのは展示室に公開されている標本だけでしたが、今後は、収蔵標本の多くについて、どのような標本を収集しているのをオンラインで見えていただけるようになりました。今後、さらに公開する標本の範囲を広げて、アップデートを行っていく予定であります。

このデータベースのご利用にあたっての注意は、トップページの下部と、以下のページをお読みください。

<https://decochan.net/index.php?p=0>

March16日Tuesday: ジャパンバードフェスティバル2019、「ふるさとイベント大賞」大賞受賞

カテゴリ: General 投稿者: someya

毎年手賀沼周辺で開催している（2020年はコロナ禍のためリモート開催）鳥のお祭り「ジャパンバードフェスティバル」。

2019年に行われました「ジャパンバードフェスティバル2019」が「第25回ふるさとイベント大賞」の大賞【内閣総理大臣賞】を受賞しました。2021年3月4日にオンラインで表彰式が開催されました。鳥をテーマにしたイベントでは来場者数、出展数ともに国内最大級となっていることなどが評価されたポイントです。その他詳細はジャパンバードフェスティバルのウェブサイトをご覧ください。

鳥の博物館では1階ホールにて、受賞記念の展示を行っています。3月31日水

曜日までの展示です。4月以降はアビシルベ（4月1日から4月15日）、水の館（4月16日から4月29日）、アビスタ（4月30日から5月12日）の順に賞状と盾が巡回します。ぜひご覧下さい。





March 4日Thursday: 友の会展、取材がありました

カテゴリ: General 投稿者: someya

本日、企画展「第16回友の会展～日本の四季を彩る鳥たち～」について取材がありました。チバテレ3チャンネル（千葉テレビ放送）「シャキット！」で放送されます。鳥の博物館友の会会長の木村稔さんが展示内容を紹介しました。会員のみなさんはコロナ禍の中、工夫しながら活動されています。その成果をぜひご覧下さい。友の会展は3月14日（日）まで開催しています。

★チバテレ「シャキット！」

放送予定日：3月12日（金）

毎月1回午前6時45分から午前8時放送。我孫子市の魅力を発信するコーナー「あびこナビ」は午前7時頃から約5分。



Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Februaryの過去ログをしています。

February21日Sunday: オビシャに行ってきました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

先月、地域の年中行事「オビシャ」を見て来ました。私が住んでいる地域のオビシャには男オビシャと女オビシャがあり、私は女オビシャに行きました。オビシャは元来、射射でその年の豊凶を占う行事ですが、私の地域では以前の射は行っていません。

行事の事前準備として、当日に使う「鶴亀」と呼ばれる飾りがつくられます。簡単に言うとカメの甲羅模様を描いた聖護院大根に松、竹、梅を刺し、折り鶴などを飾るというものです。今回は父がカメの甲羅模様を描く係です。私に「カメの甲羅の模様ってどんな感じだ？」と聞いてきた理由がよく分かりました。

大根に松竹梅を刺す...聞いただけではもう何が何だかわかりません。我が家で栽培した聖護院大根を使い、父が描いたカメの甲羅模様...。百聞は一見に如かずということで、オビシャの見学に行きました。オビシャには流山市立博物館の方が調査に入られていました。ラッキーなことに調査の様子も見学できることになりました。

現在、親の世代が中心に行っていて、子どもの頃からオビシャの話を聞いていた私は身近に感じるものの、行事に入らせてもらうのは初めてでした。「みんなでご飯を食べるもの」と聞いていましたが、いやいや、なんだかいりやっています。母が当番ということもあって、気になることは遠慮なく聞くことができました。ここには書ききれませんので、詳しい内容には触れませんが、充実した時間を過ごすことができました。

気になっていた「鶴亀」ありましたよ！不動明王の描かれた掛け軸の前に鎮座していました。オビシャ終了後に撮影した実物がこちらです。

< 2021-02 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28						

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

 このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



▲カメの頭やあしはゴボウです



ウメの枝にアオキの芽が刺してありました。



私「これって...」

オビシャ出席者「ウグイスを模したものだよ」

でました！ウメにウグイス事件（自分の頭の中での勝手な名称）。梅の木によくやってくる黄緑色の鳥はメジロであってウグイスではありません。でも「梅に鶯」を間違いだと言い切るのも難しい。「梅に鶯」とは取り合わせがよく、調和するものの例えです。ウグイスの声と梅の取り合わせは確かに似合っています。しかし、ウグイスは枝先に頻繁にとまって鳴くような鳥ではなく、梅にとまっている黄緑色の鳥と言えばメジロの方がしっくりきます。

ウグイスとメジロの標本を見比べます。



▲うぐいすきなこのような黄緑色ではなく茶褐色



▲黄緑色で目のまわりの白いリングが特徴

見比べてみると全然違う鳥であることがわかります。ぜひ展示室で両者の違いをご確認下さい。

February20日Saturday: 2021年2月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



2月20日に、2021年2月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の浅井芝樹さんに、「性別が4つある?! ～ノジロシトドの繁殖生態～」と題して、アメリカの鳥類学者であるElaina Tuttleさんたちによって行われた研究の紹介をしていただきました。

ノジロシトドは北米に生息するホオジロ科の小鳥です。この鳥には羽色に「白色型」と「褐色型」の2タイプがあることが知られており（羽色型といいま

す)、これは雌雄に関係がないものです。雄の繁殖行動は、羽色型によって異なることが知られており、白色型の雄はヒナの世話をせずによく囀り、周辺のなわばりの雌とつがい外交尾を試みようとする一方で、褐色型の雄は雌と協力してヒナの世話をし、つがい相手の雌を他の雄からよく防衛します。さらに興味深いことに、ノドジロシトドの雌雄は、互いに異なる羽色型の相手としか番いにならないそうです(異系交配といいます)。すなわち、白色型の雄は褐色型の雌と、褐色型の雄は白色型の雌としかつがいになりません。羽色型のタイプの個体とつがいになったケースはほとんどなく、このような場合には育つ子の数が少なくなると予想されるということです。

このような不思議な社会は、どのように維持されているのでしょうか？

このカギは、ノドジロシトドの2番染色体の一部に「逆位(ある1つの染色体に2か所の切断が起こりその断片が反対向きに再構成されてしまうこと)」が起こったことでした。これによって、この染色体では減数分裂の際に組換えが起こらなくなりました。そのため、この部分にある羽色型と繁殖行動をつかさどる遺伝子は、そのまま子に伝わることになります。これは、性染色体のふるまいとよく似ています。そのため、ノドジロシトドでは、羽色型(2つ)×性別(2つ)=4つの性別があるように見えるということなのです。

このような特殊な性別を持つ生物はほとんど知られておらず、生物においてどのように性決定が進化したかを探るうえで重要な発見であるということでした。

講演の後には、ノドジロシトドに見られる羽色型が地理的に偏りがあるかどうかや、なぜ同類交配で適応度が下がるのかなどについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に82人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。今回のライブ配信は、以下の同じURLから3月6日までご視聴いただけます。<https://www.youtube.com/watch?v=dMvynSffk5U&feature=youtu.be>

3月のテーマトークは、山階鳥類研究所の小林さやかさんに、山階鳥類研究所に保管されている標本のうち、明治時代にアメリカのスミソニアン博物館から日本にやってきた標本についてのご研究を紹介していただきます。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

参考資料：

今回ご紹介いただいた論文は以下の通りです。

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/26804558/>

この論文の解説記事(英語)はこちらから読めます。

<https://www.nature.com/news/the-sparrow-with-four-sexes-1.21018>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2021年Januaryの過去ログを見えています。

January21日Thursday: 鳥の博物館友の会より簡易リフトを寄贈していただきました

カテゴリ: General 投稿者: saito

鳥の博物館友の会より、簡易電動リフトを寄贈していただきました。これは、鳥の博物館30周年を記念してのご厚意によるものです。

この装置の導入により、大型の標本を高さのある収納スペースに、安全にスムーズに移動することができるようになり、作業効率が大いにアップしました。大変感謝しております。

寄贈に先立ち1月20日（水）、友の会会長から教育長へ目録の贈呈が行われました。



教育長室での目録贈呈式の様子（左から鳥の博物館館長、教育長、友の会会長）

< 2021-01 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)



鳥の博物館友の会

google.co.jp



寄贈していただいた電動簡易リフト

January16日Saturday: 2021年1月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



1月16日に、2021年1月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所副所長の尾崎清明さんに、「沖縄のアジサシ類の渡りの謎」と題してお話いただきました。

尾崎さんは1970年代から沖縄島で繁殖するアジサシ類、特にベニアジサシとエリグロアジサシの調査に携わってこられました。繁殖地での標識調査によって、国内での繁殖地間の移動などが調べられてきましたが、その正確な越冬地は長年不明のままでした。

2002年にオーストラリアで行われた調査によって沖縄の繁殖地での標識個体が再捕獲されたことによって、ベニアジサシがオーストラリアのグレートバリアリーフの南端付近で越冬していることが初めて明らかになり、その後も多数の標

識回収記録が得られているそうです。さらに、2012年から行われたジオロケータ（緯度経度を推定するために日照時間を記録する記録計）を装着する調査によって、沖縄で繁殖するエリグロアジサシはインドネシアのボルネオ島やスラウェシ島の周辺海域で越冬していることが明らかになりました。

講演の後には、オーストラリア周辺で繁殖しているベニアジサシは日本に渡ってこないのか、台風の移動を予測することはできるのか、などについて質疑応答が交わされました。

今回のオンライン講演は、最大同時に100人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。今回のライブ配信と同じ映像は、以下の同じ URL から1月30日までご視聴いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=yAdX6tXJKtY&feature=youtu.be>

2月のテーマトークは、山階鳥類研究所の浅井芝樹さんに、北米のノドジロシトドという小鳥のちょっと変わった性別のしくみについての研究を紹介していただきます。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。次回もぜひご視聴ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Decemberの過去ログをしています。

December20日Sunday: **2020年12月のテーマトークを実施しました!**

カテゴリ: General 投稿者: odaya



12月19日に、2020年12月のテーマトークを実施しました。これまでと同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所保全研究室長の水田 拓さんに、「月夜のドライブは要注意～アマミヤマシギの交通事故について～」と題して講演いただきました。

水田さんは長年奄美諸島の野生生物の保全にかかわるさまざまな研究に携わってこられていますが、今回はその中でもアマミヤマシギについてお話しいただきました。

アマミヤマシギは世界で奄美諸島だけで繁殖する日本固有のシギ科の鳥です。マングースやネコなどの外来哺乳類による捕食や交通事故による影響で個体数を減らしており、環境省の2019年のレッドリストでは絶滅危惧II類に指定されています。

< 2020-12 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

水田さんたちの調査によって、アマヤマシギは月が明るく空の高い位置に出るときに多く路上に出てくること、繁殖期の初期にあたる3月に交通事故が多いことを突き止められました。また、奄美大島の南部の数か所で事故が多いこともわかりました。

これらの情報をもとに、月の明るい夜、特に3月の満月の数日前からはゆっくり走るように、島の人たちに呼びかけを行われたそうです。

講演の後に、道路上に出てくる理由や、アマヤマシギの生態についての質疑応答が交わされました。今回のお話の詳細は、以下の書籍に紹介されています。ご興味のある方はぜひお読み下さい。

<https://www.ajup-net.com/bd/isbn978-4-486-02088-2.html>

今回のオンライン講演は、最大同時に54人の方に視聴いただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございます。配信後の見逃し配信を予定しておりましたが、編集作業上のミスによってご利用いただけなくなってしまいました。申し訳ありません。

1月のテーマトークは山階鳥類研究所の尾崎さんに南西諸島のアジサシ類の渡りについての研究成果をお話しいたします。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。

December16日Wednesday: 鳥博セミナー「日本列島の鳥の起源と進化—DNAの研究でわかった鳥たちの歴史—」を開催しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



2020年12月12日(土)に、令和2年度の鳥博セミナーをオンライン配信にて開催しました。今回は「日本列島の鳥の起源と進化—DNAの研究でわかった鳥たちの歴史—」と題して、国立科学博物館動物研究部の西海 功さんにお話しいただきました。

日本鳥類目録に記載されている日本産の鳥は633種です。また、世界で日本にし

google.co.jp



かない鳥の種数は、分類の扱いによって異なりますが、13種から21種くらいです。これらの数は多いのでしょうか？それとも少ないのでしょうか？

日本と同様の面積・緯度の島国であるイギリスとニュージーランドと比較してみると、固有種はニュージーランドよりも少ないものの、温帯の島国としては日本の鳥の種数や固有種数はそこそこ多いといえるようです。

西海さんたちがかわって進められているDNAバーコーディングのプロジェクトでは、これまでに日本の繁殖種の93%のDNA情報の登録が進められてきました。このデータを用いて解析すると、種内の遺伝的な変異が通常よりも大きい種がいくつも見つかり、アカヒゲ、ヒヨドリ、カワラヒワなどでこれまで亜種とされてきた日本固有種の存在が示唆されています。今後、形態や生態、鳴き声などの違いが確認されれば、これらは種として認められ、日本固有種があと10種程度増える可能性があるとのことでした。

DNAバーコーディングのデータからは、鳥たちの進化の歴史を推定することもできます。たとえばヤマガラでは、集団ごとにDNAの配列を比べてみると、台湾→八重山→九州→本州と分布を拡大してきたことがわかりました。同様に、カケス類でこのような歴史をたどってみると、ルリカケス（奄美諸島）→カケス（九州～本州）→タカサゴカケス群（中国南部）→ミヤマカケス（大陸東部・北海道）という順に分岐していることがわかりました。すなわち、日本の鳥は大陸から分散して定着しただけでなく、日本列島で種分化が起こり、その集団が再び大陸に分散して分布を拡大したのがあることが示唆されたとのことでした。このような現象を逆移入（Reverse Colonization）といい、日本を起源地とする鳥は考えられたよりも多いかもしれない、とのことでした。

講演のあとは、種や亜種の境界はどのように決めるのか、日本固有種とはどのような種なのかなどについて、多くの質問やコメントが寄せられ、西海さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回の鳥学講座は、最大同時に122人の方にご視聴いただきました。お話しいただいた西海さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

今回の講演は12月26日（土）まで、鳥の博物館のYoutubeチャンネルにて見逃し配信を行っています。ご興味があるけれど見逃した方や、もう一度見たい方は以下のページにあるリンクからご覧ください。

<https://www.youtube.com/channel/UCckBys4vs-AvNOMII8MckSw>

開館30周年記念特別展示「日本の鳥」は、今回ご紹介いただいた様々な固有種を含む日本産鳥類の標本351点を展示しています。1月31日までの開催ですので、ぜひ鳥の博物館にもお越しください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Novemberの過去ログをしています。

November29日Sunday: 鳥・鳥・鳥展～あびこショッピングプラザで～

カテゴリ: General 投稿者: someya

11月22日(日)、23日(月・祝)の2日間、あびこショッピングプラザで行われたイベント「鳥・鳥・鳥展」に参加してきました。今年は年に1度の鳥のお祭り「ジャパンバードフェスティバル」が、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、リモート開催となりました。実際にみられる何かを、また鳥の博物館の30周年を記念してイベントを企画して下さった方から声がかかりました。今回はイベントの様子を一部ご紹介します。

2日間参加させていただきましたが、博物館を飛び出して、お買い物に来ているみなさんに向けて博物館をPRするのは新鮮でした。「コーヒーメーカーお待ちのお客様～」の声に呼ばれ行ってしまう方も。いろいろな方に鳥の博物館を知っていただくのに良い機会となりました。関係者のみなさま、ありがとうございました。



鳥の博物館からはPR展示とミュージアムショップのグッズを販売するブースを

< 2020-11 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



ミュージアムグッズは選抜してお持ちしました



鳥のお手玉は大人の方にも人気



鳥博以外にも鳥に関連したブースがいろいろありました



みんなのアイドル「あびたま」ちゃん。かわいくポーズをきめてくれました♪

November 7日Saturday: 第30回JBF鳥学講座を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



11日7日（土）に、第30回JBF鳥学講座をオンライン配信にて開催しました。今回は「洋上風力発電と野鳥 —あまり知られていない影響とその対策—」と題して、早稲田大学人間科学部の風間健太郎さんにお話しいただきました。

地球温暖化の原因となっている温室効果ガスの排出の削減のため、世界中で洋上風力発電が推進されています。再生可能エネルギーの一つとして期待が高まっている洋上風力発電ですが、鳥類にも悪影響を及ぼす場合がしばしばあるようです。その影響には、大きく分けて以下の3つがあるそうです。

- (1)風車との衝突（バードストライク）
- (2)風車の回避によるエネルギーの消費や餌場からの締め出し
- (3)風車による生息地の改変

風車による悪影響としては、まずはバードストライクが頭に浮かびますが、鳥たちの多くは風車を避けて飛ぶことができることがわかっています。しかし、避けられれば良いというわけではなく、最短のルートで移動できなくなったり、良い餌場が使えなくなってしまうことの影響も無視できないことをヨーロッパを中心とした研究例からご紹介いただきました。

では、洋上風力発電による鳥への影響はどのように軽減できるのでしょうか？洋上風力発電の先進国であるイギリスやドイツなどでは、海鳥の分布に関する長期のデータを活かしてアボイドマップ（衝突リスクの高い場所を示した地図）が作成されており、それをもとに建設の候補地選定が行われています。

しかし、海鳥の事前の分布情報は不足していることが多く、年による変動も大きいために、予測が難しいことが特徴です。そのため、事前の分布情報をもとにした場所の選定に加えて、継続的な事後調査の結果をもとに順応的な管理をしていくことが、現時点では最も良い方法なのではないか、と提案されていました。

講演のあとは、風車による衝突する鳥やその回収率の種による違い、環境ア

セスメントにかかる問題点などについて、多くの質問やコメントが寄せられ、風間さんにわかりやすくお答えいただきました。

今回の鳥学講座は、最大同時に257人の方にご視聴いただきました。お話しいただいた風間さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

11月8日（日）の12:00～13:30の予定で再放送が行われます。見逃した方、もう一度見たい方は以下のページにあるリンクからご覧ください。

<http://www.birdfesta.net/jbf/online2020.html>

参考資料：

当日のレジユメは、以下からご覧いただけます（PDF直リンク）。

<http://www.yamashina.or.jp/hp/event/images/jbf201107resume.pdf>

お話しいただいた内容の一部は以下のウェブサイトから読むことができます。

<https://news.yahoo.co.jp/articles>

[/ae165476c336a65abfed7fd9e094e1a7297e4e95](https://news.yahoo.co.jp/articles/ae165476c336a65abfed7fd9e094e1a7297e4e95)

環境省が作成した「風力発電における鳥類のセンシティビティマップ」

https://www.env.go.jp/nature/seisaku/list/yasei_furyoku

[/sensitivity_map/index.html](https://www.env.go.jp/nature/seisaku/list/yasei_furyoku/sensitivity_map/index.html)

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Octoberの過去ログをしています。

October25日Sunday: 2020年10月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



10月24日に、2020年10月のテーマトークを実施しました。8月と同様にYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

本来10月17日に予定しておりましたが、機材トラブルにより定刻までに延期になることをお知らせできず、17日に視聴しようとされていた皆さまには大変ご迷惑をおかけいたしました。申し訳ありませんでした。

今回は、我孫子市鳥の博物館学芸員の齊藤安行さんに、「ムクドリの子育て事情」と題して講演いただきました。

ムクドリは人の生活圏に大きな集団ねぐらを作るため、鳴き声の騒音やフンの被害が問題になっています。一方で、農業被害をもたらす害虫を食べてくれるなどの益鳥としての側面もあり、生態系の中では種子散布者としての役割を担っています。

< 2020-10 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3

4 5 6 7 8 9 10

11 12 13 14 15 16 17

18 19 20 21 22 23 24

25 26 27 28 29 30 31

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

齊藤さんは1980年代前半に神奈川県で巣箱を用いたムクドリの新殖生態の研究を行われており、今回はその結果についてお話しいただきました。ムクドリの繁殖期は大きく2つに分かれること、繁殖期の前期には前年も繁殖した成鳥が中心となり、後期では再繁殖個体や若い個体が参加して行われることなどをご紹介いただきました。また、種内の托卵がしばしば起きるがあまり成功しないことなど、行動生態学的に興味深い研究成果をご紹介いただきました。

質疑応答では、前期の繁殖に参加しない若い個体はその間何をしているのか、ムクドリに巣箱を使ってもらうためにどのような工夫をされているかなどについての質問に答えていただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に92人の方に視聴していただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。11月のテーマトークはお休みです。12月は山階鳥類研究所の水田さんにアマヤマシギの生態に関する研究成果をお話しいただきます。視聴方法などについては、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。

October25日Sunday: 生涯学習部展示企画「我孫子を知る1年」開催中です！

カテゴリ: General 投稿者: muramatsu

我孫子市市制50周年を記念し、生涯学習部では多くの方に我孫子の魅力を知っていただくため、我孫子市生涯学習センターアビスタにて展示企画「我孫子を知る1年」を開催中です。図書館、公民館、博物館など様々な施設の紹介や見どころなどを展示しています。

鳥の博物館では、開館30周年を記念し、企画展ポスター展を1階ストリート壁面にて展示しています。これまで鳥の博物館では企画展を86回開催してきました。今回は企画展ポスター54枚と開館告知ポスター2枚を展示しています。皆さん、ぜひご来館ください！



展示期間：2020年10月25日～11月8日

google.co.jp



(ストリート以外の展示は11月5日15時まで)

展示場所：我孫子市生涯学習センターアビスタ

(開館時間：午前9時から午後9時、入館料はかかりません)

休館日：毎月最終月曜日（祝日の場合は開館し、前週の月曜日が休館）

October16日Friday: 30周年特別展示「日本の鳥」スタート

カテゴリ: General

投稿者: someya

10月10日土曜日より、鳥の博物館開館30周年特別展示「日本の鳥」がスタートしました。

開館してから現在までに収集した剥製標本は、日本産鳥類633種の約6割にあたる385種。今回の展示会では約350点の標本を紹介しています。その圧倒的な標本の数にきっとあなたは驚くはず。この機会にぜひ来館下さい。



October14日Wednesday: チーバくん来館！

カテゴリ: General

投稿者: someya

昨日、千葉県民なら誰もが知っている、チーバくんが鳥の博物館に来館されました。「好奇心旺盛でいろいろなことに挑戦するのが大好き」なチーバくん。展示室もじっくりとみてくれました。「かわいいかわいい」とみんなに大人気でした。チーバくんのSNSもチェックしてみてください。

チーバくん、また遊びに来てね。



鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Septemberの過去ログをしています。

September 4日Friday: ハシビロコウ展示しました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

30周年記念スタンプを作製するにあたり、何の鳥のデザインにするか迷いましたが、特徴的な顔つきで人気のハシビロコウを採用しました。



▲イラストのモデルは当館3階に展示しているハシビロコウです。

記念スタンプも設置している1階エントランスホールに、ハシビロコウの剥製と骨格標本をならべて展示しました。動かない鳥としてご存知の方も多いのではないでしょうか。

< 2020-09 >

日	月	火	水	木	金	土	
			1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12	
13	14	15	16	17	18	19	
20	21	22	23	24	25	26	
27	28	29	30				

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



▲ハシビロコウの剥製（左）と骨格標本（右）

大きなくちばしから、骨を見ただけでもハシビロコウだとわかりますね。このくちばし、以外と軽いんですよ。





羽をよくみるとコントラストがきれいで、全体的に見ると単純な灰色だけではないことがよくわかります。



ハシビロコウの剥製と骨格標本をみくらべられるのは期間限定（9月末位までを予定しています）です。この機会をお見逃しなく！

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Augustの過去ログをしています。

August26日Wednesday: 鳥博は今年で30周年を迎えました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [muramatsu](#)

皆さまのおかげで、我孫子市鳥の博物館は、今年で30周年を迎えました！平成2年5月22日に開館して以来、これまでに140万人以上の方にあしを運んでいただきました。ありがとうございます。

「あし」といえば、こちらのポスター。



これは博物館のオープン当初につくったものです。実際に本物の標本を見て楽しんで欲しいという思いが込められています。これからも皆さまに楽しんでいただける博物館づくりに取り組んでいきますので、応援よろしくお願いします！

(ちなみにダチョウのあしは2本です)

< 2020-08 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)

ミュージアムショップでは4本あしダチョウの30周年記念クリアファイルを販売中です（税込100円）！

鳥の博物館友の会

[google.co.jp](https://www.google.co.jp)

また、館内にはハシビロコウの30周年記念スタンプを設置しています。1階エントランスと3階展示室には、ハシビロコウの標本を展示しているので、ぜひ見に来てください！



August16日Sunday: 2020年8月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



8月15日に、2020年8月のテーマトークを実施しました。7月からオンラインでの開催を始めましたが、2回目である今回はYoutube liveを用いたライブ配信で行いました。

今回は、山階鳥類研究所保全研究室・自然誌研究室研究員（兼任）の森本さんに「都市における電柱と野鳥 ーおもにスズメの話題からー」と題して講演いただきました。

日本で最も人に身近な鳥であるスズメの生態、人とのかかわり、個体数の減少の実態などについて紹介されたあと、スズメが電柱をどのように使っているのかについてご紹介いただきました。質疑応答はチャット機能を用いて行われ、スズメの減少の原因や、繁殖がうまくいっていないことなどについてわかりやすくお答えいただきました。

今回のオンライン講演は、最大同時に158人の方に視聴していただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。9月のテーマトークはお休みです。10月以降の実施方法については、山階鳥類研究所・我孫子市鳥の博物館ウェブサイトでご案内します。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Julyの過去ログをしています。

July18日Saturday: 2020年7月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



7月18日に、2020年7月のテーマトークを実施しました。テーマトークはこれまで、おおむね月に1回のペース（9月と11月を除く）で実施してきましたが、2020年3月以降、新型コロナウイルスの感染対策のため、実施を見送ってきました。

この度、準備が整いましたので、7月からzoomを用いてオンラインで実施することにいたしました。

今回は、鳥の博物館学芸員の小田谷が「鳥の換羽とその野外観察の面白さ」と題して講演しました。

すべての鳥の羽毛は使い捨てで、定期的に抜けて新しいものに交換されます。その一連のプロセスを換羽（かんう）といいます。換羽はなぜ行われるのか、鳥の換羽の基本的なパターン、野外で換羽を観察するコツ、換羽の観察からわかることなどについてお話ししました。

< 2020-07 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

全国各地から228名の方に登録いただき、実際には最大同時に177人の方に視聴していただきました。ご視聴いただいた皆様、ありがとうございました。8月以降もオンラインで開催する予定ですので、今後ともよろしく願いいたします。

google.co.jp



Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Juneの過去ログをしています。

June12日Friday: 株式会社モンベル様よりフェイスシールドを提供いただきました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya

本日、株式会社モンベル様が呼びかけるアウトドア義援隊より、博物館の受付・解説などの業務で使用するためのフェイスシールド10個をご提供いただきました！早速、窓口で受け付け業務にあたる職員に使ってもらいました。



▲フェイスシールドを使って受付業務にあたる職員

今後、自然観察会や館内の解説を再開する際にも、利用させていただきたいと思います。

まことにありがとうございました。

株式会社モンベル様では、「アウトドア義援隊」として、新型コロナウイルス感染症対策を支援するため、医療機関や山小屋、博物館等の公共施設にフェイスシールドや防護服の提供を行われています。詳しい情報は、以下のサイトからご覧ください。

< 2020-06 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

<http://about.montbell.jp/release/disp.php?id=481>

google.co.jp

June 9日Tuesday: 本日から開館！フクロウコーナースタート

カテゴリ: General 投稿者: someya



当館は新型コロナウイルス感染拡大防止対策の一環として、3月末から休館していましたが、本日6月9日（火）より開館しました。

館内には、観察を続けている、フクロウの巣箱カメラの映像をご覧いただけるコーナーがあります。フクロウの子育て時期限定のコーナーです。3密を避けるため、平日がオススメです。画像は鳥の博物館のウェブサイトからもご覧いただけます。



ヒナは親からエサをもらってどんどん成長しています。孵らないままの卵が映っていて気になる方もいらっしゃるかと思いますが、自然の状態をご覧いただいています。ヒナが巣立つ日も近付いています。



鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Februaryの過去ログをしています。

February24日Monday: 鳥博セミナー「ハクセキレイの標識調査」を開催しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



2020年2月23日（日）に、鳥博セミナー「ハクセキレイの標識調査」を開催しました。「ハクセキ道場」を主宰されている亀谷辰朗さんと森本元さんのお二人にお話しいただきました。今回のセミナーは、開催中の企画展「バンディング展～足環でわかる鳥の渡り～」の連携企画として開催したものです。

まず、森本さんにセミナーの趣旨についてお話しいただいたあと、亀谷さんにハクセキレイと亀谷さんたちが実施する「ハクセキ道場」について詳しくご紹介いただきました。

ハクセキレイは、私たちにも身近な白黒の小鳥で、スズメ目セキレイ科に分類されます。セキレイの仲間はずっと歩くときに尾を上下に振ることが特徴で、セキレイ属の属名*Motacilla*は小さな（尾を）動かすもの、という意味のラテン語だそうです。

< 2020-02 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



ハクセキレイはユーラシア大陸に広く分布し、地域によって羽色などが異なるため、11の亜種に分けられています。このうち、日本では亜種ハクセキレイが普通に分布するほか、旅鳥として亜種ホオジロハクセキレイ、亜種台湾ハクセキレイなどが渡来します。ほか、まれな旅鳥や迷鳥として他の数亜種も記録されています。

鳥に足環を付けて渡りなどを調べるバンディング（標識調査）は、各地で行われていますが、ハクセキレイの場合は他の調査と異なる点があります。まず、普通は日中にかすみ網などの道具を設置して鳥がかかるのを待つのにに対し、ハクセキレイの調査では人が網を動かし、夜明け前にねぐらで一気に捕獲します。

この調査は現在では11月から4月の越冬期に行われ、月に1回、東京都内の川に架かる橋の上で実施されています。調査の開始は1973年にさかのぼりますが、亀谷さんたちのグループがこれを引き継ぐ形で開始されたのは1997年で、それから20年以上、場所を変えつつも継続されています。2019年12月までに185回の調査を行われ、4856羽のハクセキレイに足環を付けて放鳥されています。

亜種ハクセキレイは世界のハクセキレイの亜種の中で最も翼の白色部が広く、性と年齢による違いがはっきりしています。しかし、その一方で中間的な個体も多く、その識別は一筋縄ではいかない部分があるようです。今回は、鳥の博物館に所蔵している片方の翼を開いた状態の本剥製を使って、その概要についてお話しいただきました。



▲標本を使って性と年齢の識別について解説する亀谷さん。

また、時々捕獲される過眼線のない個体については、翼の白色部の広さや大きい計測値から、亜種ホオジロハクセキレイではなく亜種ハクセキレイの羽色の変異だと思われることについてもご紹介いただきました。

続いて、森本さんに、標識調査でわかったハクセキレイの生態と足指の欠損に

ついてお話しいただきました。ハクセキレイはかつては本州中部以南では冬鳥でしたが、1950年代ごろからより南の地域でも繁殖するようになり、1970-80年代からは関東地方で繁殖するようになりました。この拡大傾向は現在でも続いているようです。ハクセキ道場での捕獲調査のデータを見ると、越冬期に捕獲数が多く、越冬個体がより北の地域からやってきていることがわかります。

ハクセキレイは都市の環境に適応し、コンクリートの駐車場などで餌をとっているのもよく見かけますが、ねぐらも人工物を利用するようになっています。ハクセキ道場の調査が行われている橋の下や、電線、看板の裏など、さまざまな場所を使っています。

ハクセキレイを越冬期に観察すると、2羽で行動しているのをよく見かけます。これらは繁殖するつがいなのかと思いきや、実はそうではなく、冬だけオーナーのいる縄張りに居候している1羽がくっついて（サテライトと呼ぶそうです）行動しているのだそうです。ヨーロッパで行われた実験では、餌の量が十分に得られる場合はオーナーはこのサテライトを受け入れるが、餌がない場合は追い出してしまうそうです。このように、つがいや血縁関係のない2羽の鳥が行動を共にするのはあまりないケースのようです。

森本さんたちがハクセキレイの標識調査を行っているとき、足の指が欠損している個体が多く含まれることに気が付きました。他の鳥に比べてかなり多く、ときには全体の5%ほどにもなることもあるそうです。正常な個体と体重を比較してみたところ、欠損のある個体はより体重が軽いようで、うまく餌を捕れていない可能性があるとのことでした。これらの原因は、ビニールひもなどの細い人工物が足に絡んで起こるケースが多いとのこと、都市の鳥に人間のゴミの影響があることが標識（捕獲）調査によっても明らかになっています。

全体を通して、継続して行われているハクセキレイの標識調査によって、多くの新知見が明らかになってきていることとお話しいただきました。質疑応答の時間では、ねぐらの利用の季節変化、ハクセキレイの食べ物や、セグロセキレイとのすみわけなどについて活発な議論が交わされました。今回は43名の方にご参加いただきました。

ご参加いただいたみなさま、講演いただいた亀谷さん、森本さん、どうもありがとうございました。

企画展「バンディング展～足環でわかる鳥の渡り～」は、2020年6月14日（日）まで開催予定です。展示の中でハクセキレイの渡りや性と年齢の識別についてもご紹介しておりますので、ご興味ある方はぜひご来館ください。

February24日Monday: 2020年2月のテーマトークを開催しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



▲構造色の羽毛をもつカワセミ

2月15日に、2020年2月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室・保全研究室研究員の森本元さんに、「鳥の色彩と構造色」と題してお話しいただきました。

鳥は、視覚とともに色覚の発達した生物であると考えられており、私たちに見えない紫外線も見えるため、4原色で世界を見ています。鳥の持つ色はさまざま、カワセミのようにキラキラした青色の鳥もいれば、オオバンのように全身黒色の羽色を持つ鳥もいます。

鳥の多様な羽色を形作っている要素は2つに分けられます。光が当たった時に吸収されなかった色の光が反射して見える色素色（しきそしよく）と、細かい構造によって強調された色の光が見える構造色（こうぞうしよく）です。たとえば、牛乳の白は、脂肪分のコロイド粒子によって光の散乱が起こっていることで見える構造色です。構造色はさまざまな生き物で見られますが、たとえば昆虫ではカラスアゲハやタマムシなどのキラキラ光る翅の色は構造色です。

鳥の色素は、ほとんどがメラニン（黒・茶色系）とカロテノイド（黄・赤系）で構成されています。一方で、青や紫などのそれ以外の色は、ほとんどが構造色によって見えています。

鳥の羽毛の青色の構造色には、カワセミのようにキラキラ光る虹色の構造色と、コルリやイソヒヨドリのように非虹色のものがあります。これらにはなぜこのような違いがあるのかを、詳しく説明していただきました。

青色の構造色だけでも、羽毛の羽枝や小羽枝にある構造の種類によってさまざまなパターンがあるそうです。たとえば、カラス類やドバトの首の金属光沢は、ケラチンが形作る膜構造による干渉が原因ですが、カワセミの青色の羽毛は、スポンジ構造によって青色が強調されていることが原因であることが、電子顕微鏡での構造研究や光の研究から明らかになっているそうです。

また、色素であるメラニンの配置によって構造色が見える場合もあり、クジャクの青色の羽毛はそのような構造で作られているそうです。森本さんたちのグループは、そのような点に着目し、人工的にメラニンの配列を調整することで、様々な色の構造色を実際に作り出すことに成功されました。自然の性質を知ること、新しい技術が生み出される可能性についても知ることができました。

今回は、40名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた森本さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2020年Januaryの過去ログを見えています。

January21日Tuesday: 2020年1月のテーマトークを開催しました。

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



1月18日に、2020年1月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の齋藤武馬さんに、「絶滅寸前？オガサワラカワラヒワの特徴とその保全」と題してお話いただきました。

オガサワラカワラヒワは日本本土にも分布するカワラヒワの亜種の一つで、世界で小笠原諸島だけに分布しています。本土のカワラヒワに比べて、羽の色の黄色みが少し弱く、体が小さいことが特徴といわれています。

これまでに齋藤さんたちが行ったDNAバーコーディング（ミトコンドリアDNAの一部の短い配列を読むことで、生物の同定を行うための手法）の配列を用いた研究では、本土に分布する亜種カワラヒワとは、3%を超える大きな遺伝的な違いがあることがわかりました。これは、一般的には亜種の間での遺伝的違いよりも大きく、種のレベルの違いに相当するものでした。

そこで、齋藤さんたちは、オガサワラカワラヒワがどのくらいほかのカワラヒ

< 2020-01 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4

5 6 7 8 9 10 11

12 13 14 15 16 17 18

19 20 21 22 23 24 25

26 27 28 29 30 31

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくろうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

ワの亜種と違うのかを調べるために、別の遺伝子をより詳しく調べたり、地域ごとに体の大きさの違いを調べる研究を行いました。

まず、バーコーディング領域とは異なる2つのミトコンドリアDNAの遺伝子の配列を調べると、オガサワラカワラヒワは他のカワラヒワの亜種と2.1-2.4%の配列の違いがあることがわかりました。また、他の亜種とは110万年（更新世の中期ごろ）も昔に分かれていたと推定されました。また、遺伝的な多様性はとても低いこともわかりました。

次に、博物館に保存されている標本を使って、体の大きさの違いを調査した結果についてお話しいただきました。カワラヒワの亜種は北方で繁殖するものほど体が大きくなる傾向があり、オガサワラカワラヒワはすべての亜種の中で最も短い翼をもっていました。しかし、くちばしの長さを測ってみると、どの亜種よりも大きいことがわかりました。すなわち、オガサワラカワラヒワはすべての亜種の中で最も体に対して大きな嘴を持っているということになります。これは、餌となる種子の少ない海洋島の環境で、ムニンアオガンピなどの木の種を食べることに適応した結果ではないかと考えられるとのことでした。



▲オガサワラカワラヒワの雄成鳥。くちばしが比較的大きいことがわかる。

このように、遺伝的にも形態的にも他の亜種とは大きく異なるオガサワラカワラヒワは、別種とみなすのが妥当ではないかと考えられます。しかし、オガサワラカワラヒワの個体数は急激に減少しており、その絶滅が心配されているのです。かつて、オガサワラカワラヒワは小笠原群島と硫黄列島のほぼすべての島に生息していました。しかし、現在では母島列島の属島と南硫黄島に限られてしまっており、その個体数は合わせて400羽ほどと見積もられています。

その大きな原因となっていると考えられるのが、巣やヒナを襲う外来捕食者である大型のネズミ類です。小笠原諸島にはクマネズミとドブネズミの両方が人間によって持ち込まれていますが、実は、オガサワラカワラヒワが生き残っているのは、木登りの得意なクマネズミのいない島に限られています。現在生き残っている母島の属島でも、ドブネズミによって捕食されて数を減らしてしまっていると考えられています。

google.co.jp



今後は、生息地である無人島でのドブネズミの駆除や、観察や標識調査によるモニタリングの継続、飼育下での人工繁殖に向けた遺伝的な多様性の把握などが課題とのことでした。

これほど危機的な状況ながら、まだまだ一般の人に存在が知られていないのがこのオガサワラカワラヒワです。地元の母島で活動されている川口大朗さんが作成されたオガサワラカワラヒワの保護を呼びかけるステッカーを会場で配布しました。ぜひ多くの人にオガサワラカワラヒワの状況を知っていただき、保全に向けた取り組みが少しでも進むことに期待したいと思います。

今回は、20名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた齋藤さん、ありがとうございました。

January 8日Wednesday: 2019年12月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: iwamoto



2019年12月21日（土）に、テーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所保全研究室の富田直樹さんに、「実は日本のカモメ類が減っています」と題してお話し頂きました。

山階鳥類研究所保全研究室では、環境省の事業である「モニタリングサイト1000」の海鳥調査を委託されています。モニタリングサイト1000は、日本全国にわたって、1000ヶ所程度のモニタリングサイト（調査地）を設定し、基礎的な環境情報の収集を長期にわたって行う環境省の事業で、2003年から始まりました。海鳥部門の調査では、日本全国の島嶼部に合計30ヶ所の調査地が設定されており、3～5年に一度のペースで、調査が継続されています。

海鳥は世界全体で約350種おり、鳥類全体の約4%を占めています。海洋生態系の高次捕食者であるため、海鳥の繁殖成績は海洋生態系の環境指標になります。しかし、世界の海鳥の個体数は1950年から2010年の間に約70%も減少したといわれているとのことでした。そして現在、世界の海鳥の3割くらいが国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているそうです。

減少の理由としては、海特有の人為的な影響が挙げられていることが紹介されました。影響が大きいと考えられているのは、人間が持ち込んだネズミやネコ等の外来生物が、海鳥の繁殖地である島に侵入したことや、マグロはえ縄漁や刺し網などの漁業による混獲でした。

海鳥の個体数については、世界全体での減少傾向が指摘されてきた一方で、日本で繁殖する多くの海鳥については、これまで、その個体数変化が詳しく調べられてきませんでした。その長期的な変化を示した初めての研究成果が、今年の8月に富田研究員のグループによって発表されました。

日本では、40種の海鳥が繁殖しており、そのうち22種がレッドリストに記載されています。研究グループでは、日本で繁殖する海鳥 10 種について、環境省の日本海鳥コロニーデータベースを利用して、過去 36 年間（1980年～2015年）の個体数変化を解析しました。このデータベースには、「モニタリングサイト1000」以外のデータも多く含まれています。

その結果、増加していたのは4種（アホウドリ、ヒメウ、ケイマフリ、ウトウ）、大きな変化が無かったものは2種（コシジロウミツバメ、ウミウ）、減少していたものは4種（エトピリカ、ウミガラス、ウミネコ、オオセグロカモメ）でした。この結果からは、ウミガラスやエトピリカといった絶滅危惧種だけでなく、ウミネコやオオセグロカモメといった、分布域が広くて個体数が多いと思われていた種も、長期的に減少していることが明らかになりました。

ウミネコは、全国10ヶ所の繁殖地のデータを用いて解析したところ、1980年から2015年の間に、72%減少していました。また、オオセグロカモメは、全国9ヶ所のデータを用いて解析したところ、1980年から2015年の間に、65%減少していました。現在でも、これらのカモメ類は全国の海岸で普通に見ることができるので、あまり減ったという実感は無いかもしれません。しかし、繁殖地に足を運んでみると、その変化を実感することができるようで、その例として、山形県飛島にあるウミネコのコロニーにおける変化を写真で紹介して下さいました。

日本で繁殖するカモメ類が減少した主な要因として、以下のことが考えられています。

- ①元々繁殖地の島にはいなかった、天敵であるネコやキツネの侵入
- ②餌となる魚の減少
- ③在来天敵であるオジロワシの個体数増加

飛島のように繁殖地の中には人の住んでいる島もあり、人が持ち込むネコなどの動物の管理が課題であるとのことでした。餌となる魚の減少については、地球環境の変化とも関係があるのかもしれませんが、オジロワシについては、絶滅危惧種でもあることから、その個体数が回復してきていることは、喜ばしい反面、海鳥繁殖地で頻りに観察されるようになってきているようです。これは、悩ましいところでもあるとのことでした。しかし、オオセグロカモメやウミネコの繁殖数が減少した直接の原因は、まだよく分かっていないようです。

日本で繁殖するカモメ類のように分布域が広く、かつ個体数の多い種が急激に減少すると、生態系の機能や安定性に与える影響が大きいと考えられています。そして、今回の研究結果は、絶滅危惧種だけでなく、広域に分布する種の保全のあり方を議論する必要性があることも示しています。今後も注意深くモニタリング調査を行っていく必要があると考えられます。

富田さんたちの研究についてより詳しく知りたい方は、以下のプレスリリースをご覧ください。

https://www.hokudai.ac.jp/news/190902_pr2.pdf

今回は26名の方にお集まり頂きました。ご参加いただいた皆様、そして、大変興味深いお話をして下さいました富田さん、有難うございました。

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Decemberの過去ログをしています。

December19日Thursday: 公開シンポジウム「バンディングでわかることー鳥類標識調査の成果と未来」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



12月14日（土）に、公開シンポジウム「バンディングでわかることー鳥類標識調査の成果と未来」を我孫子南近隣センターの9階ホールにて開催しました。このシンポジウムは、我孫子市で行われた日本鳥類標識協会の2019年度全国大会の一部として行われたものです。また、来年2月1日から鳥の博物館で開催される企画展「バンディング展 一足環でわかる鳥の渡りー」の連携企画です。

野外で鳥類の研究を行う際には、標識によって個体識別を行うことが重要となります。標識によって、鳥の渡り、回帰性、寿命、繁殖率、個体群の動態など、多くの情報を得ることができます。日本における鳥類標識調査（以下、バンディング）は、1924年に開始されてから、これまでに累計500万羽以上が放鳥されており、さまざまな鳥類の生態が明らかになっています。一方で、標識鳥の回収にあたっては、一般の市民やバードウォッチャーの方々の協力が欠かせないものとなっていますので、バンディングの成果や今後の発展についての理解を深め

< 2019-12 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

ていただきたいと考え、このシンポジウムを企画しました。

google.co.jp



まず最初に、環境省生物多様性センターの吉川さんから、バンディングの概要や、成果の公表方法についてお話しいただきました。環境省の行っている生物調査の中で、バンディングが重要な位置を占めていることとお話しいただきました。続いて山階鳥類研究所副所長の尾崎清明さんに、これまで日本におけるバンディングの成果を総括していただきました。カシラダカの減少やアオジの移動など、再捕獲だけでなく、新放鳥のデータからもさまざまな興味深いデータを得ることをご紹介いただきました。

シンポジウムの後半では、バンディングが持つようになった新しい役割である、モニタリングと保全について、それぞれお話しいただきました。山階鳥類研究所保全研究室の仲村昇さんには、標識調査が鳥の個体数の変化を捕える手法としてどのように役立つのかを、ヨーロッパや北米の事例をもとに紹介していただきました。最後に、バードライフ・インターナショナル東京の澤祐介さんからは、絶滅危惧種であるコクガンの渡り研究を通じて、標識調査を保全につなげるかについて、ご自身の調査研究・教育普及活動のご経験をもとにお話しいただきました。



△質疑応答・総合討論のようす

4つの発表のあとに、会場のみなさんから提出していただいた質問カードをもとに、演者の皆さんに回答いただきました。バンディングに対して持たれていた疑問を解決する良い機会になったと思います。

最後に、それぞれの演者の方から、今後の標識調査の課題や期待することについてお話しいただきました。生物多様性センターの曾宮さんからは、膨大な標識データの解析の強化や後継者の育成が課題であることを、尾崎さんからは、リアルな鳥から情報を得る調査を継続していく努力をすべきであるとのコメントをいただきました。また、仲村さんからは、バンディングの対象種をかすみ網以外の方法で捕獲する鳥に広げること、澤さんからは、環境保全のためにバンディングのデータをどのように活用できるか、各バンダーが考えて実践することが重要であることをお話しいただきました。

当日は、標識大会の参加者78名に加えて、一般の方42名にもご来場いただき、合わせて120名の方に参加いただきました。バンディングのこれまでの成果について知っていただき、これからの発展について期待を持っていただけたものと思います。ご登壇いただいたみなさま、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

December 7日 Saturday: 友の会展スタート

カテゴリ: General 投稿者: someya

本日、第85回企画展「第15回友の会展」がスタートしました。鳥の博物館友の会は博物館活動に協力しながら、鳥や自然を学び、親睦を深めることを目的として平成13年4月に設立されました。



博物館活動への協力のほか、友の会に設けられた5つのグループ（みて歩こう会・デジカメ同好会・鳥凧同好会・鳥絵同好会・万葉集同好会）ごとの自主活動も活発です。友の会展ではその活動成果を紹介しています。友の会展は来年1月13日（月・祝）まで。ぜひご来館下さい。



▲準備の様子。友の会が中心となって作業をしました。（写真は万葉集同好会）

完成した展示の様子を一部ご紹介。



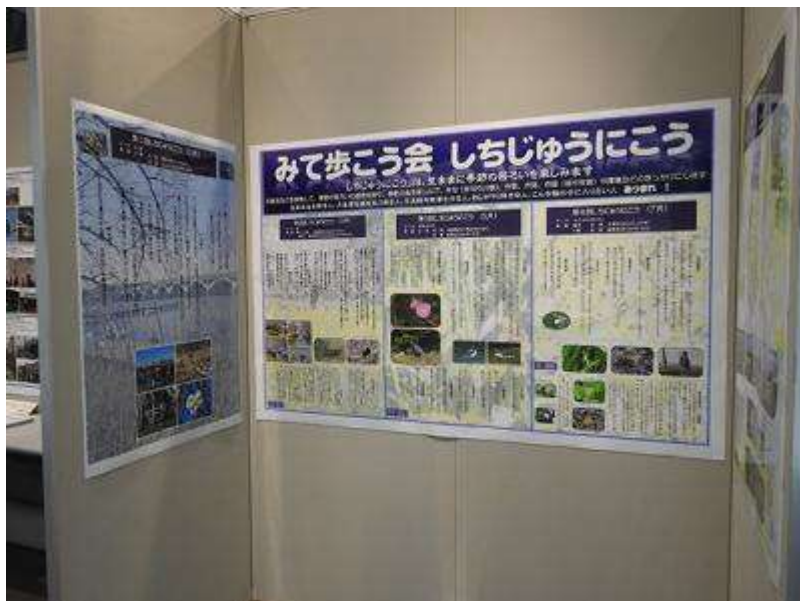
▲鳥風同好会



▲鳥絵同好会



▲デジタルカメラ同好会



▲みて歩こう会

December 1日Sunday: JBFゲストトークを実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: iwamoto



2019年11月3日（日）に、JBFゲストトークを実施しました。今回は「台日野鳥交流活動 - 海外野鳥観察旅行の新たな楽しみ方 -」と題して、台湾鳥会会長の林憲文さんと我孫子野鳥を守る会前会長の間野吉幸さんにご講演を頂きました。

今回のゲストトークは、第84回企画展「世界からみた日本の鳥」の関連企画として実施しました。企画展では、島国である日本の鳥の特徴について紹介しています。それに関連して、同様に島国である台湾の鳥についてのお話を伺いたいと考え、ご講演をお願いしました。また、バードフェスティバルを通じて親交を深めている我孫子野鳥を守る会との交流活動についてもお話し頂きました。

まず、林さんから台湾の固有種として、29種の鳥（※）をご紹介下さいました。色とりどりの美しい鳥たちの写真に加え、鳴き声の録音も聞かせて下さいました。音源の中にはユニークな鳴き声があり、それを、電報を打つ音や自転車のブレーキ音などに例えて、大変分かりやすく教えて下さいました。

次に、林さんは台湾と日本との市民レベルでの交流についてもお話し下さいました。林さんが、バードフェスティバルへの参加のたびに日本でのバードウォッチングを行っている、地元の我孫子野鳥を守る会のメンバーが観察地を案内してくれるようになりました。その後、我孫子野鳥を守る会も、林さんの案内で台湾へ探鳥旅行に行くようになり、本格的な交流がはじまりました。林さんが我孫子野鳥を守る会とともに日本で訪れた探鳥地は、手賀沼、日光、軽井沢、伊豆沼とのことでした。特に印象に残ったのは、伊豆沼のマガンの大群で、日本で是非見てみたい鳥は、オジロワシとメグロだそうです。一方、日本人に見せてあげたい台湾の鳥として、固有種の他に、ヒゴロモ、ヤイロチョウ、キバネダルマエナガ、シロクロヒタキを紹介され、これらの生息地を案内されたいとのことでした。

続いて、間野さんのご講演では、鳥を通じた交流活動の面白さについて紹介されました。日本では普通種であっても、台湾では見られない鳥がいます。逆に、台湾では普通種であっても、日本では見られない鳥がいます。どちらの国へ行っても、お互いに、外国人は地元では珍しくない鳥を見て感動するのが、

とても面白いのだそうです。ただ鳥を見るだけではなく、「見方・感じ方のちがいがい」を楽しめるということが、国際交流の醍醐味とのことでした。

間野さんはこれまでに6回、台湾へ探鳥旅行に行かれています。そして、林さんに案内して頂いたおかげで、29の固有種のうち、すでに27種を観察することができたそうです。台湾はアジアにおける親日国としても有名です。間野さんが台湾へ行くと、日本人にとっても親切的な、バードウォッチャーに出会うことがあり、驚かされるといいます。たとえば、相手が日本人だと分かると、鳥の居場所を教えてくれたり、カメラマンが、わざわざ場所を開けてくれることもあったそうです。

間野さんは、林さんのご案内で台湾での植樹活動にも参加したそうですが、そこで植えた友好の木の苗が、大きな木に育ってゆく姿を見届けるために、今後も台湾を訪れたいとのことでした。そして、今後も両国の野鳥交流が続き、日本からさらに多くの方が台湾を訪れることを願いながら、講演は終了となりました。

今回は30名の方にお集まりいただきました。ご参加下さいました皆様、有難うございました。また、林さんと間野さん、それから、林さんの通訳を引き受けて下さいました、張紋明さんに感謝いたします。

※ 台湾の固有種：ミヤマテッケイ、サンケイ、ミカドキジ、ゴシキドリ、ヤマムスメ、台湾シジュウカラ、クロガシラ、ニイタカキクイタダキ、タカサゴミソサザイ、台湾オオセッカ、アリスンチメドリ、カンムリチメドリ、チャガシラ、タケドリ、ホイビイ、キンバネホイビイ、ミミジロチメドリ、ヤブドリ、シマドリ、マルハシ、ヒメマルハシ、ルリチョウ、アリスンヒタキ、タカサゴマシコ、テッケイ、台湾ヤマガラ、メジロチメドリ、コバネヒタキ、台湾ツグミ

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Novemberの過去ログをしています。

November27日Wednesday: 日本らしい鳥は？アンケート結果発表！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

先日、企画展「世界からみた日本の鳥」が4ヶ月の展示期間を無事に終了しました。ご来場いただきましたみなさま、ありがとうございました。



今回は企画展内で行っていたアンケート「あなたが選ぶ日本らしい鳥は？」の結果をご報告します。アンケート実施期間は2019年7月13日から11月24日まで。企画展内で紹介している鳥から6種を取り上げ、その中から日本らしい鳥はどれか、ご来場のみなさまに選んでいただきました。個人的な思い入れはもちろんのこと、自由に選んでいただきました。6種の鳥はヤマドリ、キジ、カルガモ、トキ、タンチョウ、ウグイスです。

結果はっぴょう！じゃ、じゃーん！

< 2019-11 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



1票につき、赤シール1つです。赤シールに目がチカチカしながらも地道にシールをはりました。

集計結果は、

1位	キジ	453票
2位	ウグイス	342票
3位	タンチョウ	305票
4位	トキ	259票
5位	ヤマドリ	133票
6位	カルガモ	107票

以上の結果となりました。1位に輝いたのはキジでした。国鳥のキジは身近な鳥でもありますし、やはり人気がありますね。

November22日Friday: 2019年10月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: iwamoto



10月19日に、2019年10月のテーマトークを実施しました。今回は、我孫子市鳥の博物館学芸員の岩本二郎が、「我孫子駅前でのイソヒヨドリの繁殖調査」と題して話をさせていただきました。

イソヒヨドリは、かつて日本では海岸沿いで見られていましたが、最近は内陸部でも見られるようになってきており、JR我孫子駅前でも繁殖が確認されるようになりました。この鳥の内陸進出の理由を解明するため、2017年から我孫子市において、営巣場所と食性についての調査を実施しました。

イソヒヨドリの営巣場所はいずれもJR我孫子駅前で、2017年に2巣、2018年に3巣、2019年に2巣を確認しました。営巣に利用されていたのは、換気扇の覆いの中、大型量販店の立体駐車場、金属屋根の中、排煙管の裏といった、コンクリートの建物にある人工物でした。いずれも垂直な壁の上にあり、また、周囲をコンクリートや金属のような固いものに囲まれた隙間で、イソヒヨドリが海岸で営巣する際に利用する岸壁の岩の隙間と共通点がありました。このような構造物が増えたことが、イソヒヨドリの内陸進出を促進した可能性があると考えられました。

食性調査では、2年続けて営巣した同じ巣で、2017年と2018年にヒナに運んできた餌の種類を記録しました。そこからは都市部で繁殖するイソヒヨドリが雑食性で、いろいろな種類の動植物を幅広く食べていることが分かりました。どちらの年も、よく運ばれてきた餌は、昆虫の成虫（アリ、ハサミムシ、甲虫、ユスリカ、ガヤチョウ）、昆虫の幼虫（ガヤチョウ、甲虫等）、ムカデ、木の実などでした。この中で、ムカデについては、イソヒヨドリが人工的な環境である線路に降りて、ムカデを捕食する様子を観察することができました。そして、イソヒヨドリの都市部での採餌には、人工物も役立っていると考えられました。

今回の調査では、建物の所有者の方に調査を許可して頂いたり、情報を提供して頂くなど、我孫子市民の皆様には大変お世話になりました。皆様のご協力のお陰で、調査の難しい市街地でのイソヒヨドリの生態について、貴重な知見を得ることができました。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

また、今回は31名の方にお集まりいただきました。ご参加下さいました皆様、有難うございました。

November 4日Monday: 第29回JBF鳥学講座を実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



11日2日（土）に、第29回JBF鳥学講座をアビスタホールにて開催しました。今回は「島の鳥類学—南西諸島の鳥をめぐる自然史—」と題して、北海道大学大学院理学研究院教授の高木昌興さんと、山階鳥類研究所保全研究室長の水田拓さんにお話しいただきました。また、2つの講演の終了後に、山階鳥類研究所副所長の尾崎清明さんを交えて、質疑応答とディスカッションを行いました。

トップバッターの高木昌興さんからは、「『島の鳥類学』の面白さ—リュウキュウコノハズクを例に一」と題してお話しいただきました。まず、島に分布する生き物の特徴について理論的な背景をお話しいただきました。動物が島に辿り着くには、海を越えて移動する必要があります。鳥は翼を持って自らの力で移動していくことができますが、島は面積が狭く、環境の多様性に乏しいので、一般的に大陸よりは種数が少なくなります。島にいる生き物の種数には、大陸からの距離と島の面積によって関係する法則があります。また、陸からの距離が近いほど、また面積が大きいほどそこにいる種類の数は多くなります。

科学や人類史に関する著作も多くあるカリフォルニア大学のジャレド・ダイヤモンド教授は、もともとは島の鳥の研究者でした。そのダイヤモンド教授の初期の研究で、カリフォルニア沖のチャンネル諸島の鳥類相の経年変化を比較したものがありません。1917年と1968年に鳥の種構成を調べた結果、およそ50年の間に種数は大きく変化していませんでしたが、種構成は大きく変化していました。このように、島では種の絶滅と新たな侵入が繰り返されることで、平衡状態を保つのではないかと考えられています。

また、歴史的に他の地域と分断されている時間が長いと、そこでは新しい種に分かれる進化が起こります。ハワイ諸島やガラパゴス諸島では、大陸からの距離は離れていますが、島の中で起こった適応放散によって、多くの固有の種が分布しています。

日本の島々に目を向けて、伊豆諸島と小笠原諸島を例に考えてみます。本州からの距離が比較的近い伊豆諸島と、1000kmほど離れた小笠原群島では、繁殖する陸鳥の種はそれぞれ31種と13種で、伊豆諸島の方が多いのに対し、固有種・亜種の種数はそれぞれ8種と10種で、小笠原群島の方が多くなっています（絶滅種を含む）。日本の島々にも、これらのルールは当てはまるようです。

続いて、ご自身の研究テーマであるリュウキュウコノハズクの研究についてお話しいただきました。リュウキュウコノハズクは南西諸島全体に分布しますが、沖縄島から宮古島までの慶良間海裂よりも南側では、体が大きく、より低くゆっくり鳴くのに対して、北側の集団では体が小さく、より高く速く鳴くことが高木さんの研究で分かりました。実際に録音した鳴き声を会場で流していただき、島によって鳴き声が大きく異なることが良くわかりました。島ごとに異なる鳥の形態や生態を比較することで、進化の歴史を垣間見ることができるのです。

次に、水田さんからは、「『南西諸島の鳥類学』の面白さーオオトラツグミを例に一」と題してお話しいただきました。

南西諸島は九州の南から台湾の東までに連なる198の島々からなります。日本の本土の島々と比較すると種数は少ないものの固有種や固有亜種の数も多く、生物多様性の保全上重要な地域とみなされています。

中でも、奄美諸島は鳥類では2種の固有種（ルリカケスとアマミヤマシギ）、4種の固有亜種（オーストンオオアカゲラ、アマミコゲラ、オオトラツグミ、アマミシジウカラ）が分布しています。鳥類のほかにもアマミノクロウサギやアマミシカワガエルなど、世界中でここにしかない貴重な動植物が分布しています。そのことから、政府や鹿児島県では徳之島、沖縄島北部、西表島と併せてユネスコの世界自然遺産への登録を目指しています。

その奄美大島に分布するのがトラツグミの亜種であるオオトラツグミです。本土に分布するトラツグミに良く似ていますが、その名の通り少し体が大きいです。最も大きな違いは鳴き声で、マミジロに似た「キョローン」という声で鳴きます。このことから、トラツグミとは別の種類であると考え人もいます。

オオトラツグミは1905年に鳥類学者の小川三紀（おがわ・みのり）によって新種として記載されました。当時から数の少ない鳥と考えられていましたが、第二次世界大戦の後にアメリカから返還された1953年以降、森林伐採が進んだこと、1979年からハブの対策を目的としたマングースの放獣が行われたことによってさらに数を減らしてしまいました。1990年代に奄美野鳥の会によって行われた調査では個体数はわずか58羽ほどであることが分かりました。

水田さんは2006年に奄美に赴任され、この減少したオオトラツグミの保全に携わることになりました。絶滅危惧種を守るためには、どこに分布し、何を食べ、どのように繁殖し、何羽いるのか、なぜ減っているのかを調べる必要があります。水田さんはこれらの問題に取り組むために、オオトラツグミのこのような生態を調査することにしました。

地元の自然愛好家の人たちと協力して奄美大島内での分布をさえぎっている個体の聞き取りによって調べたところ、島の中部から南部、標高と林齢が高いところ、マングースが少ないところで数が多いことが分かりました。水田さんが調べるまでオオトラツグミの巣はわずか3巣しか見つかっていませんでしたが、これまでに95巣が見つかり、太い木の又や岩棚に作られていることが判明しました。見つけた巣のうち11巣で親がヒナに持ってくる餌を観察したところ、その80%がミミズであることが分かりました。さらに、前述のさえずり調査結果か

ら、現在では2000-5000羽程度が生息し、個体数は増加傾向にあることが分かりました。森林の保全やマンガースの駆除がうまくいっている成果の一つと考えられます。



▲質疑応答のようす。左から、尾崎さん、高木さん、水田さん、平岡さん（司会）。

質疑応答とディスカッションの時間では、まず尾崎さんからヤンバルクイナの発見とその後の保全活動に関する紹介があり、その後、会場からの質問を受けました。リュウキュウコノハズクの地理的変異はどのような生態的な意味があるのか、奄美大島で進化を遂げた固有種には特別な能力があるのか？といった質問がありました。

続けて、登壇者3名によるディスカッションを行いました。鳥は翼があるのになぜ固有種になる？という平岡さんからの質問に対しては、「移動しないほうが沢山の子を残すことができるような環境で進化する」「鳥は意外と保守的で、生まれ育った環境からあまり大きく分散しない傾向がある」ことが島の鳥の特徴としてあげられるのではないかと話がありました。最後に、3人の登壇者の方に島でのバードウォッチングの楽しみ方について伺いました。島と本土との違い、島ごとの行動の違い、渡り鳥の渡り経路について注目して観察を楽しむと、より深く島でのバードウォッチングを楽しめるのでは、とのお答えをいただきました。

今回の鳥学講座では、島の鳥たちの観察の楽しみ方について、単に本土と種や亜種が違うというだけではないさまざまな視点をご紹介いただけたと思います。

ライブビューイングの会場と併せて172名の方にご来場いただきました。ご登壇いただいた高木さん、水田さん、尾崎さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

当日のレジュメは、以下からもご覧いただけます。

http://www.yamashina.or.jp/hp/event/images/chogaku_koza19.pdf

今回のお話のもとになった書籍は、[こちら](#)です。

鳥の博物館ミュージアムショップでも11月中旬以降に扱う予定ですので、ぜひご購入ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Augustの過去ログを見えています。

August22日Thursday: 2019年8月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



8月17日に、2019年8月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の岩見恭子さんに、「鳥類標本の作り方 ーいろいろな標本をつくってみようー」と題してお話いただきました。

鳥類に関する標本というと、まずは剥製（はくせい）を想像しますが、そのほかにも部分的な翼、羽毛、骨格、卵、巣、胃内容物やヒナなどの液浸標本など、さまざまな種類があります。山階鳥類研究所のこれらを合わせておよそ8万点の鳥類標本が保管されており、アジアではトップクラスの収蔵数を誇っています。その多くが研究用の仮剥製（かりはくせい）です。

山階鳥類研究所では、一般の方から提供される野外で拾われた鳥の死体、動物園や野生動物保護センター等からの提供資料を合わせて年間約800羽ほどの鳥の遺体資料を受け入れて標本を収集されています。

< 2019-08 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

これらの標本は、同じ場所から何点も集められることがありますが、なぜ沢山集める必要があるのでしょうか？ その理由のひとつとして、北海道におけるオジロワシの食物を、標本の羽毛の安定同位体比から調べた研究をご紹介いただきました。100年前に採集された標本と現代の標本を比べてみると、昔に比べて食物の内容や採食域が多様になり、シカの狩猟残渣なども食べるようになった可能性があることが分かったそうです。私たちは過去にさかのぼって標本を収集することはできません。この時代を代表する資料は今保存しておかなくてはならないのです。

google.co.jp



続いて、ホールの前に集まっていただき、実物の標本を回覧しながらお話しいただきました。オオミズナグドリやコシジロウミツバメなどの独特な羽毛の臭い、ギンザンマシコの嘴に付いた松ヤニの臭いをかいだり、実物の標本から分かることをご紹介いただきました。



▲ぬいぐるみを用いた剥製標本の作り方の解説

岩見さんが剥製の作り方を説明するために自作されたぬいぐるみ「かけすちゃん」を用いて、剥製標本がどのように作られるかを分かりやすく説明いただきました。続けて、ニワトリの卵を使って、卵標本の作り方を実演していただきました。卵の側面に穴をあけて60℃くらいのぬるま湯に浸けると中身が効率よく取り出せるそうです。最後に、実物のアカショウビンの翼を使って翼標本をどのように作るかについても実演していただきました。

今回は、34名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた岩見さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Julyの過去ログをえています。

July21日Sunday: 2019年7月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



7月20日に、2019年7月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所保全研究室研究員の仲村昇さんに、「渡り鳥のふしぎ：春と秋で違うルートを使う種類がいるのはなぜ？」と題してお話いただきました。

鳥の行う渡りとは、繁殖地と非繁殖地間の往復の移動のことを指します。そのほかの移動、たとえば、日々の餌場と休息場所間の移動や、生まれた場所からの分散は、渡りとは区別されます。この渡りルートの往復を、同じルートで行き来する種と、違うルートを使う種の両方が知られています。このような渡りの形態を、loop migration（ループ型移動）といいます。

loop migrationを行うかどうかは、季節によって異なる中継地での餌の有無、渡りに適した風が吹くかどうかなどが関係していると考えられています。近年の衛星追跡やデータロガーの開発によって沢山の鳥の移動経路が分かって来ましたが、その中からループ型移動を行うことが判明した種の渡り経路の研究成果

< 2019-07 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

をご紹介いただきました。

google.co.jp

日本で繁殖するハチクマは、インドネシアなどの越冬地まで渡りをしますが、その経路は春と秋で異なることが知られています。秋は日本列島を南下した後、九州の西端から飛び立って東シナ海を横断して大陸に入りますが、春の渡りでは、越冬地から北上したのち朝鮮半島の北側まで回り込み、対馬を通過して日本に帰ってきます。これは、複数個体の追跡によって判明した固定した渡り経路で、たまたま1個体がこのように往復したというだけではありません。



アラスカで繁殖するオオソリハシシギやムナグロは、それぞれニュージーランドや太平洋の島々で冬を過ごしますが、彼らは大規模なループ型移動を行います。繁殖を追えた成鳥は、アラスカから一直線にどこにも立ち寄ることなく越冬地を目指します。オオソリハシシギの渡りはこれまでに知られている動物のノンストップの移動としては最も長いもので、およそ11,000kmを8日間で飛んだ記録があります。一方、春の渡りは北西に飛んで日本や中国などの東アジアを目指します。そこでしばらく栄養補給をした後、再び繁殖地のアラスカを目指して一気に渡ります。

他にも、ヨーロッパからアフリカに渡るカッコウや、北米から中米に渡るミドリツバメで、ループ型移動の例をご紹介いただきました。また、渡り鳥の高い定位能力や、本能的に備わっている渡りの衝動によってこうした渡りが行われていることもお話しいただきました。質疑応答では渡り鳥に関する沢山の質問が飛び交いました。

今回は、52名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた仲村さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Juneの過去ログを見えています。

June15日Saturday: 2019年6月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)



6月15日に、2019年6月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然史研究室専門員の平岡考さんに、「万国共通な学名が図鑑によって違うわけ〜キジやコウノトリはどうなってる?」と題してお話いただきました。

学名は、多くの図鑑に必ずといっていいほど掲載されています。和名の横にアルファベットの筆記体で書かれているのを覚えている方も多いと思います。スズメなら *Passer montanus* が学名です。スズメの英名は Tree Sparrow といますが、この他にもそれぞれの言語で呼ばれている名前があり、それらは全て俗名で、学名ではありません。

現在世界中で使われている学名は、国際的な規約によって使い方が定められており、属名と種小名の2つの名前で見られることから、2名法と呼ばれています。この方法はスウェーデンのリンネによって導入され、世界中の生きものの命に用いられています。

< 2019-06 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)

しかし、学名はラテン語で書かれているため、多くの人にとってはその意味を理解できないものです。では、なぜ学名は図鑑に書かれているのでしょうか？

鳥の博物館友の会

google.co.jp

たとえば、以下の3つの鳥

スズメ *Passer montanus*

イエスズメ *Passer domesticus*

ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus*

は、いずれも和名に「スズメ」と付きますが、ウミスズメはスズメの仲間ではありません。学名を見ると、ウミスズメだけ属名が違うことが分かるので、これだけが遠縁の鳥だということが分かります。学名を見ると、どの鳥とどの鳥が近いグループなのかを読み取ることができるのです。

また、読むことのできない言語で書かれた書物でも、学名さえ書かれていれば、何の種についての記述なのかを知ることができます。



図鑑に書かれている学名が、文献によって違っていることがしばしばありますが、これはなぜなのでしょう。たとえば、コウノトリの学名は山階（1986）では *Ciconia ciconia* と表記されていますが、日本鳥学会（2012）では *Ciconia boyciana* となっています。これは、日本に渡来する東側の集団 *boyciana* を亜種とするか、それとも独立した種として扱うかによります。かつては中央アジアからヨーロッパに分布するシュバシコウ *Ciconia ciconia* と同種の亜種として扱うことが多かったのですが、最近では別種として扱っているため、このような変化が起こっています。

一方、キジでは、山階（1986）では *Phasianus versicolor* となっていますが、日本鳥学会（2012）では *Phasianus colchicus* とされています。コウノトリの場合とは逆に、かつては別種として扱われていたものが、同じ種内の亜種として扱われるようになったためにこのように学名が変化しています。最近では日本産のいくつかのキジの亜種を大陸のものとは別種として扱うことが多くなりましたので、再び元に戻る可能性が高そうです。

世界共通の名前である学名も、分類の説が変化することによって変わることが分かりました。一見ややこしく思えますが、分類の説が1つに決まれば学名も決まるので、学名を見ればどのような分類を採用しているかがわかる便利なものということもできると感じました。

今回は、18名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた平岡さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Mayの過去ログをしています。

May22日Wednesday: 野生鳥獣の保護について (お願い)

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

5月18日、鳥の博物館の職員通用口から3mほど離れた駐車スペースの脇に、見慣れない段ボール箱が置かれていました。中を見ると、弱り切ったフクロウの成鳥が入っていました。誰かが保護した、または違法に飼育していたフクロウを遺棄していったものと思われます。現在までのところ、拾得者から当館宛への連絡はありません。



▲衰弱したフクロウ (強制給水の際に撮影)

千葉県における傷病鳥獣の保護は、保護した人が責任を持って行うことになっています。

< 2019-05 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4

5 6 7 8 9 10 11

12 13 14 15 16 17 18

19 20 21 22 23 24 25

26 27 28 29 30 31

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくろウトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

<https://www.pref.chiba.lg.jp/shizen/choujuu/syoubyou/hogo.html>

google.co.jp

当館は動物病院でも救護施設でもありませんので、治療や飼育をするための設備もスタッフもおりません。今回のように傷病鳥獣を無責任に押しつけられるような事態はこちらとしては大変困ります。連絡をいただけず、拾得状況や拾得場所が不明な場合、治療に必要な情報が得られず、もし回復したとしても野外に放鳥することができません。



今回は、休日・祝日は千葉県の担当窓口が開いていないため、一時的に預かって給水等の処置を行ったあと、21日に千葉県の担当者を経由して動物病院に引き渡されました。18日にすぐに連絡をいただけなかったため、フクロウは大変衰弱しており、回復の見込みがあるかどうかは分かりません。今回のような方法での野生動物の保護は、保護される鳥にとっても百害あって一利なしと言えるでしょう。

これから多くの鳥が巣立つ時期になり、ヒナの誤認保護が増える季節です（ヒナの保護については[こちら](#)）。今後、このように無責任に当館に動物を遺棄された場合、警察に通報することも検討します。傷病鳥獣の保護を行われる方は、上記の千葉県のウェブサイトにかかれてある手順を順守し、きちんと行っていただきますよう、お願いをいたします。

May21日Tuesday: 2019年5月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



5月18日に、5月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所客員研究員の茂田良光さんに、「日本に渡ってくるハマシギの亜種はどれ？」と題してお話いただきました。

茂田さんは、これまでに繁殖地のアラスカ、マガダン、サハリンなどのハマシギの繁殖地で調査をされてこられました。今回はその繁殖地での調査のご経験をもとに、国内に渡来するハマシギの亜種についてお話をいただきました。

ハマシギ *Calidris alpina* は、小型のシギの仲間で、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の両方に広い繁殖分布をもっています。地域ごとに羽の色や体の大きさなどが異なる場合、種はいくつかの亜種に分けられることがありますが、ハマシギの場合、10亜種ほどに分けられています。これは世界のシギ科の鳥の中でも一番亜種の多い種のひとつです。日本国内ではハマシギは旅鳥または冬鳥ですが、いったいどの亜種が渡来するのでしょうか？

先月の千田さんのお話しでも紹介いただいたように、シギ・チドリのような渡り鳥の渡る道は、フライウェイと呼ばれ、カラーフラッグや衛星発信器など、様々な追跡手法によって調査が行われています。日本に渡来するハマシギについても、カラーリングやフラッグの調査によって調査が行われてきました。

日本鳥類目録第7版では、亜種ハマシギ *C. a. sakhalina* と亜種キタアラスカハマシギ *C. a. arctica* の2亜種が記録されていることになっています。しかし、これには注意が必要です。実は、標識によって繁殖地からの渡来が確認されているのは、これまでのところアラスカの北西部で繁殖する亜種キタアラスカハマシギのみなのです。

亜種ハマシギと亜種キタアラスカハマシギはよく似ており、特に冬羽や幼羽では見分けることは困難です。そのため、亜種ハマシギは分布域からは渡来していると推測されるものの、確実な記録はありません。そのため、どのくらい日本にきているのかについてはまだ謎のままです。亜種ハマシギの西側に繁殖分布する亜種 *C. a. centralis* の渡来の可能性についても良くわかっていません。

これらの他にも、北アジアの比較的低緯度で繁殖する亜種が2つあります。亜種カムチャッカハマシギ *C. a. kistchinski* と亜種カラフトハマシギ *C. a. actites* です。これらは日本鳥類目録改訂第7版では検討中の種・亜種に含められていますが、日本は分布域に近いことから渡来している可能性が高いと考えられています。両亜種ともに国内でそれらしい観察例や捕獲例があるそうで、学術報告が待たれます。

まとめると、今のところ国内で確実な記録があるのは亜種キタアラスカハマシギのみ、そのほかにも3~4亜種の渡来可能性がありそうだったということでした。今後さらなる調査が進むことで、国内に渡来するハマシギの亜種がはっきりと分かることが期待されます。

今回は、26名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた茂田さん、ありがとうございました。

(5/23内容の修正を行いました。)

May10日Friday: あびこ自然観察隊「シギ・チドリに会いに行こう」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya

5月6日に、あびこ自然観察隊「シギ・チドリに会いに行こう」を実施しました。22名の方にご参加いただき、シギ・チドリを探して、我孫子市東部の水田地帯を歩きました。



新木駅に集合してから5分ほど歩くと、手賀川沿いの水田地帯に出ました。冬の間はカラカラだった水田に水が張られ、多くの水田で田植えが終わっていました。

さっそく、遠くの水田にムナグロの群れが降りているのが見つかりました。良く見ると、少し背の低いキョウジョシギも入っています。ムナグロはきよろきよろしながら走って餌を捕っていたのに対して、キョウジョシギはひたすら下を向いて畔や田んぼの泥を嘴でひっくり返していました。



△白と黒のコントラストが美しい夏羽になったムナグロ。



△畔で採食するキョウジョシギ。

「ピューイ」と笛のような涼しげな声が聞こえると、灰色のシギが飛んできました。キアシシギです。田んぼの畦沿いを歩きまわって水生昆虫の幼虫を食べているようでした。



△キアシシギ（左端）とムナグロ、キョウジョシギ（右端）の群れ。しばしば異なる種類が群れをつくっているのが見られます。

さらに歩いていくと、チュウシャクシギが飛んでいるのが見付き、少し距離はありましたが田んぼの中に降りて餌を探しているところも観察することができました。手賀沼周辺で普通に見られるシギ・チドリの中では最も大きな種類で、アメリカザリガニなどを好んで食べます。



△水田に降りて餌を探すチュウシャクシギ。

この4種類は、いずれも長距離を渡る種で、繁殖地の北極圏と越冬地のオーストラリアなどを毎年往復しています。その渡りの途中で日本に立ち寄り、渡りのために必要な栄養を補給しているのです。渡りの中継地として、日本の水田がとても重要な役割を果たしていると考えられています。

今回の観察会では、一部の方が見られたコチドリとタシギの2種を加え、併せて6種のシギ・チドリの仲間を観察することができました。

てがたんのコースとは異なる開けた農地の環境の中で、自然観察を楽しみました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。また鳥の博物館の自然観察会にご参加ください。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Aprilの過去ログをしています。

April20日Saturday: 2019年4月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



4月20日に、4月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所保全研究室専門員の千田万里子さんに、「フラッグ付きシギ・チドリの観察記録～窓口担当者のよもやま話～」と題してお話いただきました。

千田さんは、保全研究室で鳥類標識調査のデータ管理の業務を担当されていますが、昨年からはシギ・チドリのフラッグの記録のとりまとめの担当をされています。今回はシギ・チドリの追跡調査の概要や、その業務に関わるさまざまな発見などをお話いただきました。

ロシアの東部やアラスカで繁殖するシギ・チドリの仲間は、日本を通過して、オーストラリアや東南アジアで越冬します。彼らが渡りの時に通過するルートをフライウェイといい、日本は「東アジア・オーストラリアフライウェイ」の中継地点として、シギ・チドリの保全上重要な位置を占めています。しかし、生息地となる湿地の開発などによって、シギ・チドリの個体数は急激に減少してお

< 2019-04 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

り、保全する必要が出てきています。

google.co.jp

シギ・チドリの渡りルートを調べて保全に役立てるため、各国でシギ・チドリの脚にフラッグと呼ばれるプラスチック製の標識を付けて渡りを調べる調査が行われています。フラッグは脚の色や組み合わせにより、装着した場所が分かるようになっています。最近では、フラッグの中に数字や文字が刻印されたフラッグも使われるようになり、より詳細な個体の移動データが蓄積されています。日本では環境省が山階鳥類研究所に委託して調査を実施しています。



フラッグを付けて放鳥された鳥は、一般のバードウォッチャーによる情報提供によって、その後の追跡がなされています。今回は千田さんが担当したいくつかの事例をご紹介します。

南オーストラリアで放鳥され、その後茨城県と石川県で発見されたミユビシギ、カムチャッカ半島で放鳥され、その後国内で発見されたトウネン、また、同一のフラッグによって北海道から茨城県へ移動したミユビシギの例などをお話しいただきました。また、東京湾で一年中観察報告されるダイゼンの若鳥からは、成鳥と幼鳥で異なる渡りの生態を読みとることができたとのことでした。また、最近ではウェブページやSNS上での報告もあるそうで、台湾からのアカアシシギの報告や、タイからのトウネンのフラッグの報告について対応したことをお話しいただきました。

こうしたフラッグの報告の件数は渡りのピーク時には月120件を超えることもあったそうで、1つ1つにお返事を出すのはなかなか大変なことだったそうです。季節によって報告されるフラッグの種類が異なるそうで、たとえば、9月になると全国的にカムチャッカ放鳥のフラッグを付けたシギ・チドリが報告されるようになるそうです。こうした変化を一般の方にも感じてもらえるよう、将来的には放鳥時の情報やその後の追跡結果が共有できるようなウェブサイトの立ち上げを目指したい、とのことでした。

(参考：千田さんにご紹介いただいた台湾のシギ・チドリの標識個体が見られるウェブサイト<http://resights.birdband.org/>)

今後も、フラッグ付きのシギ・チドリを観察、撮影されましたら、以下のウェブサイトにある案内の通りメールにてご報告をお願いしたいとのことでした。

http://www.yamashina.or.jp/hp/ashiwa/ashiwa_index.html#11

今回は、32名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた千田さん、ありがとうございます。次回のテーマトークは5月18日(土)に実施予定で、山階鳥類研究所客員研究員の茂田さんによるハマシギのお話です。詳細なご案内は近日中に鳥の博物館ウェブサイトに掲載いたします。

また、5月6日(月・祝)には我孫子市内でシギ・チドリの観察会を実施します。こちらもぜひ併せてご参加ください。

<http://www.city.abiko.chiba.jp/bird-mus/gyoji/event/index.html>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Marchの過去ログを見えています。

March16日Saturday: 2019年3月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



3月16日に、3月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所副所長の尾崎清明さんに、「ヤンバルクイナ野生復帰の現状と課題 ～放鳥の技術開発から～」と題してお話いただきました。

尾崎さんは、1981年のヤンバルクイナ発見の際から、チームの一員として研究や保全に携わってこられています。今回は、人工繁殖させたヤンバルクイナを野生に返すための試みについてお話いただきました。

ヤンバルクイナはクイナ科ニューギランドクイナ属のクイナの1種で、フィリピンやインドネシアに分布しているムナオビクイナに近縁な種です。この仲間は太平洋の島々に分布しており、飛べない種類が多く含まれています。そのため、人が持ち込んだネコやネズミなどの外来種に捕食されやすく、多くの種が絶滅してしまったり、絶滅が危惧されています。世界で沖縄島だけに分布するヤンバルクイナもその一つで、屋外にいるネコや、ハブの駆除のために持ち込まれたマ

< 2019-03 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)

ングースなどによって捕食されたことによって数を減らし、すでに発見時から絶滅が危惧されていました。

鳥の博物館友の会

google.co.jp

ヤンバルクイナの個体数を回復させるため、野外でのマングースの駆除と合わせて、飼育下で個体数を増やすプロジェクトが2005年からスタートしました。飼育下での繁殖が成功し、個体数が増えてきたのと合わせて、2014年から試験放鳥がはじまりました。しかし、2017年までの放鳥では、40%以上の個体が1カ月以内に死亡してしまったそうです。尾崎さんたちが発信器で追跡したところ、その原因はほとんどがカラスやハブ、イヌ・ネコによる捕食でした。また、野外で捕獲して追跡した個体と比べて、捕食による死亡率が高いことも分かりました。人工繁殖で生まれた個体は、自然下であれば親から教わることのできる天敵の脅威を学習する機会がないためではないかと推測されました。



そこで、尾崎さんたちは飼育下で繁殖させたヤンバルクイナに天敵のハブの脅威を教える実験を始めました。具体的には、飼育ケージの中にハブの模型を入れて、同時に録音した親の警戒声をスピーカーで流すことで、ハブが危険な存在であるとヒナたちに学習させることを試みました。さらに、人工飼育個体は放鳥後に人工物の近くを好む習性があることから、ネコなどに捕食されてしまうリスクが高まっていると考えられるため、放鳥地をなるべく人工物の少ない2か所に絞って検証を行いました。

その結果、2018年に放鳥した個体はまだ全てが生存しているようで、これらの試みは効果があったと考えられるとのこと。また、2018年に初めて、放鳥個体での野外での繁殖が確認されました。ヤンバルクイナの保全には、他にも交通事故など様々な課題がありますが、人工飼育個体の放鳥が野外の個体群の補強につながっているのは明るいニュースといえそうです。今後は、放鳥初期の生存率を高めるため、さらに野外の生活に馴染む技術の開発に取り組んでいきたいとのことでした。

今回は、34名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた尾崎さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Februaryの過去ログをしています。

February19日Tuesday: あびこ自然観察隊「オーイ！冬鳥くん」を実施しました

カテゴリ: General 投稿者: odaya



2月17日に、あびこ自然観察隊「オーイ！冬鳥くん」を実施しました。29名の方にご参加いただきました。

まず、2グループに分かれて、手賀の丘の林の鳥の観察からスタートしました。鳥影は少なめでしたが、開始してすぐ、林の中を移動するカラ類の混群に出会うことができ、木の上の方を移動するシジュウカラやヤマガラ、それに混じるキクイタダキやコゲラも見られました。カラ類の警戒声が出た後、林の上をかすめていくオオタカの姿も見ることができました。林の出口では、藪の中を移動するアオジや、草地の獲物を狙うモズなどを観察しました。

< 2019-02 >

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会



google.co.jp



▲大きい後羽（こうう）があるキジのメスの体羽を拾いました。

林を出ると、北西の風がかなり強く、厳しい観察条件となりました。そんな状況の中でも、ヨシ原に身を隠すマガモやカルガモなどのカモ類や沖に浮かぶカンムリカイツブリなどを観察しました。ヨシ原の小鳥は観察には厳しい条件でしたが、オオジュリンやアオジなどを少数観察できました。私たちに驚いて、キジの雄が飛び出してくる一幕もありました。



▲ヨシ原から飛び出すマガモの群れ（下見時に撮影したもの）。



▲ヨシ原の中で休息するアオサギ（下見時に撮影したもの）。



▲水路の縁にカワセミのペリット（消化できない魚の骨などをまとめて吐き出したもの）を見つけました。

田んぼの中の道では、耕起された農地で餌をとるカワラヒワやヒバリを観察しました。ヒバリの中には、強風の中を舞いあがって囀る個体もいて、春の訪れを感じることができました。再び林に戻ると、桜の林の周辺でジョウビタキやエナガが見られました。

2グループ合わせて、45種の鳥を観察することができました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。また鳥の博物館の自然観察会にご参加ください。

**February16日Saturday: 2月のテーマトークを実施しました
(2019.2.16)**

カテゴリ: General

投稿者: saito



今日は、山階鳥類研究所コレクションディレクターの鶴見みや古さんに「3種のカワセミの謎～山階鳥研のステンドグラス～」をテーマにお話いただきました。

山階鳥類研究所の前身の山階家鳥類標本館は、渋谷の南平台に1932年に建設され、その玄関には山階芳麿博士が研究対象と考えた動物地理区を現した3種のカワセミの仲間がデザインされたステンドグラスがはめ込まれました。そのデザインをよりどころに描かれたとされる小林重三（こばやししげかず）のイラストが、山階鳥類研究所報告の第1巻の表紙に使われ、それぞれの鳥の名前が記載されています。旧北区のアカショウビン、東洋区のヤマショウビン、オーストラリア区のシロガシラショウビンです。

鶴見さんは、ステンドグラスにデザインされたヤマショウビンとシロガシラショウビンは、その種の特徴と異なることに気がつきました。これがなぜなのか調べてみた結果についてお話してくださいました。

ヤマショウビンについては、単にデザイン上の問題で本来の特徴が省略されたとしか考えられなかったようですが、シロガシラショウビンは現在のナンヨウショウビンの一亜種シロガシラナンヨウショウビンの姿でした。実は、ステンドグラスが作られる前に、鳥類研究者の靄山徳太郎氏がサイパン島で採集した鳥をシロガシラショウビンという和名で記載し、これがステンドグラスに使われ、その名前がそのまま記載されたのだそうです。その後ニューギニア等周辺に生息する別の種をシラガシラショウビンと呼び、靄山徳太郎が記載した種をナンヨウショウビンと呼ぶようになったために、このような混乱が起こったとのことでした。

和名は、学名とちがって使い方に統一されたルールがないため、しばしば混乱を招きます。しかし日本人にとっては便利なので、多くの人が共通した名前を使えるように、例えば日本鳥学会では日本鳥類目録に和名を記載しています。多くの人がこの名前を使い、これが標準和名となっています。

また、鶴見さんは、ステンドグラスの原画を誰が描いたのか、またステンドグラスをよりどころに描いたとされる小林重三の絵がなぜ左右反転されているのかなど、このステンドグラスにまつわる未解決の疑問も示されました。

日本の鳥類学の黎明期の頃の時代背景や山階鳥類研究所が創設された頃の様子もイメージできるお話でした。

ご来場の皆様、お話して下さった鶴見さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2019年Januaryの過去ログをしています。

January22日Tuesday: 2019年1月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



1月19日に、1月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室専門員でコミュニケーションディレクターの平岡考さんに、「小型ツグミはどこへ行った？～変化した昔の『ヒタキ科』の分類～」と題してお話いただきました。

平岡さんは、日本鳥学会の目録編集委員として日本鳥類目録改訂第7版の編集に携われました。目録改訂第7版では、DNAの塩基配列による系統関係の研究結果を踏まえた分類が取り入れられ、鳥の分類の単位の大きな見直しが行われました。今回の話題の「小型ツグミ類」もそのひとつです。

かつては、形や生態を元に生物のグループ分けが行われていました。似た形をしている種どうしは、近縁であるだろうという推論に基づくものです。目録6版までの分類体系では、「ヒタキ」と名の付く鳥には、大きく分けて2つあり、ジョウビタキやノビタキなどの地上で餌を採るグループは、アカハラやトラツグミと同

< 2019-01 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

じツグミ科に含まれ、キビタキやコサメビタキなどの空中で飛びながら餌を採るグループはヒタキ科に含まれていました。前者は長く丈夫な脚を持っているのに対し、後者は短く地上を歩くのには適さない形をしています。前者の地上で餌を採るグループは、「小型ツグミ」と呼ばれていました。

google.co.jp



近年になって、DNA配列による系統解析が行われると、意外なことが分かりました。かつて形が似ているので同じだと思われていたツグミ科とヒタキ科の鳥は、それぞれ互いに近いわけではなかったのです。たとえば、キビタキを含むグループは、コサメビタキよりも、ノビタキを含むグループに近いことが分かりました。そのため、かつてはツグミ科とヒタキ科に分かれていた「ヒタキ」と名の付く鳥は、新しい分類体系では新しい「ヒタキ科」として一つにまとめられることになりました。

こうして、地上性のヒタキの仲間も、「小型ツグミ」として区別しなくてもよいようになりました。しかし、地上で餌を採るヒタキの仲間をまとめて扱うのは便利ですので、何か新しい言葉がほしいところです。英語ではヨーロッパコマドリをさす「Robin」やノビタキ類をさす「Chat」などの単語があるのですが、日本語では何かよい名前は無いだろうか、と問いかけられて、このお話を締めくくられていました。

今回は、45名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた平岡さん、ありがとうございました。

January 6日Sunday: 鳥凧教室を開催しました！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

1月6日に、新年恒例の鳥凧教室を開催しました。鳥凧教室は、鳥の博物館友の会の鳥凧同好会と共催で1月と5月に開催している工作イベントで、ポリ袋で簡単に作れるように工夫された鳥の形の凧を作成しました。



▲テーブルごとに鳥凧同好会のスタッフと一緒に製作を行いました。



▲終了後、親水広場で作った凧を揚げてみました。風が弱い穏やかな天気だったので苦労した人もいましたが、一度揚がると上空の風によって高く上げることができました。

大人・子ども合わせて18名の参加がありました。ご参加いただいたみなさん、丁寧に説明していただいた鳥凧同好会のみなさん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Decemberの過去ログをしています。

December19日Wednesday: 企画展「友の会展」取材対応

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

昨日、開催中の企画展「友の会展」の様子を取材にJ:COMさんが来館されました。友の会会長の木村稔さんが企画展について説明し、インタビューに答えました。友の会内の同好会メンバーも参加し、活動内容や作品についてお話ししました。

この様子は12月20日木曜日の午後5時40分から「デイリーニュース」内で放送されます。ぜひご覧ください。



< 2018-12 >

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

検索

検索

ナビゲーション

- [前の月](#)
- [次の月](#)
- [今日の投稿](#)
- [過去ログ](#)

カテゴリ

- [全てのカテゴリ](#)
- [General](#)
- [お知らせ](#)
- [今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- [我孫子市鳥の博物館](#)
- [フィールドミュージアム](#)
- [ふくろうトピックス](#)
- [とりはく自然通信](#)



鳥の博物館友の会

[google.co.jp](https://www.google.co.jp)



December15日Saturday: 12月のテーマトーク開催しました
(2018.12.15)

カテゴリ: General

投稿者: saito



今日のテーマトークは、今年の4月に山階鳥類研究所に入所された、保全研究室研究員の油田照秋さんにお話していただきました。テーマは「協力したり、独占したり、托したり、だましたり～鳥たちの多様な繁殖の仕方～」。

油田さんが一番関心を持っているのは、野外で観察される鳥の外見や行動の不思議さであり、研究活動としては、これを適応度（遺伝子を残せる尺度・次世代を残せる尺度）という究極要因で説明したいとのことでした。

始めに、鳥の配偶システムについて一夫一妻・一夫多妻・一妻多夫・乱婚それぞれの仕組みと適応的な理由について具体例を挙げながら紹介くださいました。近年DNA解析による遺伝的な親子関係が分かるようになると、配偶システムのような社会的関係では知り得なかったつがい外父性が多くの鳥で見つかるようになり、現在では全鳥種の90%で見つかるそうです。また、つがい外父性は、その割合が種によって異なることはもちろん同種内でも環境条件によって異なり、また世代を越えた観察が必要であることから、多くの研究が行われているが、適応度を示すのはなかなか難しいそうです。

ちなみに油田さんが研究されていた北海道のシジュウカラでは、雛の10%、巣の40%でつがい外父性が見られたそうです。こちらの適応度のお話については、今回のテーマトークの時間内では収まりきれない内容でしたので、次回を楽しみにしたいと思います。

お話の最後に、進化生態学・行動学・保全生態学などの研究対象として他の分類群に比べて鳥類はすぐれている（ヒトと感覚的な共通点も多いので、観察しやすく、数も多すぎず少なすぎず、種が識別しやすく、生態系の指標となりやすく、興味深い行動や姿が見られる）ことを示されました。

また、野外で鳥を見た場合、その種は何か、個体数と生息環境はどうか、雌雄や成幼はどうか、観察時期はいつか、どんな行動をしていたか、など意識することで、その鳥の形や行動がどのように適応的に進化してきたのか知ることにつながるという野鳥観察のすすめをお話されました。

参加された来館者からは、過去に観察した鳥の行動に関する質問が多くあり、改めて人は鳥の行動に関心を持ち、よく観察していることが分かりました。

お話いただいた油田さん、そして参加された32人の皆様、ありがとうございました。

(追伸) 今日のお話の内容について詳しく知りたい方は、京都大学出版会から発行された「鳥の行動生態学」の「第3章鳥の配偶システムとつがい外父性」を油田さんが執筆されていますので、参照ください。

December11日Tuesday: 友の会展がスタートしました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

12月8日土曜日に「第82回企画展友の会展」がスタートしました。前回ブログでご紹介しました通り、鳥の博物館友の会が中心となってつくった展示会です。友の会の活動成果を見にぜひご来館下さい。(友の会展は2019年1月14日月曜まで)

鳥の博物館友の会に興味を持たれた方は入会についても資料がありますので、会場でご覧下さい。





December 7日Friday: 友の会展準備中

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

明日12月8日(土)から来年の1月14日(月・祝)まで、第82回企画展「第14回友の会展」を開催します。鳥の博物館友の会は博物館活動に協力しながら、鳥や自然を学び、親睦を深めることを目的として平成13年4月に設立されました。

博物館活動への協力のほか、友の会に設けられた5つのグループ(みて歩こう会・デジカメ同好会・鳥凧同好会・鳥絵同好会・万葉集同好会)ごとの自主活動も活発です。友の会展ではその活動成果を紹介します。

会員が中心となって展示準備しました。その様子を少しご紹介。企画展は明日スタート。ぜひご来館下さい。







Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Novemberの過去ログを見えています。

November27日Tuesday: **あびこ自然観察隊「晩秋の手賀川」を実施しました！**

カテゴリ: General 投稿者: odaya



11月23日（金・祝）にあびこ自然観察隊「晩秋の手賀川観察会」を実施しました。秋らしい好天に恵まれて、農地の冬鳥を観察しました。

新木駅に集合し、歩いて手賀川沿いの農地を目指します。農道に入っすぐに、遠くをハイタカが2羽飛び、遠くの杭にノスリが止まっているのが見つかりました。休耕田の草地は、ホオジロ、カシラダカ、カワラヒワが採食や休息のためにやってきていました。農道を歩いて行くと、乾いた水田に下りていたヒバリとタヒバリが鳴きながら飛びだします。てがたんコースとは少し異なる開けた農地の鳥たちをたくさん観察することができました。

連結して水田の水たまりに産卵していたアキアカネ、日当たりのよい草地に残っていたモンキチョウ、ウラナミシジミ、ヒメアカタテハなどの昆虫も観察しました。手賀川に出ると、カンムリカイツブリやアオサギなど、水辺の鳥も見

< 2018-11 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会

ことができました。今年はカイツブリ類の数がやや多いようです。帰り道の農道では、湿った田んぼの二番穂に隠れるタシギや、頭上を舞ってくれたノスリ、モズのはやにえ、橋のたもとのイタチのふんなどの発見がありました。

google.co.jp



▲休耕田のコガマの先端に刺さっていたモズのはやにえにされたハネナガイナゴ。触っていたら外れてしまいました。



▲街路樹のケヤキの中に見つけたカワラヒワの古巣。2.5m程の高さに、枯れ草やビニールひもなどを使って作られていました。

駅までの帰り道では、街路樹のケヤキの中にカワラヒワやキジバトの古巣が見つかりました。今回は、29種+外来種2種を観察することができました。14名の方にご参加いただきました。また鳥の博物館の自然観察会に足をお運びください。

November25日Sunday: フクロウの巣箱を新しくしました

カテゴリ: General

投稿者: someya

先日、鳥の博物館が設置しているフクロウの巣箱を新しいものにかきかえました。

この巣箱には観察のためのカメラがついていて、ライブ映像と過去の画像を鳥の博物館のホームページからご覧いただけます。数日間、画面が真っ暗だったのはこの作業のためです。いつも楽しみにして下さっている方にはご迷惑をおかけしました。



古くなった巣箱をおろします
巣箱内に残った食べ残し等は事前に回収しました



役目を終えた巣箱



新しい巣箱



脚立にのぼって作業です

新しくなった巣箱にもフクロウがやってきました。例年通りだと、3月から6月頃に野生のフクロウの子育てが見られます。今年も見られるでしょうか。繁殖期以外にも巣箱をのぞくフクロウが確認できます。



鳥の博物館のフクロウカメラの様子をチェックして下さいね。

November 9日Friday: ジャパンバードフェスティバル2018、他イベントの様子

カテゴリ: General 投稿者: someya

11月3日、4日はジャパンバードフェスティバル2018が開催されました。天候に恵まれ、多くの来場者で賑わいました。



会場のひとつとなっています鳥の博物館も来館者で混み合っていました。ご来館いただきましてありがとうございました。



館内では「ハシビロコウの帽子づくり」と展示をみて答える「鳥博クイズ」を実施しました。好評で時間内に定員いっぱいとなってしまいました。次回もイベントを開催予定です。お楽しみに！





屋外イベントの「てがたんinJBF」では会場周辺の身近な自然をご紹介します。



会場では鳥の博物館友の会のテントブースやミュージアムショップも賑わっていました。



市民スタッフのみなさん、友の会のみなさん、JBFボランティアのみなさん、2日間お疲れさまでした。

November 6日Tuesday: JBFゲストトークを実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya



11月4日（日）に、JBFゲストトークを実施しました。「海ゴミ GO ME！
～ゴミが鳥や動物に与える影響、減らすために私たちができること～」と題して、神奈川野生動物救護連絡会の葉山久世さんにお話しいただきました。

葉山さんは獣医師として、神奈川県で野生動物の救護事業に携わってこられました。保護されてくる野生鳥類の救護原因は、犬・猫による捕獲や巣立ちヒナの誤認保護が多いようですが、釣り糸や釣り針が原因のものも多くあり、こうしたことから海岸に漂着するゴミについて関心を持ったそうです。

実際に釣り糸・釣り針が野生動物に悪影響を与えた例を、カモメ類、カワウ、

カワセミなど多くの被害鳥の画像を使って紹介いただきました。こうした釣り糸や釣り針による被害は、元気なうちは捕獲することが難しく、保護できるのは死が近づいてからになってしまうため、救護されるのは被害鳥のごく一部です。そのため予防が重要になるわけですが、各地域によって釣りに関わるゴミの種類やそこにいる鳥の種は様々であるため、各地域の状況に応じた対策が必要となる、とのことでした。

海岸に漂着するゴミを調べると、場所によって異なるものの、人工物由来のゴミのうちおよそ50%ほどがプラスチックのごみでした。プラスチックは紫外線や波風を受けて細かく砕けて、マイクロプラスチックと呼ばれる小さい粒になります。こうした粒はPCB（ポリ塩化ビフェニル）などの有害な物質を吸着して、周囲の海水の数十万倍もの濃度で蓄積していることもあるそうです。こうしたマイクロプラスチックが野生動物に与える影響はまだ未解明の点が多くありますが、ミズナギドリの仲間では、胃の消化液によって化学物質が溶け出してしまい、体内に取り込まれることが分かっています。私たちがプラスチックを日常的に使い、捨てるようになってから、まだ50年ほどしかたっていないので、今後どのような影響が起こりうるのか、きちんと研究していく必要があるとのことでした。

それでは、海のゴミに私たちはどのように向き合えばよいのでしょうか？

まず、できるだけゴミを出さずに適切な方法で処理を行うこと、自然環境の中に流出してしまったゴミについては、マイクロプラスチックになる前にできるだけ多く除去するため、ゴミ拾いを続けることが重要だそうです。また、ゴミ拾いの活動をすることによって、ゴミを意識し、ゴミを少なくすることや適切な分別の意識を高めることにつながるのではないかと葉山さんはおっしゃっていました。

今回は29名の方にご来場いただきました。お話しいただいた葉山さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

November 6日Tuesday: 第28回JBF鳥学講座を実施しました！

カテゴリ: General

投稿者: odaya



11日3日（土）に、第28回JBF鳥学講座をアビスタホールにて開催しました。今回は「スズメ研究のスズメ」と題して、北海道教育大学函館校准教授の三上修さんにお話しいただきました。

スズメは私たちに最も身近な鳥ですが、知っていそうで知らないことがたくさんあります。まず、スズメの住んでいる都市の環境についてお話しいただきました。日本の鳥のおよそ600種のうち、カルガモ、ハシブトガラス、ハクセキレイなど、30～50種が都市にも生息しています。都市環境は、餌は一般に考えられているよりも豊富で、小鳥にとっては天敵が少なく、冬の気温が高くて安全である、などの利点があるそうです。森林など他の生息地と比べると、種数は少ないけれど、個体数は多い、というのが都市の鳥類の特徴と言えるようです。

続いて、スズメの基本的な姿かたちや生態についてお話しいただきました。スズメの成鳥は頬に黒い斑があり、喉が黒いことが特徴ですが、生まれてから数カ月の間はこの黒い部分がはっきりしません。スズメの繁殖期は春から夏で、東京では3月に巣作りがはじまり、4月に産卵、5～8月に子育てを行います。スズメは、人家の隙間などの人工的な構造物を巣づくりの場所として利用することで、都市を主な生活の場としています。

では、身近な鳥であるスズメの数はどのように変化しているのでしょうか？ 三上さんは、各地での個体数調査、農作物の被害面積、標識調査や狩猟での捕獲数など、様々な方法でとられたデータを解析し、その全てがスズメの減少を示唆していることを突き止めました。1990年ごろと比較すると、現在ではおよそ50～80%ほど減少していると推定されるそうです。

その原因を突き止めるため、巣をつくる場所に注目して調査を行った結果、2000年以降に建てられた新しい住宅地では、古い住宅地に巣の密度が1/2～1/3になっていることが分かりました。また、NPO法人バードリサーチと協力して「子雀ウォッチ」という調査を展開し、全国でひと家族当たりヒナが何羽いたかを市民調査によって明らかにしました。その結果、403例のデータが集まり、特に都市部で巣立ち後のヒナの数が少ないことが分かりました。これらの結果から、巣を作る場所が少なくなり、1家族あたりのヒナの数が減っていることが、近年のスズメの減少に影響していることが分かってきました。

他にも、巣立った子スズメがうまく育っていない可能性や、親スズメの死亡率が高くなっている可能性も考えられるそうですが、これらの情報はなかなか検証が難しく、スズメの減少の要因については、まだ完全に解明されたわけではありません。今後のご研究が楽しみです。

最後に、スズメと人とのかわりについてお話しいただきました。鳥が街中にいることは、糞や騒音などのデメリットもありますが、昆虫や雑草を食べられる、自然を感じることができるなどのメリットがあります。また、文学、絵画、食からアニメまで、様々な場面にスズメが登場することを紹介いただきました。これらの文化的な価値は、スズメが身近にいるから、私たちがスズメのことを知っているから受けられるものです。知っているからこそ価値を感じ、それが社会全体の中で共有されていくことで、「スズメが身近にいる価値を引き

「継ぐサイクル」が回っていくとよいのではないか、というお話がとても印象に残りました。

質疑応答の時間では、会場から様々な質問やコメントが飛び交い、多くの方がスズメや身近な鳥に対して持っていた疑問が解け、鳥たちのことをより深く知ることができたのではないかと思います。

今回は、161名の方にご来場いただきました。お話しいただいた三上さん、ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。また、会場の収容人数の上限からお断りせざるを得なかったみなさま、大変申し訳ありませんでした。来年以降の実施方法について再度検討を行いたいと考えております。来年の鳥学講座を楽しみにお待ちしております。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Octoberの過去ログをしています。

October24日Wednesday: 10月のテーマトークを実施しました！

カテゴリ: [General](#)

投稿者: [odaya](#)



10月20日に、10月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室室長の山崎剛史さんに、「フクロウの翼のひみつ～その知られざる苦労～」と題してお話いただきました。山崎さんは生物模倣工学（バイオミメティクス）の研究者と共同研究を行い、フクロウの翼の構造について研究されています。

フクロウ類の多くは夜行性で、狩りを行う時に獲物に気付かれないように静かに飛ぶことができます。まず、フクロウが飛んでいるときにどれだけ静かなのか、昼行性の鳥であるハヤブサとハトの羽音と比較した動画を見せていただきました。確かに、同じ場所を同じように飛んでいても、フクロウの翼からはほとんど音が出ていません。

このように静かに飛べる理由は、翼に特殊な構造「セレーション(serration: のこ切りの歯状の縁)」が発達しているからだと言われています。セレーションは、翼の前縁にあるギザギザで、翼で風を切った時にこの細かいギザギザに

< 2018-10 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)

よって空気の流れの乱れが起こらず、風切り音が小さくなるようです。

google.co.jp



▲コミミズク(主に夜行性・哺乳類食)の風切羽に見られるセレーション。

静かに飛ぶことは他の鳥にも有利な特徴のはずですが、不思議なことに、セレーションが見られるのは主にフクロウの仲間に限られます。これはなぜなのでしょう？セレーションには何かデメリットがあるのでしょうか。

山崎さんたちは、これを確かめるために世界のフクロウ科の様々な大きさ、食性、行動の特性をもった49種の翼にあるセレーションの長さや発達度合いを比較しました。

すると、セレーションの発達度合いには、種ごとに大きな違いがあることが分かりました。セレーションは夜行性の種のほうが昼行性の種よりも発達していました。夜間の狩りには音を消すことが重要ですが、昼間の狩りにはそれほど影響しないのかもしれませんが。

さらに、主に食べる餌の種によっても大きく異なり、哺乳類食>昆虫食>魚食の順にセレーションが発達していたことが分かりました。水の中では空気中の音はあまり聞こえなくなるので、魚を食べる種にとってはセレーションは必要ないのかもしれませんが。

これらのことから推測されるのは、狩りをする時間帯、餌とする動物などの生態の変化によって、セレーションがすぐに失われてしまう進化が起こるのではないか、ということです。このことから、セレーションに何らかのデメリットがある可能性が考えられます。

そこで、翼の形状ごとに物理モデルによる解析をおこなった結果では、セレーションは羽ばたき飛翔の効率を下げるということが分かったそうです。こまめに羽ばたいて採食することの多い昆虫食のフクロウで、セレーションの発達が悪かった理由は、発達したセレーションは羽ばたきの効率を下げてしまうからである可能性があるとのことでした。

フクロウのなかまは、セレーションによって静かな飛翔を獲得したのと引き換えに、飛びにくさという「苦勞」をしていたのかもしれませんが。

今回は、40名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた山崎さん、ありがとうございました。

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Augustの過去ログを見えています。

August18日Saturday: 8月のテーマトーク実施しました (2018.8.18)

カテゴリ: General

投稿者: saito



8月のテーマトークは、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の浅井芝樹さんにお話をいただきました。今日のテーマは、「白い羽色異常はどういう仕組みで起きる？」でした。

野外で白化した鳥が見つかると、しばしばニュースに取り上げられ、例えば「アルビノのツバメ発見！」などの見出しがつけられます。しかし、これはまちがった用語の使い方であったということがよく分かるお話でした。

アルビノの定義は、メラニンを生体内で生成する時に必要なチロシナーゼという酵素を全く持たない色素異常であり、したがってアルビノ個体はメラニン色素を全く持ちません。羽色の白化に少し知識のある方ならば、アルビノは、虹彩にもメラニン色素が無いため、赤目であることをご存知かも知れません。虹彩にメラニン色素を持たない目は、絞りの無いカメラのようなもので、焦点が合わず、視覚をたよりに生きる鳥にとっては致命的異常だそうです。こうした理由から、野外でアルビノの個体が生き残ることは困難だろうとのことでした。

< 2018-08 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2 3 4

5 6 7 8 9 10 11

12 13 14 15 16 17 18

19 20 21 22 23 24 25

26 27 28 29 30 31

検索

検索

ナビゲーション

前の月

次の月

今日の投稿

過去ログ

カテゴリ

全てのカテゴリ

General

お知らせ

今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

我孫子市鳥の博物館

フィールドミュージアム

ふくるうトピックス

とりはく自然通信

鳥の博物館友の会

(アルビノではないがInoというメラニン色素が大きく変形する色素異常個体では、視力は保ったまま赤目になる場合があるため、アルビノと誤認されがちなので要注意とのこと)。

なお、野外で見られる白化について、次の6つの要因を紹介してくれました。

①Leucism (発生段階でのメラニン色素の体全体への配分異常)、②Progressive greying (年齢や病気による進行性灰色化)、③Brown (ユーメラニンの変形による褐色変異)、④Dilution-pastel (フェオメラニンとユーメラニンの減少による淡色化)、⑤Dilution-isabel (ユーメラニンの減少による淡色化)、⑥Ino (フェオメラニンとユーメラニンが大きく変形することによる色素異常)、以上です。

今日のお話を聞いた人は、これからは野外で白化個体を見つけたとき、原因が何かとても気になることでしょう。

今日のお話の基となったのは、イギリスの雑誌British Birdsに掲載されたHein van GrouwさんのWhat Colour is that bird?という記事だそうです。より詳しく知りたい方は、Google Scholarで入手可能ですのでぜひご覧ください。

google.co.jp



August 2日Thursday: あびこ自然観察隊「手賀沼のプランクトンと水鳥を観察しよう」を実施しました (2018.8.2)

カテゴリ: General

投稿者: saito





7月26日（木曜日）に引き続き、手賀沼課との共催で「手賀沼のプランクトンと水鳥を観察しよう」を実施しました。

今回は、19人の小学生と10人の保護者、総勢29人が参加しました（前回は、小学生9人、保護者4人の計13人参加）。

午前中は、ペットボトルと台所の水切りネットを使ったプランクトンネットづくり、午後は、手賀沼遊覧船での船上バードウォッチングとプランクトン採集および観察と盛りだくさんでした。

船上バードウォッチングでは、カルガモ、コブハクチョウ、カワウ、オオバン、カイツブリ、コサギ、ダイサギ、アオサギ、ツバメ、サシバなど見られました。船尾でボラの稚魚がさかんにはなっていました。水縁には、ナガエツルノゲイトウやオオミズキンバイなど特定外来生物に指定されている侵略的外来植物がそれぞれ白と黄色の花を咲かせて繁茂しているのを皆で確認しました。

手賀沼で採集したプランクトンを観察した結果、クンショウモやクラミドモナス、ボルボックスなどの緑藻類やメロシラ、エスガタケイソウ、イカダケイソウなどの珪藻類などの植物プランクトンのほか、ワムシの仲間やラッパムシなどの動物プランクトンも見られました。

参加者は、これまであまり見たことの無い微小な顕微鏡下での生き物観察や水上からという非日常的な視点からの鳥の観察をそれぞれ楽しんでくれたようです。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Julyの過去ログをしています。

July29日Sunday: 鳥博セミナーを実施しました(2018.7.29)

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [saito](#)



今日の鳥博セミナーは、現在開催中の企画展「我孫子の都市鳥展」に関連して都市鳥研究会副代表の越川重治さんにお話をいただきました。

「とかく嫌われ者のムクドリだが、その生態を知るときっと親しみがわくはず。今日はそんなお話をしたい。」という前置きから始まり、「ムクドリは本当に残念な生き物か?」というテーマでお話されました。

始めに、小林一茶や野中兼山など江戸時代の句や書に出てくるムクドリや、宮沢賢治の童話「鳥をとるやなぎ」でのムクドリの描写など、昔から人はムクドリをさまざまな形で意識していたことを紹介されました。また、ムクドリの仲間やムクドリの分布域など基本的なことも紹介され、ムクドリについて一般的な情報を皆共有できました。

また、身近な鳥なのに意外に知られていない日光浴のしぐさなど、ムクドリが思いのほか個性的であることが分かる画像がいくつか紹介され、ムクドリがより身近になりました。

その上で、ムクドリの繁殖生態について紹介されました。架設した巣箱での観察により、餌条件など繁殖条件が悪くなる繁殖期の後半では、前半に比べて

< 2018-07 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

一巣卵数も少なく、孵化時期に差が見られるようになることなど、繁殖時期による繁殖活動のちがいなども紹介されました。このほか、交尾シーンや巣箱をめぐるメス同士の激しい争いのシーンの映像もあり、ムクドリがどのように子育てしているのか、よく分かりました。

次に、ムクドリの生態系の中での働きについてのお話の中では、農業害虫と言われる昆虫類を食べるほか、樹木の種子散布の役割を担っていることが紹介されました。ムクドリは、果樹の食害や埒（ねぐら）での騒音や糞害で嫌われていますが、生態系の一員として重要な役割を果たしていることが分かりました。

最後に、ムクドリの埒についてお話され、近年、埒が郊外から都市へ移って来ていること、特に高いビルが立ち、人が多く、明るい駅前を好むことが紹介されました。そして、特に高いビルがあることが、ムクドリが埒を選ぶ重要な要素であることを各地の調査結果をもとに示されました。

さらに、多くの自治体が行っている駅前のムクドリの追い出しについては、個々に追い出しを行うだけでは、もぐらたたきのように、ほかの自治体へ一時的に追い払うだけであること。解決には自治体の広域的な連携と、ムクドリの埒をそれぞれ少しずつ受け入れることが必要であることを強調されました。

今後は、ムクドリの生態系サービスへの貢献度も考慮し、埒での騒音や糞害への対応についても、単純に追い払うだけではなく、ある程度許容することも市民のコンセンサスを得て計画に含め、人とムクドリがほどよく関わり合うことができるような方向性を目指すことが必要だと思いました。

市内・市外からご来館くださった58人の皆様、講師の越川さん、ありがとうございました。

July26日Thursday: 「世界の鳥」コーナーにワタリガラスが登場！

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

鳥の博物館3階の常設展「世界の鳥」コーナーにワタリガラスの剥製を展示しました。

ワタリガラスは、日本では北日本の一部でしか見られない鳥ですが、世界的には分布が広く、ヨーロッパやアメリカでは普通種です。古くから人に親しまれ、神話や伝説にも登場する人との関わりが深い鳥です。

google.co.jp





▲ワタリガラスの本剥製標本。この鳥は雌の幼鳥（第一回冬羽）です。

この標本は、スウェーデンで拾われた死体から作られたもので、標本交換によって鳥の博物館にやってきたものです。研究用の剥製の形で受け入れましたが、展示のために剥製師さんによって義眼を入れてもらい、展示用の本剥製の形に作り直してもらったものです。

国内で見られる亜種よりも少し小さいようで、並んで展示されているハシブトガラスと同じくらい大きさです。逆に考えると、本州のハシブトガラスの大きさに驚かされます。



▲カラス類3種の展示。上から順に、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ワタリガラス。

ハシブトガラスやハシボソガラスと嘴の形や、羽毛の光沢の違いを比べてみましょう！

July21日Saturday: 7月のテーマトークを開催しました (2018年7月21日)

カテゴリ: General

投稿者: saito



今日は、山階鳥類研究所客員研究員の園部浩一郎さんに「博物画家・小林重三と日本の三大鳥類図鑑」をテーマにお話いただきました。

日本の三大鳥類図鑑とは、黒田長禮による鳥類原色大図説（以後略して黒田図鑑）、山階芳麿による日本の鳥類と其の生態（以後略して山階図鑑）、清棲幸保による日本鳥類大図鑑（以後略して清棲図鑑）のことです。これらの日本の鳥類学の発展の上で、欠くことのできない重要な三つの図鑑すべてに小林重三は図版を描いています。

しかし、図鑑における図版の持つ意味の重要性とは裏腹に、当時は、図版作製者名は図鑑に記載されなかったため、小林重三の名前を知る者は、ほとんどいませんでした。

1991年に、園部さんが編集する日本野鳥の会の会誌「野鳥」に、児童作家の国松俊英さんが小林重三の生涯について記事を連載し、1996年にはこの成果が「鳥を描き続けた男 鳥類画家小林重三」として出版されました。これに前後して、平塚市博物館・流山市生涯学習センター・町田市立博物館でそれぞれ小林重三の特別展が行われたことで、すぐれた鳥類画家である小林重三の名が知られるようになりました。

今日のお話では、三大鳥類図鑑の特徴やそれにあわせた図版の作製の過程などが紹介され、三大鳥類図鑑に欠かせぬ小林重三の図版の価値に改めて気づかされました。また、それぞれの図鑑の著者である鳥類学者の細かく厳しい要求に応えることができた小林重三の技術の高さや意気込みも感じることができました。

また、お話の最後に神奈川県で描いた海岸風景の油絵が示され、小林重三自身は、風景画家としての思いが強かったというお話は印象的でした。三大鳥類図鑑の中にも図鑑用の図版と違う風景画家としての構図が見られるもの

がある理由もよく分かりました。

講師の園部さん、また暑い中ご来館いただいた皆さま、ありがとうございました。

※お詫びと訂正

4行目（「以後略して山階図鑑」とすべきところ「以下略して黒田図鑑」と誤記載していましたので訂正いたします）saito2019.6.28

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Juneの過去ログをしています。

June20日Wednesday: あびこ自然観察隊「チョウゲンボウを観察しよう」を実施しました！

カテゴリ: General 投稿者: odaya

6月17日（日）に、あびこ自然観察隊「チョウゲンボウを観察しよう」を実施しました。

チョウゲンボウは小型のハヤブサの仲間で、我孫子市をはじめとする関東地方の平野部では一年中見ることができる鳥です。今回は、利根川に架かるJR常磐線の橋脚で繁殖するチョウゲンボウの子育ての様子を観察しました。



堤防から望遠鏡を使い、繁殖に影響のない距離から観察を行いました。

< 2018-06 >

日 月 火 水 木 金 土

1 2

3 4 5 6 7 8 9

10 11 12 13 14 15 16

17 18 19 20 21 22 23

24 25 26 27 28 29 30

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)

[次の月](#)

[今日の投稿](#)

[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)

[General](#)

[お知らせ](#)

[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)

[フィールドミュージアム](#)

[ふくるうトピックス](#)

[とりはく自然通信](#)

[鳥の博物館友の会](#)



google.co.jp



餌のカナヘビを運ぶ雌親（下見時）。当日はネズミ類や小鳥を運んでくる様子が観察できました。



橋脚に止まる巣立った幼鳥。

チョウゲンボウのほかにも、河川敷で繁殖するオオヨシキリ、セッカ、キジなどの鳥や、巣立ちヒナを連れたムクドリやハシボソガラスなど、この時期ならではの鳥たちの様子を観察することができました。

当日は、20名の方にご参加いただきました。また鳥の博物館の自然観察会にご参加ください。

June16日Saturday: 6月のテーマトーク実施しました(2018.6.16)

カテゴリ: **General**

投稿者: **saito**



今月のテーマトークは、山階鳥類研究所自然誌研究室専門員の小林さやかさんに「拾われた珍鳥はどうするの？ー標本材料収集の現場からー」というテーマでお話いただきました。

まず始めに、小林さんが日常行っている、鳥類資料の入手から標本作製、データベースへの登録、保管といった標本管理の一連の手順について紹介されました。最近では、分析技術の進歩により、剥製や骨格標本ばかりではなく、DNAサンプルなど保存する資料が多岐にわたるそうです。

さて、今日のテーマの珍鳥が拾われた場合ですが、国内での記録が少ないか無い場合が多く、この記録を論文として客観的に記載しておかなければ、日本鳥類目録にも採択されず、日の目を見ないことをお話されました。

また、珍鳥について論文として記述する際に、その鳥のことを調べる過程で、既存の日本の資料には誤りを発見することも多く、こうした間違いを正す意味でも、論文文化は重要であるとのことでした。

最後に、珍鳥を拾った場合にすべき鉄則として、①記録を論文として発表すること、②資料を標本として残すこと、③その種について深く調べて既存の記載と比べてみることを挙げられました。

珍しい鳥（もちろん普通種でも同様ですが）の死体を拾った場合は、研究所や博物館へ連絡し、記録を残すことができるようにしましょう。

June 1日Friday: 学生ボランティア募集スタート

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

今年も夏休みイベント向けの大学生ボランティア(大学・短期大学・専門学校)を募集します。お申し込み期間は本日から7月1日までです。

イベントの内容は自然に関するものや工作が中心で、8月の土・日・祝日に実施します。主な活動内容はイベント当日の担当や補助・イベント当日までの準備・館内施設の利用方法の案内です。毎回参加できなくてもOK!博物館事業に興味のある方はぜひこの機会をご利用下さい。



夏休みイベント向け
大学生スタッフ募集

夏だ！鳥博でボランティアしよう

鳥の博物館で市民スタッフとして活動してみませんか。市民スタッフとは行と館内で事業に取り組み、ボランティアスタッフです。夏のイベントをサポートしていただく、学生の内定スタッフを募集します。夏は暑と一緒に、家族者がイベントを楽しみ、また、交流に活かすことができるようサポートします。イベントの内容は自然に関するものや工作が中心です。博物館事業に興味があり、積極的に関わってみたいという方がこの応募条件に合致します。事前に説明や練習もありますので、ボランティア初心者の方でも安心してご参加いただけます。

【募集内容】
大学生スタッフ(大学・短大・専門学校)
 (主な活動内容)
 ・イベント当日の設営や補助 ・ イベント当日までの準備 ・ 館内施設の利用方法案内
 (活動日時)
 日：平成30年8月4日(土)から8月26日(日)までの毎週土、日、祝日の午後
 (全ての日に参加できなくても構いません)
 時間：午後1時から3時30分
 ※7月29日(日)にオリエンテーションと内定説明(練習)あり
 ※夏休みイベント終了後も希望により継続可
 (希望応募資格)
 ・博物館好きな方 ・ 工作好きな方 ・ 自然好きな方
 ・ 物に人と話すことが好きな方 ・ イベントを盛り上げる意欲のある方
 ・ メールでの連絡が可能な方 ※ 負担する経費がなくても大丈夫です(待遇)
 我孫子市市民スタッフ要綱に基づき、1回の活動につき500円の報酬支給
 【応募方法】
 鳥の博物館市民スタッフ申込書(鳥の博物館にて配布、または博物館ウェブサイトからダウンロード可)に必要事項を記入し(写真貼付)持参、郵送可。 ※郵送に「大学生スタッフ募集」と本書を
 【選出期間】
 平成30年7月1日(日)午後4時30分 ※郵送の場合は必着
 【選考方法】
 書類選考、平成30年7月18日(月・祝)までに決定事項通知を郵送

職員や市民スタッフと協力しながら、一緒に夏のイベントを盛り上げましょう。ご応募お待ちしております。

我孫子市鳥の博物館 〒270-1145 千葉県我孫子市鳥野山234-3 電話04-7185-2212

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Mayの過去ログを見えています。

May19日Saturday: 5月のテーマトークを行いました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [minou](#)

今回は山階鳥類研究所保全研究室研究員の仲村昇さんにお話をいただきました。テーマは「鳥の木登り、ヒトの木登り」でした。



始めに、鳥の木登りについて、鳥の体のつくりなどを交えてご紹介頂きました。鳥といえば「飛ぶ」というイメージが強いですが、飛行能力を獲得する前、鳥の祖先は手足を使って木に登っていました。鳥が飛べるようになった後、猛禽類やブッポウソウ、ヒタキ類など、森林に暮らしていた鳥のほとんどは木に登らなくなりました。アマツバメの仲間は飛ぶことに特化してきたため、歩くこともしなくなり、飛び上がることもできなくなりました。しかし、フクロウのヒナやツメバケイ、キツツキの仲間など一部の鳥は今でも木に登ります。海鳥のオオミズナギドリは地面から飛び立つことが苦手です。そのため木に登ってから飛び立ちます。

また、鳥を扱う研究者も、鳥の巣の採集、鳥の標識調査、巣箱の設置など様々な目的で木に登ります。ぶり縄（2本の棒とおよそ10mのロープを組み合わ

< 2018-05 >

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4 5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

せた道具) や、ロープと安全帯を使って登ることもありますが、道具を使わずに木の枝を手掛かりにして登ることもあるそうです。体力と経験が必要ですが、身軽に早く登ることができるという利点があります。実際に木に登っていく様子や、ヘルメットに付けられたカメラからの風景もご紹介いただきました。

google.co.jp



今回は22名の方にお集まり頂きました。ご参加頂いた皆様、お話を頂いた仲村さん、ありがとうございました。

May14日Monday: Enjoy 手賀沼！2018当日の館内は

カテゴリ: General 投稿者: someya

鳥の博物館は無料開館日でした。午後からは雨の予報にもかかわらず、多くの方が来館され、館内は賑やかでした。館内では鳥の博物館友の会が中心となっていた「鳥のゴムバンドをつくろう」を実施しました。



みなさん夢中です



好きに飾り付けができます



どんな鳥にしようかなあ



かわいらしい鳥のできあがり♪

May13日Sunday: バードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました

カテゴリ: General 投稿者: odaya

本日5月13日（日）に、毎年恒例となっているバードウィーク手賀沼探鳥会を実施しました。この観察会は我孫子野鳥を守る会との共催で実施しています。



集合場所の様子。例年通り、1時間・2時間の各コースの班に分かれて観察を行いました。



対岸にいる水鳥を望遠鏡を使って観察しました。オオバン、カイツブリなどの行動を観察することができました。



遊歩道の近くでキジのけたたましい「ケン、ケン」という声が聞こえ、目立つ

所に姿を現しました。羽毛の光沢などをじっくり観察することができました。



今年初めて、手賀沼でコブハクチョウの家族を2グループ確認しました。この7羽のヒナを連れた家族（画像には6羽写っています）と2羽のヒナを連れた家族が見られました。ヒナの姿は大変かわいらしいものですが、もともと日本にいなかった鳥で、農業や生態系に影響を与えることを忘れてはいけません。

この時期らしく、シジュウカラなどの留鳥、夏鳥ではオオヨシキリなど、30種の鳥たちに会うことができ、我孫子野鳥を守る会のみなさんのサポートのおかげで充実した観察ができたと思います。午後から雨になりましたので、なんとか天気が持って幸いでした。

一般の方55名、我孫子野鳥を守る会から34名の参加がありました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました（5/15 参加者数を訂正しました、5/30我孫子野鳥を守る会の参加者数を訂正しました）。

May 9日Wednesday: 紙ひこうきイベントと鳥凧教室を開催しました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

連休中はどこかにお出かけになりましたか。仕事だった方はお仲間です。

さて、鳥博では5月3日と5月6日にイベントを実施しました。その様子をご紹介します。

まずは、5月3日に実施した「飛べ！鳥の紙ひこうき」です。





次は、5月6日に実施した「鳥凧教室」です。





ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。

Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Aprilの過去ログをしています。

April21日Saturday: 4月のテーマトーク行いました (2018/4/21)

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [saito](#)



今日のテーマは、「富士山の野鳥と垂直分布～どの鳥がどの高さに棲んでいるのか～」で、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の森本元さんにお話をいただきました。

森本さんは、富士山をフィールドにルリビタキをはじめさまざまな鳥類の生態を研究しています。はじめに、車中泊しながらのハードな調査の実際と富士山の地史的・生態学的・文化的な特徴の紹介がありました。また、富士山周辺には、火山特有のがれ場、高原、ヨシ原、広葉樹林、針葉樹林、植栽された人工林など、多様な環境があることが紹介され、それだけ鳥相も豊富であることが理解できました。

富士山は海拔0mから3776mまで日本一高低差のある山ですが、例えば関東と北海道の鳥相が違うように、標高ごとにはっきり鳥相が異なり、短い距離の移動で大きな鳥相の変化を感じる醍醐味があることも紹介されました。

垂直分布のお話では、キジ科、フクロウ科、カッコウ科、キツツキ科、ハト科、ヒバリやビンズイ、ツグミ科、ヒタキ科、ムシクイ科やウグイス、シジュウ

< 2018-04 >

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

カラ科、ホオジロ科、アトリ科、カラス科など各グループごとに解説され、グループ内の各種の生息する標高が異なっていることが紹介されました。その中で、フクロウやコゲラ、キジバト、ヒバリ、ウグイス、ホオジロ、ハシブトガラスなど、平地の市街地周辺で見られる鳥が意外にも標高2,000mあたりまで生息していることが分かり、これらの鳥の環境適応性の広さを改めて感じました。

これからの季節、山の鳥たちは繁殖期に入り、よくさえずり、活発に活動します。お話を聞いて、皆、富士山に鳥を見に行きたくなったと思います。ありがとうございました。

google.co.jp



April 4日Wednesday: ツバメの巣を一緒に探しましょう

カテゴリ: **General** 投稿者: **someya**

最近はずばめの姿もよくみかけるようになりました。気温25℃夏日、なんて日がありますが、まだ4月に入ったばかりですよ。ん〜、日ざしも強い！

鳥の博物館前の水の館では、4月1日からツバメのコーナーがはじまりました。鳥の博物館と鳥の博物館友の会と一緒にいるツバメの巣調査の紹介です。展示は友の会のみなさんによるものです。昨年の調査の結果も展示しています。今年の調査は5月10日から5月31日まで。この調査は市民のみなさんご参加いただけます。

調査の参加方法は？ツバメの巣って？気になる方はぜひ水の館のツバメコーナーをご覧ください。水の館の目の前には鳥の博物館があります。こちらも合わせてご覧ください。





Copyright | Nucleus CMS v3.64 | Valid XHTML 1.0 Strict | Valid CSS | [トップページに戻る](#) | Since 14,Mar.2008

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Marchの過去ログをしています。

March25日Sunday: 鳥博セミナーを実施しました (2018.3/24)

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

3月24日に、鳥博セミナー「カンムリウミスズメは何羽いる？—ウミスズメ科鳥類の保全をめざして—」を開催しました。海鳥保全グループの大槻都子（くにこ）さんと、カンムリウミスズメ調査のために来日しているマイケル・パーカーさんにお話しいただきました。



最初に、大槻さんにカンムリウミスズメの分類や生態についてお話しいただきました。カンムリウミスズメは世界で5種いるウミスズメ属のうちの1種で、世界で日本の周辺にのみ分布しています。限られた地域にしか分布せず、個体数が減っているため、国際的な絶滅危惧種に指定されています。無人島に侵入したネズミなどの哺乳類、人間活動の影響で数を増やしたカラスによる捕食が現在では大きな問題になっているほか、重油の流出による油汚染や漁業による混獲も脅威であると考えられています。

野生動物を絶滅から守るためには、どこにどのくらいの数があるのか、また、

< 2018-03 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくるうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

数が減っているのか増えているのかの情報を得ることが重要です。

カンムリウミスズメは無人島で3~5月に繁殖します。落石の多い急峻な崖で繁殖するため、人間が近寄りたり巣の数を数えるのも容易ではありません。そのため、カンムリウミスズメが世界に何羽いるのかは、これまで正確に分かっていませんでした。1995年にまとめられた報告では、25か所の繁殖地に最大3000つがいほどが分布しているとされていましたが、2017年に大槻さんたちがまとめた結果によると、41か所の繁殖地に2800-4100つがいほどが繁殖していると推定されるそうです。

一見数が増えているように見えますが、これは各地で調査が盛んになって新しい繁殖地が見つかるためで、数が増えているかどうかは分かりません。しかも、2000年以降に繁殖が確認された島は41箇所のうち、25か所にすぎません。この25か所のうち、正確な個体数調査が行われているのはわずか4か所で、他の場所での推定値は非常にざっくりとしたものでした。

そこで、大槻さんたちはアメリカのセグロウミスズメの調査で開発された「スポットライトサーベイ」という調査手法を導入して個体数調査に乗り出しました。この手法は、夜間に繁殖地の岸近くの海上にウミスズメ類が集まることを利用し、船の上からスポットライトを使ってウミスズメの数を数えるものです。かなり多くの数がカウントでき、さらには繁殖地のすぐ前の海上に集まるので、新しい繁殖地を見つけるのにも適した方法です。

2011年から宮崎県と福岡県の繁殖地で調査を行い、セグロウミスズメと同様に、カンムリウミスズメでも個体数の推定が出来ることを確かめました。宮崎県の繁殖地では2012年には最少でも1700つがい繁殖しているだろうという推定値を得ることが出来ました。今後は、この調査を行う時間帯や時期についても検討していくため、今シーズンからそれを検証するための野外調査を行うとのことでした。

大槻さんたちの活動の成果の報告書は、海鳥保全グループのウェブサイトからダウンロードすることができます。

<https://marinebird-restorationgroup.jimdo.com/>

続いて、カリフォルニア環境科学研究所のマイケル・パーカーさんに、カリフォルニアのDevil's Sliderockという岩礁で繁殖するウミガラスの保全活動について紹介していただきました。

この場所では、1979年まで2500羽ほどのウミガラスが生息していましたが、1980年代に個体数が急激に減少しました。このころに刺し網漁に使用される糸の種類が変わり、多数のウミガラスが混獲されてしまったことが原因です。さらに追い打ちをかけたのが、1986年に起こった油の流出事故で、1990年代初めまでには全く繁殖しなくなってしまいました。油の流出事故を起こしたApex Houston社からの賠償を受けて、Devil's Sliderockへウミガラスを呼び戻す取り組みが90年代の半ばから始まりました。

集団で繁殖するウミガラスの生態を利用し、たくさんのウミガラスのデコイ（模型）と動いている個体がいるように見せかけるための鏡を設置し、さらに近隣のコロニーで録音された音声から岩の上から流されました。すると、誘引を開始した年から少数のウミガラスが戻ってきて、繁殖をはじめました。これらの取り組みのあとでウミガラスの数は急速に回復し、現在では年によって変動

google.co.jp



はあるものの、おおむね元の個体数と同程度まで戻すことに成功しました。この成功の要因としては、当初の誘引のデザインが良かったこと、近くに10万羽ほどが繁殖する大きなコロニーがあること、捕食者がもともと少なく、同所で繁殖するアオノドヒメウによって繁殖地が防衛されていることがあげられるそうです。

パーカーさんのお話のあと、アメリカでどのように刺し網漁が禁止されたのかや、ウミガラスでの成功例をどのようにカンムリウミスズメをはじめとするウミスズメ類の保全に応用できるかについて、質問や議論が交わされました。今回は38名の方にご参加いただきました。お話しいただいた大槻さん、パーカーさん、ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました。

March22日Thursday: 仮剥製標本の製作講座を実施しました

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [odaya](#)

3月17日に、鳥の博物館の市民スタッフと友の会の方を対象に、標本の製作講座を実施しました。昨年に続いて、山階鳥類研究所 自然誌研究室の岩見さんを講師にお迎えし、13名の参加者のみなさんにウミネコの仮剥製標本の製作に挑戦してもらいました。



まず、岩見さんから、標本とは何か、鳥の標本はどのように集められ、どのようにつくられるのかについてお話しいただきました。



鳥の体を模して造られたぬいぐるみを使って、鳥の標本の作り方をわかりやすく説明いただきました。



1人につき1羽のウミネコの成鳥を剥いていきます。小さな鳥と違って大きいので作業がしやすい一方、個体によっては脂肪がたくさんついていて処理が大変でした。



皮むきが終わったら、取り出した胴体部分を解剖して生殖器を確認し、性別を判定します。ウミネコのような雌雄で外部形態が大きく異なる種では、この段階でチェックしておくことがとても重要です。



翼についた筋肉の除去の仕方を学びました。適切な状態で保存するためには、手足や頭部についた虫に食われる可能性のある組織は取り除かないといけません。長く保存して利用される標本をつくるためには、根気よく作業を続ける必要があります。

今回は鳥が大きく脂がついている個体が多かったこともあり、完成にはいたりませんでした。標本作製において大事な皮むきの過程を体験していただくことが出来ました。今後もこのような講座を開催して、標本作製の方法について普及を進めていきたいと思います。講師の岩見さん、参加された皆さま、お疲れさまでした。

March10日Saturday: 3月のテーマトークを行いました(2018.3.10)

カテゴリ: General 投稿者: saito



今日のテーマトークは、山階鳥類研究所自然誌研究室専門員の平岡考さんにお話をいただきました。

テーマは、「幻の絶滅鳥ミヤコショウビンの謎を追う」。山階鳥類研究所所蔵の標本資料の中で、ある意味で最も有名なミヤコショウビンについてのお話でした。この種が存在していたという証が、この標本1点だけということから、如何に希少な標本かが分かります。その希少さが、その存在根拠を薄いものとしていることも事実です。

平岡さんは、ミヤコショウビンという種の存在をめぐる疑念の一つ、採集地について、採集者である田代安定の記録を追ったそうです。しかし、宮古島で採集したのか、あるいは別の場所（例えばグアム）で採集したのか、決定的な証拠は見つからなかったそうです。

DNA分析により、いずれミヤコショウビンという種の真偽に決着が着く日が来るかもしれません。当時の時代背景を考えると、とにかく世界中の人跡未踏の地にどんな鳥が生息しているのかを把握することが鳥類学上重要で、新種を次々と発見し記載することにエネルギーが注がれた事が想像できます。そうした成果の一つ一つを糧に、現代の鳥類学は進歩して来たのでしょう。

※山階鳥類研究所のミヤコショウビンに関して、同研究所のホームページに平岡さんによる紹介記事がありますので、ぜひご覧ください。

<http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/shozomeihin/meihin17.html>

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Februaryの過去ログをしています。

February15日Thursday: あびこ自然観察隊「オーイ！冬鳥くん」を実施しました

カテゴリ: General 投稿者: odaya



2月11日に、手賀の丘少年自然の家との共催の観察会「オーイ！冬鳥くん」を実施しました。49名の方にご参加いただきました。

まず、手賀の丘の林の中で鳴き声を頼りに小鳥の姿を探しました。声のする方を肉眼でみて、動く影を見つけて双眼鏡を向けていきます。ドングリを食べるヤマガラや、下草の中を移動するアオジの群れ、そして、人懐っこいルリビタキの雄を観察することができました。

< 2018-02 >

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

検索

検索

ナビゲーション

- 前の月
- 次の月
- 今日の投稿
- 過去ログ

カテゴリ

- 全てのカテゴリ
- General
- お知らせ
- 今日の一枚

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

- 我孫子市鳥の博物館
- フィールドミュージアム
- ふくるうトピックス
- とりはく自然通信
- 鳥の博物館友の会



google.co.jp



頭部から背面が青く美しいルリビタキの雄。このようになるまで2~3年かかると言われてます。(画像は下見時のもの)

林を出て田んぼの中を歩くと、モズやツグミ、カワラヒワが電線に止まったり、地上で餌を食べているのが見られました。田んぼのような広い環境では、肉眼で見つけるのが難しいので、双眼鏡でいそうな場所をチェックしていきます。遠くでキジの「ケーンケン」という囀りも聞かれました。



草に止まって休むツグミ。木の実が無くなってくる2~3月ごろには地上に降りて餌を取ることが多くなり、姿が見やすくなります。(画像は下見時のもの)

手賀沼沿いに出て沼の水鳥を観察しました。風が弱く穏やかだったので、カモ類はあまり多くありませんでした。岸沿いにいたカンムリカイツブリやコガモ、アオサギなどを望遠鏡で観察しました。沼沿いのヨシ原に潜む小鳥は動きが活発で、オオジュリン、アオジ、ホオアカ、セッカなどを観察できました。穏やかな日には、ヨシの中を動く音や、ヨシを割って餌を取っている音にも注意してみましよう。



冬羽のカムリカイツブリ。当日は、夏羽に変わりつつある個体が1羽見られました。（画像は下見時のもの）

沼沿いを歩いていると、突然、足下から大きな鳥が飛びだしました。タカの仲間のノスリの幼鳥です。沼の岸で死んでいたオオバンを食べていたようでした。木の枝にとまったところをじっくりと観察することができました。



飛び出して枝にとまったノスリ（一番高い木の枝）。食事を邪魔してごめんなさい。



ノスリが食べていたオオバンの死体。死んだ生き物は、他の生き物が命を維持するための糧になります。

田んぼの中を歩いて手賀の丘へ戻り、12時ごろに鳥合わせをして解散しました。2グループ合わせて、42種の鳥を観察することができました。冬は手賀沼周辺では種数と個体数が最も多く、バードウォッチングの楽しい季節です。環境ごとの探し方のコツを活かして、お近くの自然観察を楽しんでみてください。

February12日Monday: 2018年2月のテーマトーク実施しました

カテゴリ: General

投稿者: odaya



2月10日に、2月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の齋藤武馬さんに、「南西諸島の鳥類の不思議をDNAから探る」と題してお話しいただきました。

南西諸島は鹿児島県から沖縄県にかけて約1200kmもの長さに渡って連なる島々です。生物の分布を研究する生物地理学では、南西諸島は旧北区と東洋区の境界に位置します。琉球列島は1500万年前には大陸の一部でしたが、その後、海面の高さの変化が起こると、大陸とから切り離されたり、くっついたりを繰り返してきました。南西諸島は、大隅諸島からトカラ列島までの北琉球、奄美諸島と沖縄諸島の中琉球、都諸島と八重山諸島の南琉球の3つに大きく分けられます。北琉球と中琉球の間にはトカラ海裂（渡瀬線）、中琉球と南琉球の間にはケラマ海裂（蜂須賀線）と呼ばれる深い海があります。海面が下がった時でも、これらの海裂によって島々のつながりが断たれて生物の分布の拡大の障壁となり、独自の生物相が形成されてきました。

南西諸島には、本土とは異なる種や亜種の鳥が分布しています。日本の固有種の11種の鳥のうち、7種が南西諸島に分布しており、固有の亜種も多く分布しています。齋藤さんが関わっている日本の鳥類のDNAバーコーディングは、国内に分布する鳥類のDNAの短い配列のデータベースを作り、羽一枚からでも簡単に種の同定が出来るようにするプロジェクトです。この研究にともなって、南西諸島の鳥類の系統関係などが明らかになってきました。

イイジママシクイやアカコッコは、世界でも伊豆諸島と北琉球にだけ繁殖する、変わった分布を持つ鳥です。そのうち、遺伝子が調べられているイイジママシクイは、伊豆諸島の集団とトカラ列島の集団で、4.8%もの遺伝的分化があることが分かりました。南西諸島にだけ分布するアカヒゲは、奄美以北に分布する亜種アカヒゲと、沖縄本島に分布する亜種ホントウアカヒゲの間に、深い遺伝的な分化があることが明らかになり、いくつかのチェックリストではすでに別種として扱われています。奄美諸島に分布するオオトラツグミは、現在はトラツグミの亜種とされていますが、囀りや形態が大きく異なることから別種とする意見もあります。DNAバーコーディングでも、大きな違いがあることが分かり、今後別種にされる可能性が高そうです。また、ヒヨドリについては、奄美・沖縄と大東諸島の集団が、それぞれ国内の他の集団に比べて大きく分化していることが明らかになっています。今後、分類学的な研究が行われていくことで、これらを種として扱うかどうかが決まっていくでしょう。

今回は、44名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた齋藤さん、ありがとうございました。

鳥博日記

過去ログ

あなたは現在、2018年Januaryの過去ログをしています。

January28日Sunday: 企画展「日本の海鳥～カンムリウミスズメと行く海の旅」スタート

カテゴリ: General 投稿者: someya

昨日、企画展「日本の海鳥～カンムリウミスズメと行く海の旅～」がいよいよ始まりました。海に囲まれた日本の周りには多様な海鳥が生息しています。

本企画展では「海鳥ってどんな鳥?」「カンムリウミスズメと行く海の旅」「海鳥が減っている?」の3つのテーマでご紹介しています。海鳥の標本がズラリ80点以上!この機会にぜひご来館下さい。



カンムリウミスズメの「まごたろう」が海鳥についてご紹介
なぜ「まごたろう」って名前なの?その理由は企画展で見つけて下さいね

< 2018-01 >

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

検索

検索

ナビゲーション

[前の月](#)
[次の月](#)
[今日の投稿](#)
[過去ログ](#)

カテゴリ

[全てのカテゴリ](#)
[General](#)
[お知らせ](#)
[今日の一枚](#)

ログイン

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

リンク

[我孫子市鳥の博物館](#)
[フィールドミュージアム](#)
[ふくろうトピックス](#)
[とりはく自然通信](#)
[鳥の博物館友の会](#)

google.co.jp



海鳥ってどんな鳥？



今回の主役、カンムリウミスズメの標本もちろん展示しています



「カムリウミスズメと行く海の旅」のお話を読めば、カムリウミスズメがどのような暮らしをしているのかよくわかります



人間の活動が海鳥にどのような影響を与えているのでしょうか

January17日Wednesday: 職場体験 久寺家中学校編2日目

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

昨日・今日と2日間、久寺家中学校の生徒さんが職場体験に来館されました。博物館の仕事を色々経験してもらいました。その様子を少しご紹介します。次回は来館者としてぜひ遊びに来て下さいね。



収蔵庫の標本整理

標本の種類や取り扱い方をお話しました。



ボランティアの活動表作成

バランスを考えながら活動日・場所を決めます。



パネル作製の模擬体験

パネルやラベルとはどんなものなのか、情報が伝わるように気を付けてつくりました。



完成

カワセミガイドに使う資料と、クサガメ水槽の表示をつくってくれました。
上手にできましたので使わせていただきます。

January16日Tuesday: 1月のテーマトーク実施しました

カテゴリ: General

投稿者: odaya



1月13日に、1月のテーマトークを開催しました。今回は、山階鳥類研究所自然誌研究室研究員の岩見恭子さんに、「鳥の標本ってどんなもの？はくせい標本の作り方」と題してお話いただきました。

鳥類の標本は、剥製（はくせい）、羽毛、卵、骨格などの資料を半永久的に保存可能なように加工したものです。標本は、種の同定や分類、どのように進化してきたかなど、様々な研究に欠かせないものです。山階鳥類研究所では、主に野外で死んでしまった鳥を収集し、標本として資料を後世に残す活動を行っています。

山階鳥類研究所ではおよそ7万点の鳥類標本を保管しています。それだけ収集しても、まだ集める必要があるのか、疑問に思う方もいるかもしれません。生き物の生態や分布は不変のものではなく、時代とともに変化しています。採集地や採集場所とともに標本を保存することで、過去の情報も遡って言うことができるのです。実際に、博物館標本を用いて、温暖化に伴う鳥の形態の変化や、羽毛に蓄積されている有害な化学物質の変化を調べた研究も行われています。地域や時代を代表する証拠を残していくことが、将来の研究の可能性を広げることにつながるのです。

岩見さんは、鳥のはくせい標本の作り方を説明するために、カケスをモデルにしたぬいぐるみを作って持参されました。はくせいをつくる時にどの部分を切り離して、中にはどのような芯を入れるのか、分かりやすく実演しながら説明していただきました。

そのあと、参加したみなさんに実物の標本に触れてもらいました。コアホウドリの翼標本や、ネコとオジロワシの頭骨の重さ比べなど、標本にさわったり、においをかいだりすることで、実際の標本がどんなものなのか、理解を深めていただけたと思います。

41名の方にお集まりいただきました。ご参加いただいたみなさま、お話しいただいた岩見さん、ありがとうございました。

January 8日Monday: 鳥凧教室

カテゴリ: [General](#) 投稿者: [someya](#)

本日、鳥凧教室を実施しました。鳥の博物館友の会の鳥凧同好会が中心となって、準備や説明を行いました。友の会会員や市民スタッフも説明係になりましたが、鳥凧イベントのベテランばかりで順調にすすみました。

カラフルなポリ袋でつくった凧で、見た目もキレイ、しかもよく揚がります。

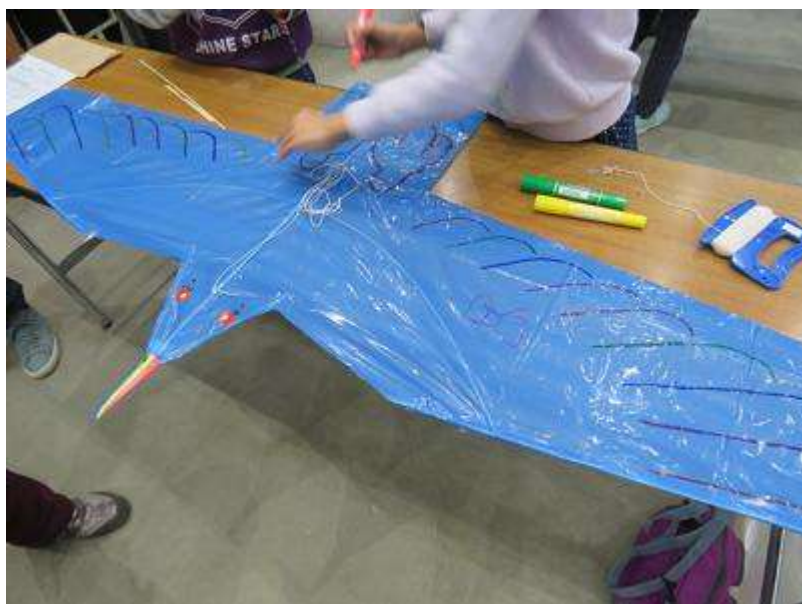


作業の様子

可愛い凧もありましたのでご紹介。



カワセミをイメージしてペインティング



カラフルでリボンが可愛い



最後はつくった凧と一緒に記念写真を撮りました。

雨が降ってきたので凧揚げは中止。凧揚げに良い場所を探して、ぜひ凧揚げして下さいね。カラフルで目立つこと間違いなし！ご参加いただきましてありがとうございました。

次回の鳥凧教室は5月の連休中に実施予定です。お楽しみに。